奈良女子大学構内遺跡

発掘調査概報Ⅳ

1989年

奈良女子大学

序

このたび、「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅳ」の刊行が、関係各位のご協力によって、実現の運びになりましたことを喜びたいと思います。

今回の発掘は、本学の研究・教育の発展上さしせまった課題となっていた情報処理センターの設置と図書館の増築に伴うものでありましたが、かつて未調査に終っていた旧奈良奉行所跡地に本格的な発掘調査を施行する機会ともなりました。これによって奉行所周囲の濠の位置を確定することができましたほか、古代・中世・近世にわたる生活の遺物が数多く出土しました。とくに土器類については、これまでの学内の出土遺物と合わせて、かなりまとまった考察も可能になったもので、意義あることと存じます。

今回も奈良国立文化財研究所から絶大なご援助を頂き、調査と資料整理、概報作成まで遂行することができました。また、花粉分析について学外から貴重なご論考を頂いたほか、刊行までご尽力下さった発掘調査会、事務局、臨時文化財調査室の皆様に深く感謝の意を表します。

平成元年３月

奈良女子大学長　出　口　庄　佑

総　目　次

図書館増築予定地の調査
情報処理センター棟予定地の調査
あとがき

原色図版

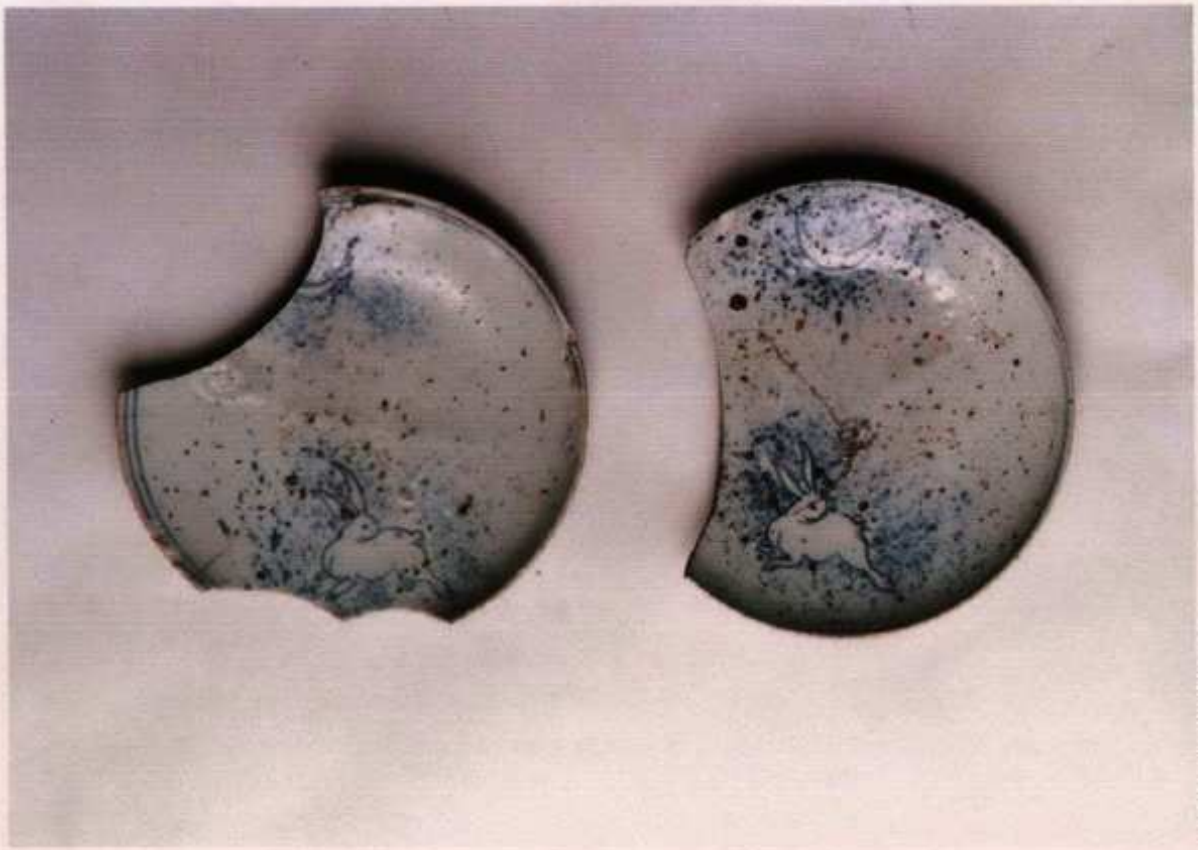
図版1　伊万里染付皿（Ⅱa期）
2　伊万里染付皿（Ⅱb期）
3　中国製染付磁器・伊万里染付皿鉢（Ⅱb期）
4　京焼風陶器（Ⅱc期）
5　唐津系青緑釉陶器（Ⅲ期）・伊万里染付皿鉢（Ⅲ期）

伊万里染付皿（Ⅱa期）

伊万里染付皿（Ⅱa期）

図版2

伊万里染付皿（IIb期）

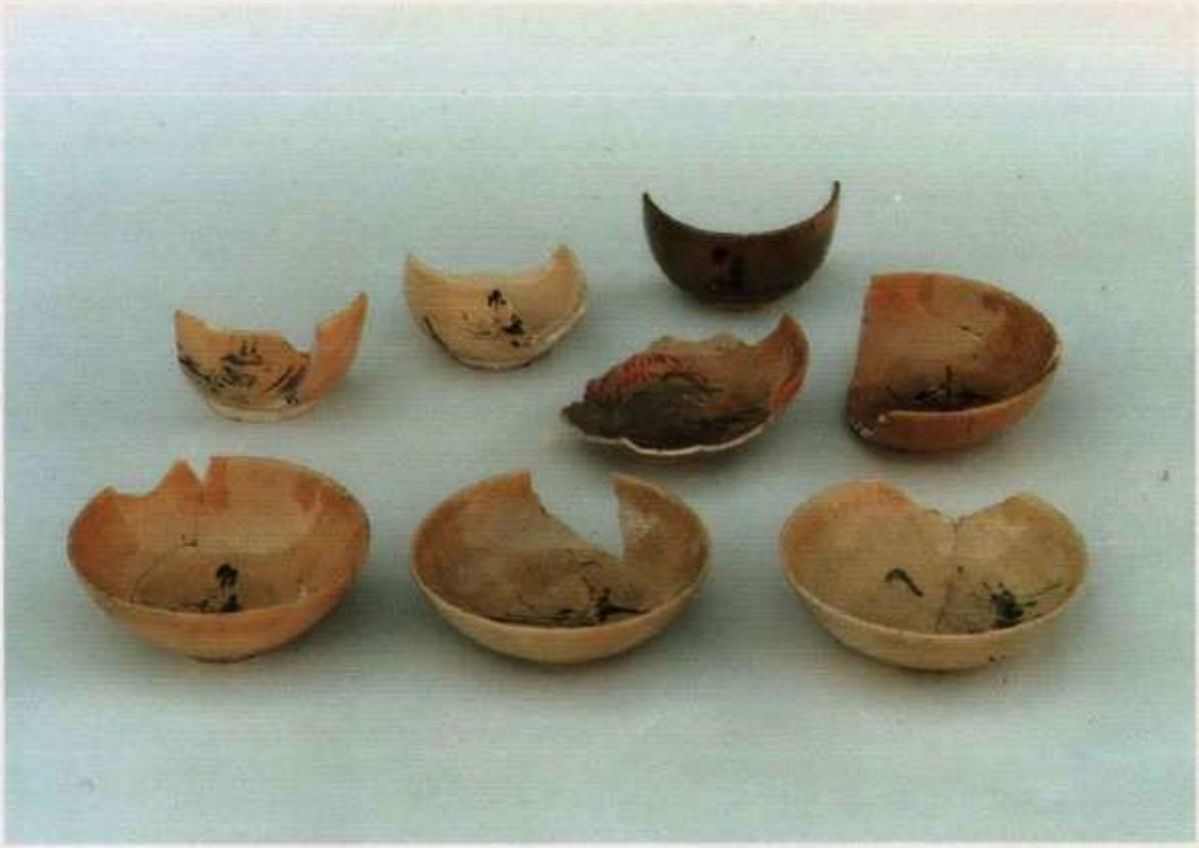


伊万里染付皿（IIb期）

図版3

中国製染付磁器

伊万里染付皿・鉢（IIb期）



京焼風陶器（IIc期）

京焼風陶器（IIc期）

唐津系青緑釉陶器（Ⅲ期）

伊万里染付皿・鉢（Ⅲ期）

図書館増築予定地の調査

例　　言

1　本書は昭和61年２月中旬から３月上旬にかけて行われた奈良市北魚屋西町奈良女子大学図書館書庫増築予定地の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長　岡田英男）の指導を得て奈良女子大学（学長　後藤和夫〔当時〕）が行い、臨時文化財調査室調査員坪之内徹がこれにあたり、奈良国立文化財研究所文部技官金子裕之の指導を受けた。また、島田敏男・山崎信二・和田素子の協力を得た。

3　本書の作成には奈良女子大学教授村田修三と坪之内が編集を担当し、本報告部分の金子・坪之内ほかの執筆者名は文末に、寄稿原稿・特論は文頭に記した。

4　遺物の実測にあたっては奈良女子大学学生樹山美佳・岩松美穂・片倉里美の、製図にあたっては赤木美苗・矢村貞重の協力を得た。また、遺構写真は八幡扶桑・佃幹雄が担当し藤田千賀枝の協力を得た。遺物写真は隅山佳洋氏によるものである。

5　出土遺物については、名古屋大学楢崎彰一・渡辺誠、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二、愛知県陶磁資料館井上喜久男、港郷土資料館高山優、堺市教育委員会森村健一・鍋谷和彦・白神典之、京都国立博物館難波洋三、大手前栄養文化学院川口宏海の各氏の御教示を頂いた。土師器焙烙の図は難波氏、土釜の図は川口氏によるものである。

凡　　例

1　層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また、高さは絶対高をあらわす。

2　遺構の略号は奈良国立文化財研究所の方式に従った。また、遺構番号は平城京左京内検出遺構の通し番号を用いている。

3　土器の器種分類・軒瓦の型式は奈良国立文化財研究所で設定したものに準拠し、編年・時期区分は同研究所での成果を用いている。詳しくは『概報』１を参照されたい。

目　　次

Ⅰ 調査の契機と概要…… 1

Ⅱ 既往の奉行所濠の調査…… 2

Ⅲ 遺　　構…… 5

1 層 位

2 検出遺構と時期区分

3 まとめ

Ⅳ 遺　　物…… 8

1 土 器

2 木製品・金属製品・その他

3 瓦

奉行所濠（N区・S区）・東西溝の花粉分析…… 33

奉行所濠および東西溝の珪藻遺骸…… 39

奉行所遺跡の確認について…… 45

挿　図

第1図　奈良女子大学構内・調査地点位置図

第2図　奉行所北濠東壁土層図

第3図　倉庫・車庫建設予定地位置図

第4図　支障配管立会出土遺物と断面模式図

第5図　遺構配置図・南壁断面図

第6図　SE4018・SD4016出土土器

第7図　SE4017出土土器

第8図　SE4020出土土器

第9図　奈良奉行所濠出土土器

第10図　肥前陶磁Ⅰ期の陶器・輸入磁器

第11図　Ⅰ期の陶器・輸入陶胎磁器

第12図　肥前陶器Ⅱa期の陶器・磁器

第13図　Ⅱa期の陶器・輸入磁器

第14図　Ⅱa期の輸入磁器・土師器土釜

第15図　Ⅱa期の土師器・瓦質土器

第16図　肥前陶磁器Ⅱb期の磁器
第17図　Ⅱb期の磁器（Ⅲ）
第18図　Ⅱb期の磁器
第19図　肥前陶磁Ⅱc期の磁器（碗）
第20図　Ⅱc期の磁器
第21図　Ⅱc期の京焼風陶器（1）
第22図　Ⅱc期の京焼風陶器（2）
第23図　肥前陶磁Ⅲ期の磁器
第24図　Ⅲ期の磁器
第25図　Ⅲ期の磁器・陶器
第26図　肥前陶磁Ⅳ期の陶器・磁器・土師器
第27図　軒瓦
第28図　濠N区南壁断面
第29図　濠S区南壁断面
第30図　濠N区花粉ダイアグラム
第31図　濠S区花粉ダイアグラム
第32図　東西溝東壁断面
第33図　東西溝花粉ダイアグラム
第34図　濠N区南壁断面
第35図　濠S区南壁断面
第36図　東西溝東壁断面
第37図　奉行所堀の現地比定図

図　版　PL1　図書館棟予定地遺構全景（西南から）
PL2　図書館棟予定地遺構全景（北から）
PL3　奉行所西面の濠
PL4　土器・軒瓦
PL5　花粉遺体
PL6　出現した珪藻類

挿　表　表　1　各水系の堆積土中に見られた各種珪藻遺骸の出現頻度
表　2　珪藻類の生態特性

Ⅰ　調査の契機と概要

平城京は東に外京という突出した部分を東西1.5㎞、南北2.3㎞にわたってもっており、わが国の都城のなかでも特異な位置を占めていると言える。この外京地域は平安遷都以後も居住が絶えることなく、現代に至るまで「都市」としての体裁を保ちつづけてきた。

そのなかでも、近世初頭に興福寺西北辺に営まれた奈良奉行所は、一辺約150ｍの方形プランをもち、四周に濠をめぐらす城郭史の上でも注目すべき存在であり、近世都市奈良町の中核となる施設であった。

明治以降、奉行所敷地は現在の奈良女子大学構内にとり込まれ、建物はもとより、四周にめぐらされていた濠の所在すら明らかでない状態であったが、1982年の東北隅部分の発掘調査によって、幅９ｍの濠を約30ｍにわたって検出し、あらためて規模の雄大さを認識させられた。

今回の発掘はこういった奉行所濠の西南隅やや北寄りに図書館書庫の増築が計画されたことに伴う事前調査である。調査対象は奉行所濠および内側の土塁部分だけでなく、その下層にあると考えられる宿院関係の遺構、さらに平城京左京二条六坊13坪内の遺構にもあることはもちろんである。

調査を1985年12月９日に開始した。調査面積は646㎡である。調査地には図書館建設以前にあった旧校舎建物二棟の基礎をはじめとする撹乱があり、これを重機で取り除き、遺構検出を行った。

調査の結果、旧校舎建物の基礎と撤去時の撹乱によって調査地は甚だしく削平されており、旧表土および掘り込みの浅い遺構（特に古代）はほとんど遺存していないことが明らかになった。奉行所濠も埋土の上半は校舎建物に伴う土管埋設のため大きく撹乱されていた。濠以外の顕著な遺構は、中世後半の溝と井戸のみである。

調査は1986年３月７日に終了し、保安のため埋め戻しを行った。

調査日程（1986年）

2・17	遺構検出開始
19	奉行所濠上面の掘削開始
21	遺構検出終了
24	写真撮影
25	遺構実測開始
28	遺構実測終了
3・1	奉行所濠中の二箇所を濠底まで掘る
3	坪掘り終了
8	花粉・珪藻分析のためのサンプル採集（濠坪掘り断面から）

調　査　風　景

Ⅱ　既往の奉行所濠の調査

今回の図書館書庫増築に伴う発掘調査では、奈良奉行所西濠西南隅の東岸を確認出来た。この結果、従来の推定位置よりも西濠がやや西へ、南濠が南へ（正確な位置不明）ずれることが明らかになった。

これまでにも、学内での建設工事では規模の大小にかかわらず、何らかの考古学的調査を行うことを原則としている。奉行所濠については、1982年北濠東北隅が講堂建設に伴う事前調査で検出され、大きな成果があったが、濠の全体像を把握するにはなおも資料が不足している。

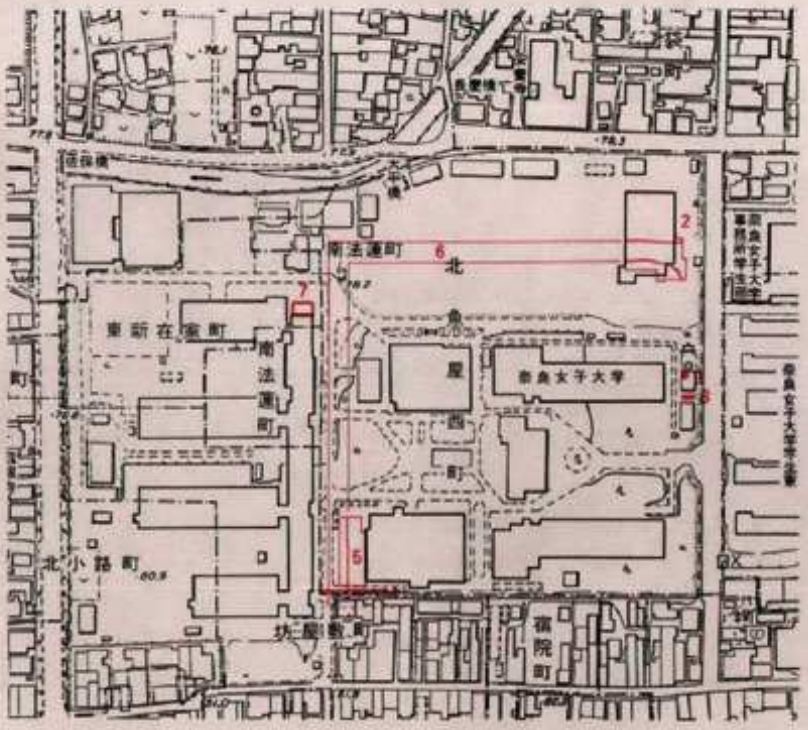
以下に小規模な工事に伴う濠の調査の概要をも併せて報告するが、調査体制の不備もあって、得られた資料は充分なものでないことをお断りしておく。

倉庫建設予定地（第１図１・第３図、1981年８月31日～９月１日）

平城宮跡発掘調査部第134－２次調査である。正門北の倉庫の新営に伴う事前調査であるが、推定東濠の中央にあたるため、予定地の一部を機械掘りして断面観察を行った。濠埋土と考えられる堆積と濠底を確認したが、それ以上のことは明らかでない。

講堂予定地（第１図２、1982年１月21日～５月６日）

現大学グラウンド東北隅の講堂建設に伴う事前調査で、平城宮跡発掘調査部第134－３次調査である。北濠東北隅と東濠西岸の一部を検出した。北濠（ＳＤ2780）は検出された部分の全



第１図　奈良女子大学構内・調査地点位置図

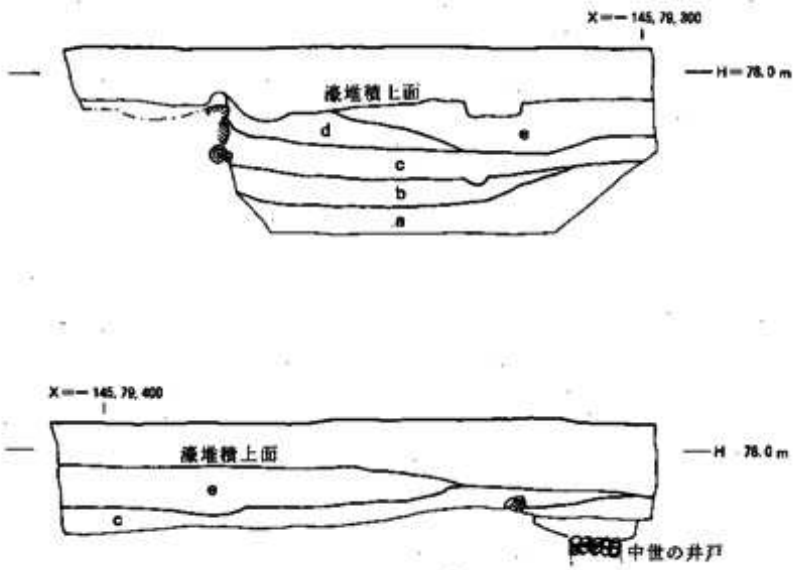
長27.5m、濠の上端幅900cm、底の幅480cm、深さ220cmの規模である。濠内の堆積は普請のはじまった慶長8～9(1603～04)年から濠が最終的に埋められた明治41(1908)年ごろまでの約300年間おおむね順調であり、各層から出土した遺物は膨大な量にのぼる。各土層の時期は出土遺物から第2図のように考えられる。

対照的なのが今回の西濠西南隅の調査での濠内堆積のあり方である。第5図によると、最下層の暗灰色砂質土は濠の最初のころの堆積と考えられるが、その上層の暗灰褐色粘質土は近世全般にわたる遺物を含んでおり、300年間続いた遺構内の堆積としてはやや貧弱で、時期的な分層も不可能なことから、溝さらえが行われた可能性も考えられよう。

この西南隅と東北隅の堆積状況の違いを説明することは今後の課題としたいが、延長700m近くに及ぶ濠の滞水状況や周囲の環境が場所により一定でなかったことは認識しておかなければならない。

車庫建設予定地(第1図3・第3図、1984年8月14日～15日)

倉庫建設予定地の南側に接して車庫の建設が計画されたことに対する事前調査である。やは



a(下層・一部中層):江戸時代初頭
b(中　　層):江戸時代前半(17世紀)
c(上　　層):江戸時代中頃～後半
d(上　　層):江戸時代末(18世紀末～19世紀前半)
e(上　　面):明治時代前半

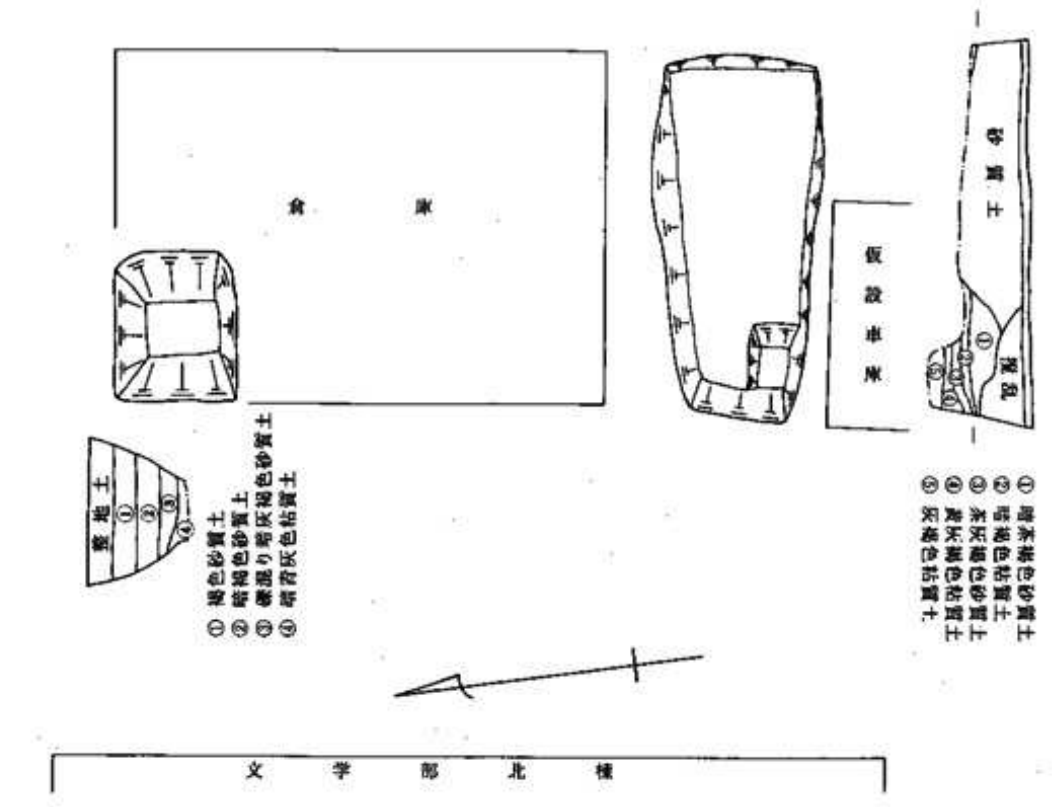
第2図　奉行所北濠東壁土層図(1／100)

り東濠の中央にあたるため、予定地の西半分を機械掘りして断面観察を行うにとどめた。調査区南壁の西端を深掘りして濠底の検出を試みたが、明らかにできなかった。濠内の埋土と近世以降の整地土との区別がはっきりしていない。

支障配管移設に伴う立会調査（第1図4・第4図、1985年8月30日～9月20日）

現附属図書館南側の路面に排水管を埋設する工事に伴う調査で、断面観察・遺物採集が中心である。南濠の埋土らしい土と杭列が認められたほか、西濠の西岸を、南北方向のアスファルト道を横切る管埋設溝断面で確認できた。濠を最終的に埋めた土層（黒褐色砂質土）中では、近代に入ってからの陶磁器が一括投棄された状態で出土し、これらを濠を最終的に埋めた明治40年代前半ごろのものとすることができよう。

型紙摺の碗（第4図4）や銅版摺の皿（2）・碗が主流を占め、広東碗はもはや見られない。型紙摺は明治10年代ごろに始まるとされ、また、銅版摺は明治後期～大正ごろに行われたとみられていることから、これらの遺物が明治40（1907）年前後に奉行所濠を最終的に埋めた際に一括投棄されたものであるという想定とも矛盾しない。



第3図　倉庫・車庫建設予定地位置図（1／50）

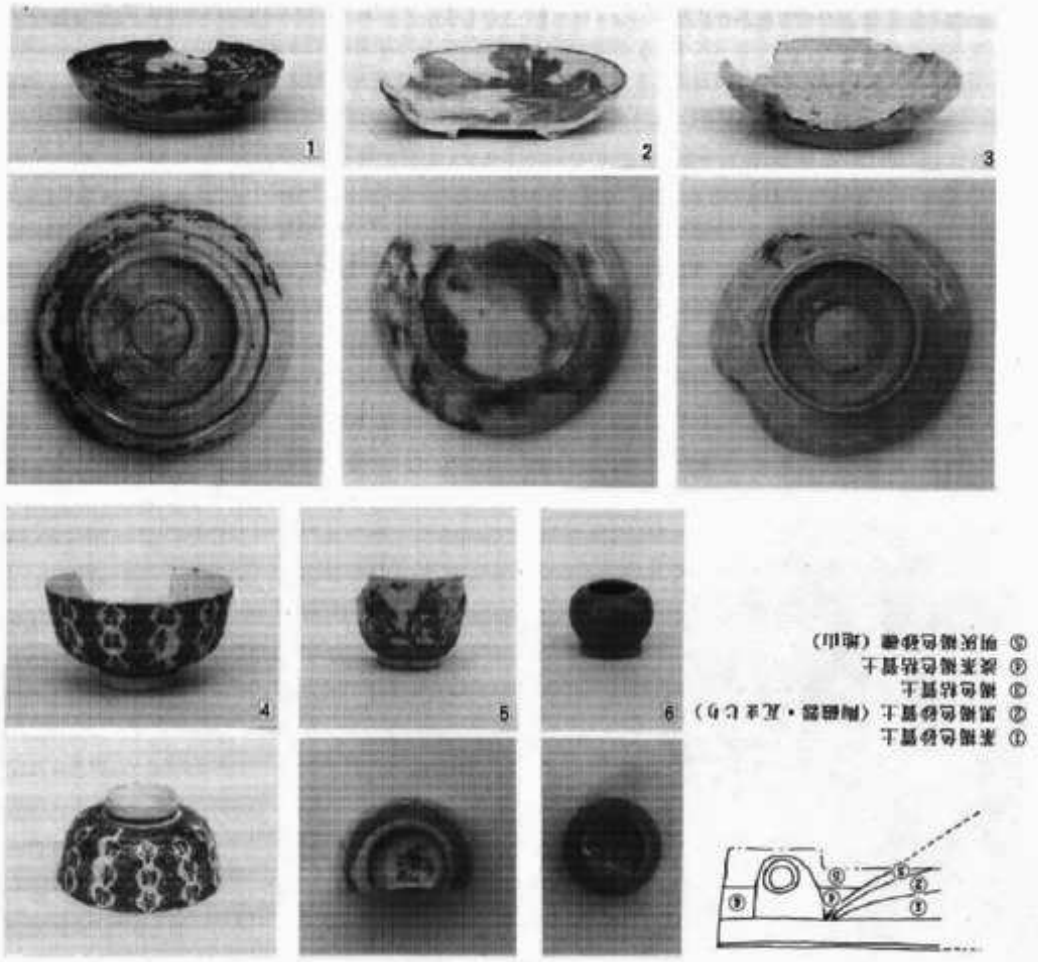
Ⅲ 遺 構

1．層 位

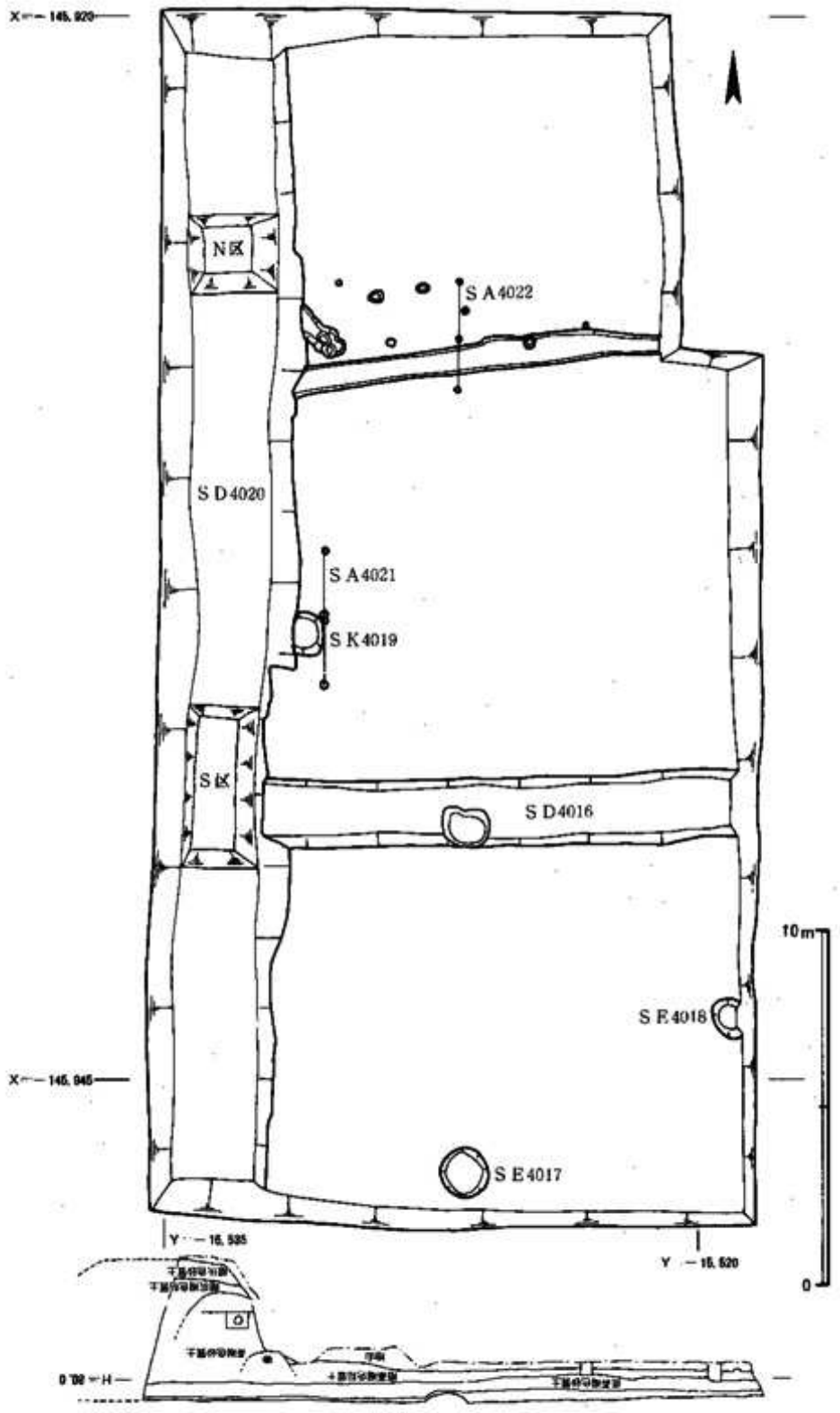
調査地は、登大路および旧興福寺一乗院（現奈良裁判所）から西北西に派生する支丘上にある。ここは、古代にあっては平城京左京二条六坊十三坪、中世には奈良町の一画に、そして近世には奈良奉行所にあたる。これら各時代の攪乱を受けている。従って、旧表土はほとんど遺存せず、現表土の盛土を除くといきなり黄褐粘土・黄灰礫層の遺構面に達する。

2．検出遺構と時期区分

検出した主な遺構には、掘立柱塀２条、溝２条、井戸１基、土壙２基がある。ここでは古代に確実に遡る遺構はなく、中世と近世の遺構が主体である。



第４図　支障配管立会出土遺物と断面模式図



第5図　遺構配置図・南壁断面図（1:200）

中世の遺構

ＳＤ4016　幅約1.5ｍ、深さ約0.7～0.6ｍの溝。約13ｍ分を検出。西側は奉行所の濠により切られる。溝の断面は逆梯形をなし、奉行所の濠と接する付近で急に浅くなる。溝の埋土は二層をなし、上層は挙大の礫を多量に含む茶褐粘質土、下層は灰褐色粘質土である。いずれも15世紀前半の土器を含む。

ＳＥ4017　ＳＤ4016の南10ｍ、発掘区の南端中央にある井戸。堅く締った黄灰礫層を掘り抜いた井戸で、掘形は円形を呈し直径1.3ｍ、深さは2.1ｍである。井戸枠は遺存しない。井戸底から花瓶、火舎など15世紀前半の土器が出土した、

ＳＥ4018　ＳＤ4016とＳＥ4017との中間、発掘区東壁に接して検出した井戸。掘形は円形を呈し、直径1.2ｍ、深さ0.5ｍである。井戸枠は遺存しない。埋め土から14世紀前半に遡る土器が若干出土した。

近世の遺構

ＳＤ4020　奈良奉行所の西面の濠である。濠の東岸と濠底の一部を検出。濠の東岸はほぼ南北に走る。濠の幅は、西岸が現構内道路にかかり、確認できなかった。地形が北に向かって落ちるため、濠も北に向って深くなっており、検出面からの深さは発掘区中央付近で約1.8ｍ、発掘区北端付近で３ｍである。濠底東西断面は比較的平らで、暗灰色粘土層が１ｍ程度堆積する。この堆積層から漆器、木器、陶磁器が多量に出土した。女高師の建設時には、埋戻した濠に暗渠排水路を設置している。

ＳＡ4021　濠ＳＤ4020東岸、東0.5ｍにある２間の塀。柱間は約２ｍ、柱掘形は小さく浅い。仮設の塀であろう。

ＳＡ4022　濠ＳＤ4020東岸、東4.3ｍにある２間の塀。柱間は約1.4ｍ等間。ＳＡ4021同様、仮設の塀であろう。

３．ま　と　め

以上、発掘区内において検出した遺構は中世と近世の遺構であり、古代に遡るものはない。中世の遺構は井戸２基と東西溝１条があるが、建物跡はない。井戸ＳＥ4018の残存状況からみて、遺構面は相当の削平を受けているのであろう。

近世の遺構は、奈良奉行所の濠跡の一部と、これに伴う可能性がある塀２条がある。調査地は奈良奉行所敷地の西南隅に近い部分である。

奈良女子大学の所蔵にかかり、文化三寅年二月の年紀がある「南都御役所絵」によると、西面の濠は西南隅付近と西面中央付近で鍵の手状に折れ、南北三等分点の南から第一点日付近に西内門がある。発掘区内に西内門の痕跡を見出していないので、発掘区は御役所絵に従えば奉行所の西南隅近く、西内門よりやや南側の位置にあたろう。この付近は絵図の註記に「藪」とあり、調査の結果からみても実際建物らしきものはなかったようである。（金子裕之）

Ⅳ 遺 物

出土した遺物の量は比較的少なく、奉行所濠出土のものが半数以上を占める。内訳は土器・瓦が大部分で、若干の木製品・金属製品がある。時代は奈良から明治におよんでいるが、古代のものはほとんど見られない。

1 土器

土器には土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・灰釉系陶器・中国製輸入磁器・近世国産陶磁器等がある。ここでは遺構出土のものを中心に時代別に報告する。

A 中世の土器

SE4018出土土器（第6図1・2、PL4） 図化できるものは土師器皿（1）と土師器土釜（2）のみであった。土師器皿は口径13.5cm、胎土には赤色クサリ礫・長石粒・チャート片を含み、色調は淡赤褐色を呈する。土師器土釜は復原鍔径24.0cm、胎土には灰色チャート片・石英粒・長石粒を含み、色調は明灰褐色を呈する。

SD4016出土土器（第6図3～23、PL4） （3～6）の土師器皿は時期的なまとまりをもつが、（7）以下の遺物に比べるとやや古く、しかも（11～19）の土師器皿のなかにはこれらより下層で出土しているものもあるので、この溝の最終的な埋土の中に含まれていた可能性がある。（3）は口径11.8cm、（6）は口径7.7cm、いずれも胎土に赤色クサリ礫を含んでいる。

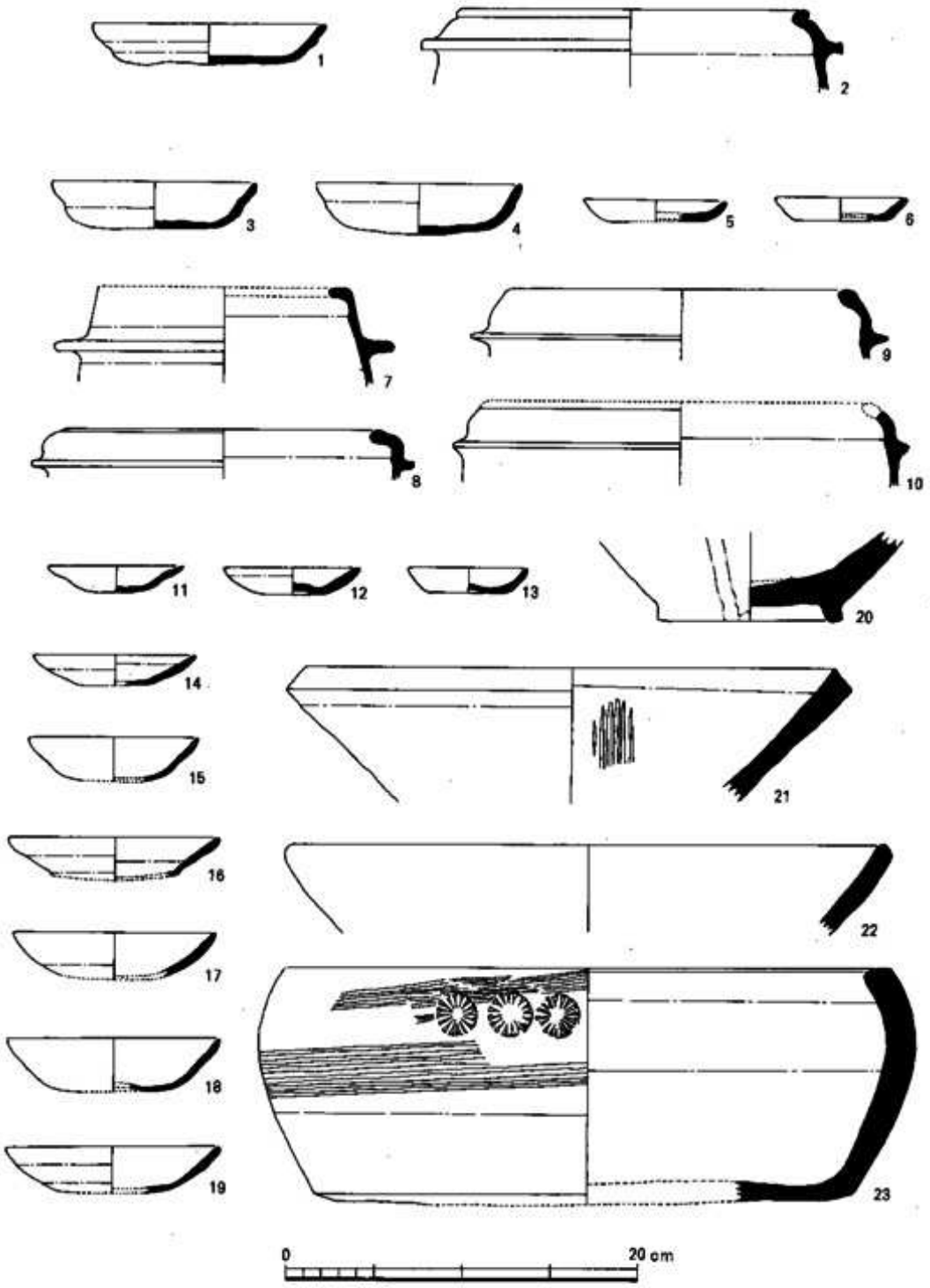
土師器土釜（7～10）は（7）が内彎する口縁部の内側に粘土を接ぎ足して成形するのに対し、（8～10）は内彎する口縁部から端部を肥厚気味に外側に折り返しているようである。復原鍔径は（7）が19.5cm、（8）が21.8cm、（9）が24.0cm、（10）は26.2cm。いずれも精良な胎土で、微細な灰色チャート片・長石粒を含むが、（7）（8）（10）は赤色クサリ礫も僅かに見られる。

土師器皿（11～19）は口径が8.0cm前後のもの（11・12）、9.5～10.0cmのもの（14・15）、12.0～12.5cmのもの（16～19）に分けられる。（11・12）は暗赤褐色を呈するいわゆる赤土器系統で、（11）の口縁部内外面にはススが付着している。（13～19）は淡灰褐色を呈するいわゆる白土器系統であるが、焼成は全体的にやや軟弱である。

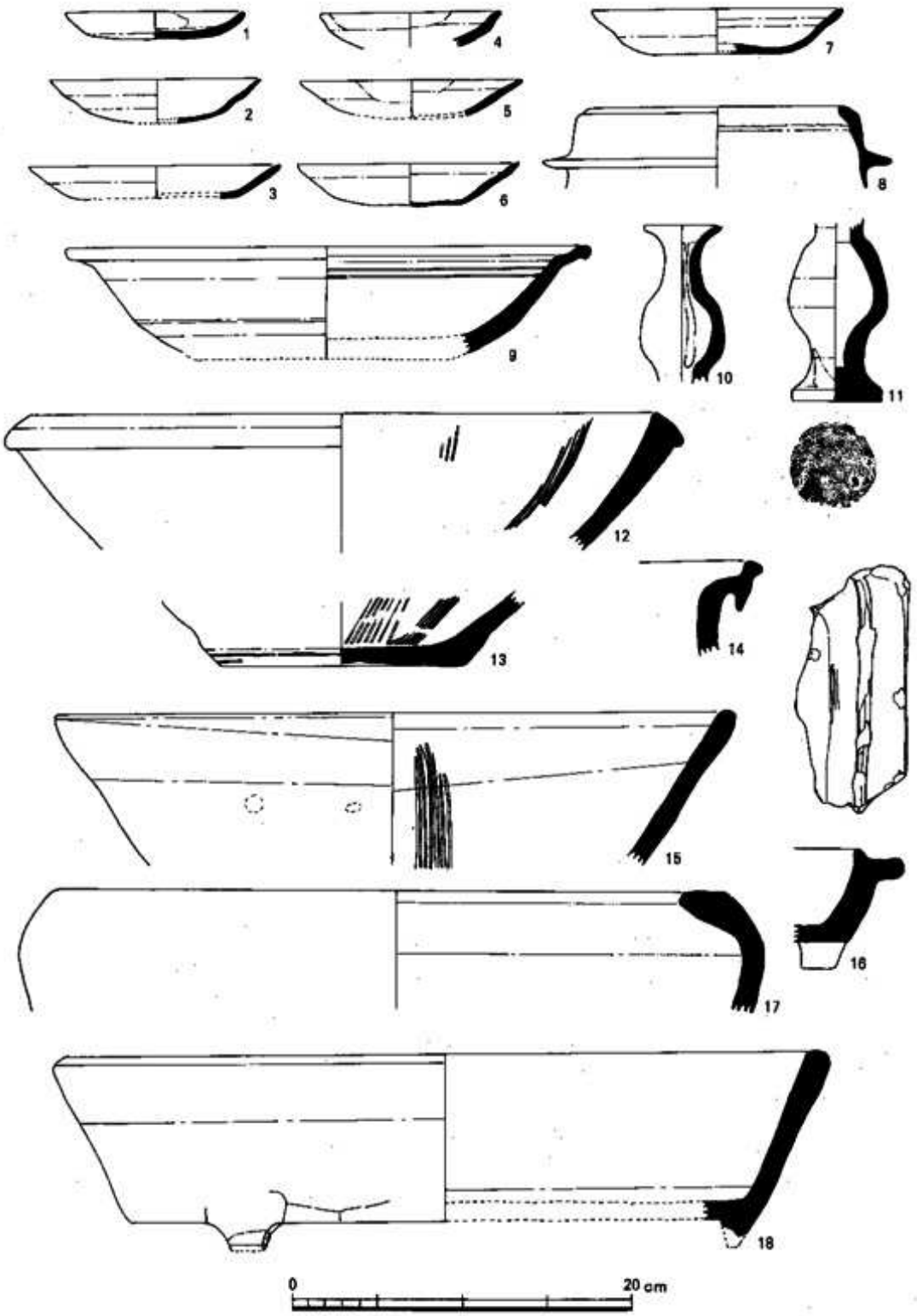
（20）は灰釉系陶器壺の底部である。底部外面はヘラによる切り離しののち高台を貼り付けている。底径10.6cm。胎土は比較的精良である。

（21）は備前焼擂鉢である。口縁端が面をなしており、端部内面・外面ともに稜を形成しているのが特徴である。復原口径30.1cm。

（22）は瓦質土器擂鉢であるが、擂り目部分は残存していない。口縁端部が丸くおさまる古い形態を有している。復原口径34.0cm。



第6図　SE4018・SD4016出土土器



第7図　SE4017出土土器

（23）は瓦質土器火舎である。胴部上半は斜め方向の細かな磨きが施され、下半および底部との境界にはヘラ削りが施されている。また底部外面には離れ砂を使用した痕跡が見られる。胴部最大径37.6cm。

土釜の型式からする年代は15世紀後半と考えられるが、土師器皿（７～11）の法量はやや新しい様相を示す。また、備前焼擂鉢は若干時期が古くなるものであろう。

ＳＥ4017出土土器（第７図、ＰＬ４）　土師器皿（１～７）は口径10.5～11.0cmのもの（１・４）、13.0cm前後のもの（２・５・６）、15.0cm前後のもの（３・７）に分けられる。いずれも灰褐色または灰白褐色を呈するいわゆる白土器系統である。

土師器土釜（８）は内彎する口縁部の内側に粘土を接ぎ足して端部を成形している。復原鍔径20.5cm。胎土にはチャート片や長石粒が比較的多く含まれている。

灰釉陶器折縁盤（９）は瀬戸の製品で、内外面に淡黄緑色の釉が施されている。また、内面の口縁部と体部との境界には２本の沈線が見られる。

（10・11）は瀬戸の陶器花瓶である。（10）は鉄釉、（11）は灰釉が施されている。（11）の底部外面には糸切り痕が見られる。（10）の口径4.6cm、（11）の底径5.3cm。

（12・13）は備前焼の擂鉢である。口縁下部が垂下し、全体に玉縁状を呈するところがやや異質である。色調は明茶褐色を呈し、胎土には黒紫色粒や長石粒等の夾雑物が多い。復原口径36.8cm。

（14）は常滑焼大甕の口縁部である。

（15）は瓦質土器擂鉢である。７本一単位の擂り目を下から上に向って施している。復原口径39.2cm。

（16）は瓦質土器長方形盤の断片である。四隅に存在した脚部は外れてしまっている。

（17）は瓦質土器火舎の口縁部である。底部には三脚が付された形態であったと考えられる。復原口径34.5cm。

（18）は瓦質土器盤である。体部外面にスタンプ文様は見られない。復原口径43.9cm。

灰釉陶器折縁盤・鉄釉花瓶・常滑焼大甕はいずれも14世紀代に属するもので、かなりの期間伝世されたものである。また、口縁部が玉縁状を呈する備前焼擂鉢は備前焼編年のⅣ期に相当すると考えられ、15世紀前半に比定される。この擂鉢は擂り目がかなり磨滅しており、比較的長期間使用されたものと言えよう。

いわゆる白土器系の土師器皿は、口径は14世紀後半以来の規画を保っているが、器高が次第に低くなりつつある。したがって、内底面の面積は（２・６）のように広くなる。また、器壁も15世紀には薄いものが多くなるが、16世紀に近くなると、（１・７）のようにやや厚いものに移行していく。土師器土釜（８）は古市城跡の資料などから15世紀中頃～後半に位置づけられる。したがって、この井戸の廃棄年代は、土師器皿に新しい要素が見られることを考えるとやはり15世紀後半に想定することができよう。

B　近世の土器

近世の土器は出土遺物の大半を占め、そのほとんどが奉行所西濠出土のものである。また、その中には近代のものも多く含まれ、年代的には江戸時代初頭から明治時代後半までのおよそ300年間に渡っている。ここでは、奉行所濠（特に北濠）出土の遺物も併せて報告し、近世初頭から近代に至る陶磁器・土師器・瓦質土器の変遷を辿ってみたい。

ＳＤ4020出土土器（第８図、ＰＬ４）　磁器のうち（１～５）（８～10）（12～16）は伊万里のものであるが、他は生産地を同定し難い。

（１）は小型染付蓋物、（２）は白磁小杯（ぐい呑）である。（３）はコンニャク判を使用した染付碗で、高台内面には「大明年製」崩れ銘が見られる。（４）はくらわんか手の碗で、見込みは蛇目状に釉ハギされている。（５）は染付小碗で、文様は手描きである。

（６）は美濃天目茶碗で、黒釉が施され、（７）はやはり美濃の筒型丸碗で、茶褐色に施釉された上に灰釉の流し掛けが施されている。

（８）はそば猪口で、（９）は蓋である。

（10）は染付皿で、見込みの五弁花と高台内面の渦福字銘は欠失している。（11）は内面は淡赤褐色の色絵であるが、銅版摺りによるものである。

（12）は扇形と蛸唐草の染付碗。（13～19）は口縁端が外反するいわゆる端反り碗で、（17）は青と薄桃の色絵である。

（20）は京焼風の煎茶器である。底部は露胎で割高台がつく。

（21）は高台内面に「蔵六」の刻印が残る染付猪口である。

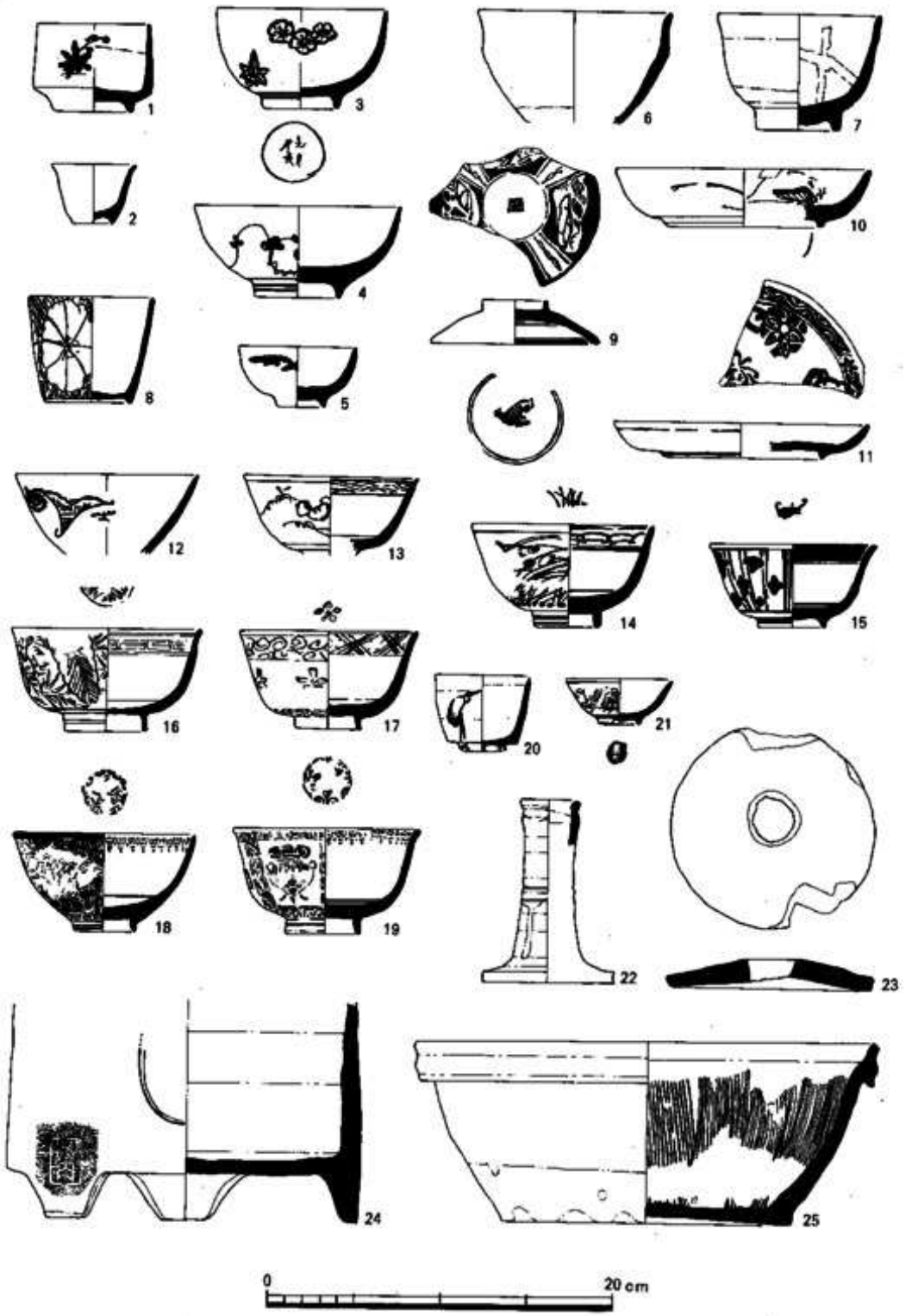
（22）は信楽の一輪挿である。

（23）は中央がやや隆起した土師器の円盤で、中央に孔が穿たれている。用途不明。

（24）は円筒状の本体に三脚がつき外面全体に柿釉を塗った陶器である。風呂と考えられる。一脚のつけ根外面に刻印が残り、長方形枠の下欄に「舎」の字は認められるが、上欄は明らかでない。

（25）は擂鉢であるが産地不明。

年代を明らかにできるものを挙げると、（６・７）の美濃天目茶碗と筒型丸碗は段付天目を伴う岐阜県瑞浪市大川東窯・田ノ尻窯で同型式のものが焼かれており、17世紀前半～中葉（元和末年～寛永）に窯の操業年代が求められている。コンニャク判の上限は1690年代で、（３）の碗は1750年代にかけて大量に生産される。これに併行するのが（４・５）で、18世紀後半にまで及ぶ。これらはいわゆる〝くらわんか手〟を形成している。（10）の皿も同時期である。（16）の端反り碗は19世紀前半以降に流行し、（８）のそば猪口もほぼ同時期である。（18・19）の型紙摺は明治10年代ごろに始まるもので、（11）が銅版摺であるとすると、明治後期～大正ごろに行われたとされているから、濠を最終的に埋めた明治41（1908）年ごろのものと考えて矛盾しない。

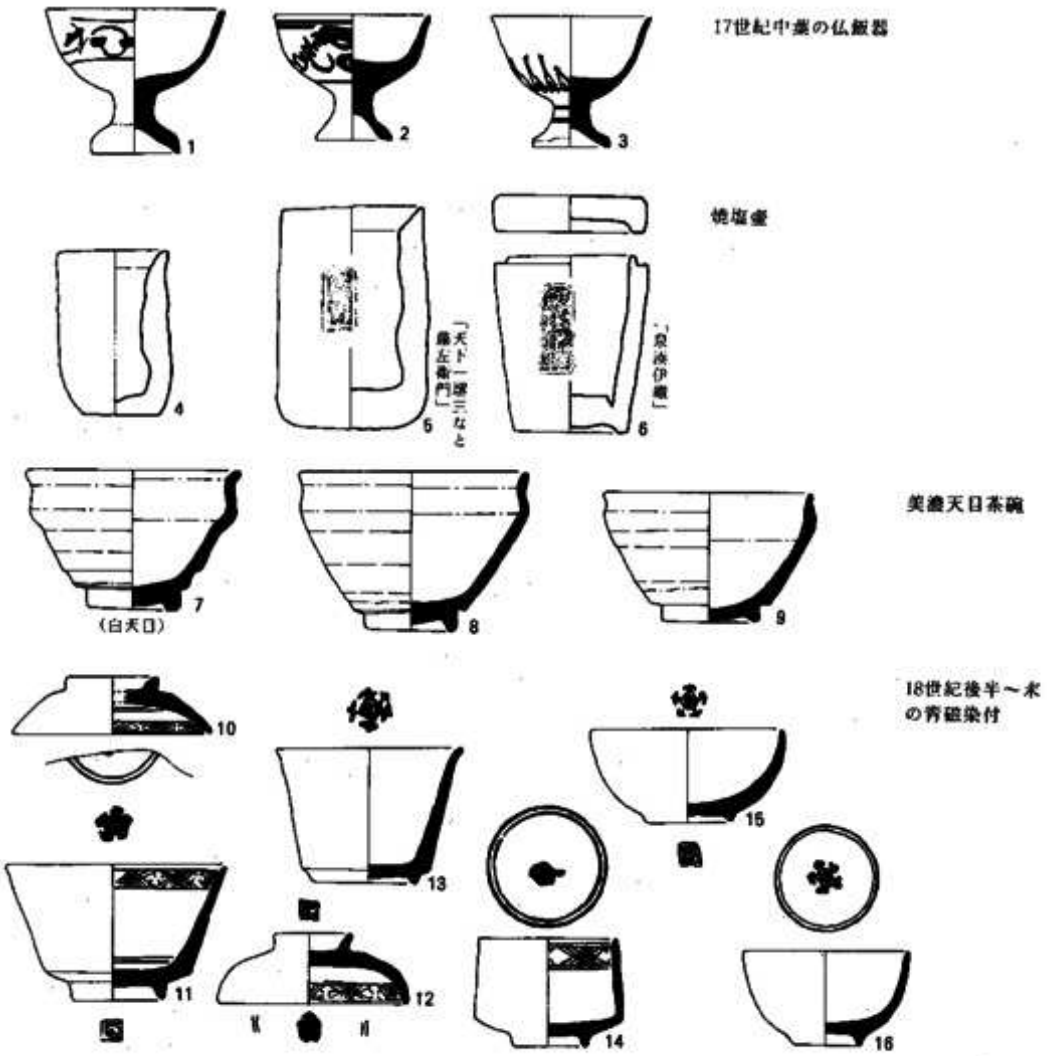


第8図　SD4020出土土器

奈良奉行所濠出土の近世土器

奉行所濠出土の近世土器は、1988年４月現在、遺物収納用コンテナ250箱分出土している。北濠出土のものはそのほとんどを占めるが、奉行所所用のものと言うよりは、濠をへだてて北に接する北魚屋西町に使われたものとする方が妥当であろう。したがって、江戸時代地方都市の町屋の土器という位置付けを与えることができる。

近世土器の編年で現在最も進んでいるのは唐津・伊万里を中心とした肥前系陶磁であり、本稿ではこれらの編年・時期区分を基礎にして、各時期に併行関係にあると考えられる他の生産地系の陶磁器・在地の土師器・瓦質土器の時期区分をも試みてみた。出土遺構が幅９ｍの濠という必ずしも順調な堆積を示したものでないだけに、誤認も多いと考えられるが、将来、土壙などの良好な一括資料によって訂正を期したい。



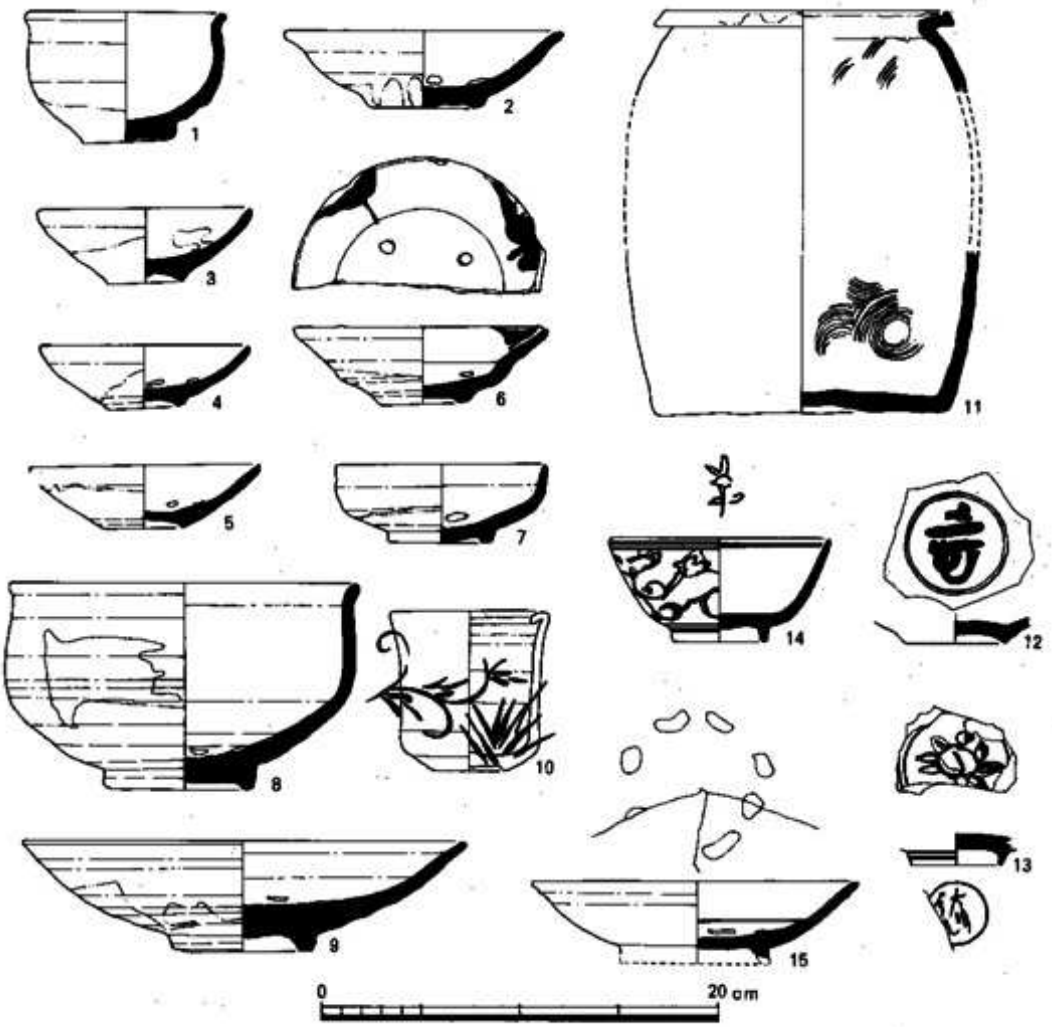
第９図　奉行所濠出土土器（１／４）

Ⅰ．1580年代～1600年代（天正～慶長）

胎土目積み唐津皿の時期であり、奉行所創始（1603年）以前と考えてよい時期であるが、濠内出土遺物のなかにこの時期のものが、唐津の製品をはじめとして、比較的多く見られる。

唐津の陶器（第10図１～11）は碗・皿・片口鉢・向付・小型甕その他に瓶があるが、絵唐津（６・８・10）は少ない。（１）の碗と（２）の皿は長石釉・露胎部の縮緬皺など岸岳系の特徴を備えている。

輸入磁器は（12～14）が明代の染付、（15）が朝鮮李朝の白磁皿である。（12・13）は曼頭心でやや時期がさかのぼるが、（14）の碗は堺環濠都市ＳＫＴ19での紀年銘木簡との共伴資料から、天正13（1585）年以降とすることができ、この時期が日本での流通年代の範囲内にあることが知られる。李朝白磁皿はこの時期に通有のものであるが、高台畳付部分を目あとととともに打ち欠いて、すわりを良くしている。



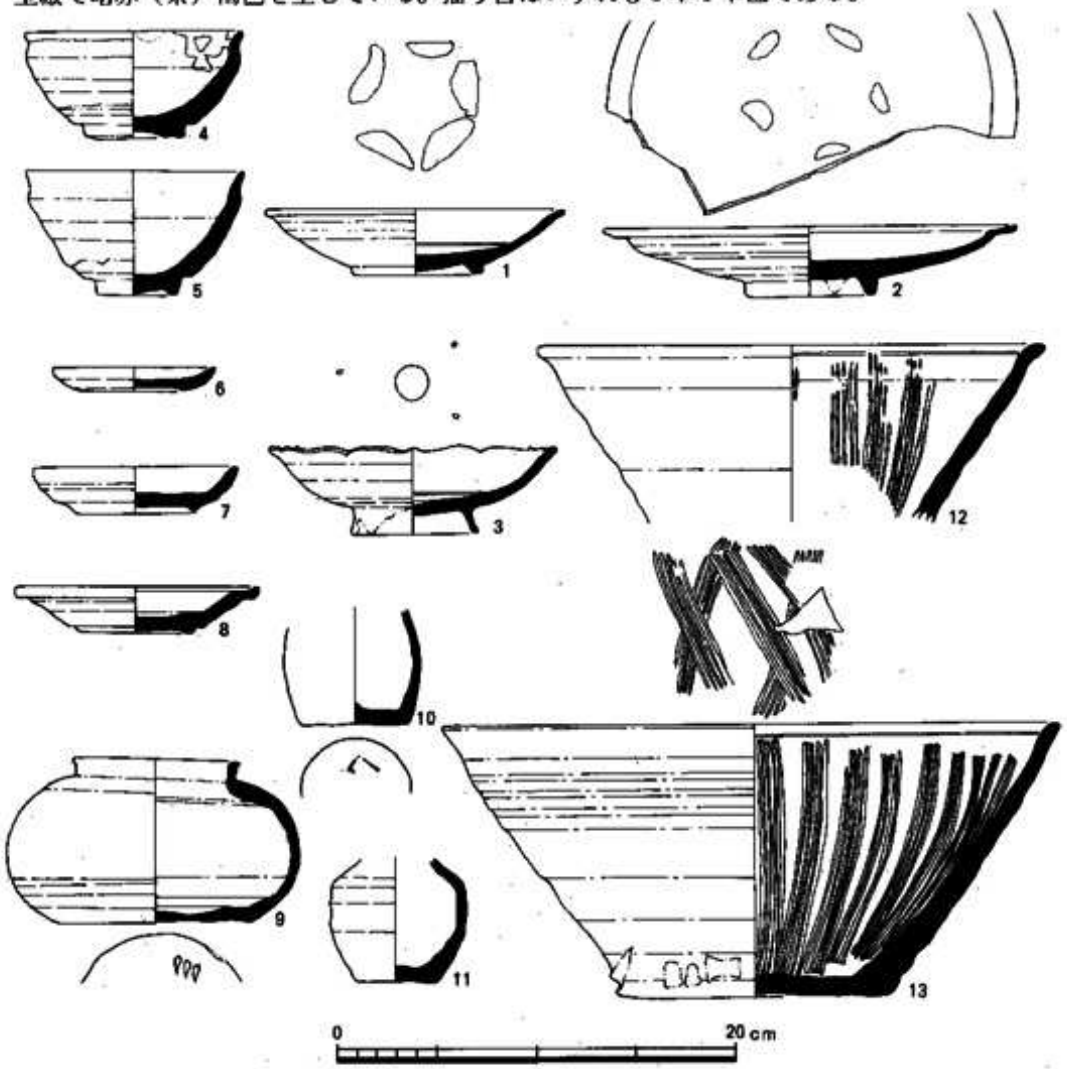
第10図　肥前陶磁Ⅰ期の陶器・輸入磁器

（第11図１～３）は陶胎の磁器皿である。（１・２）は細かな貫入と３ヶ所以上の砂目積痕跡が、（３）は小さな３ヶ所の目あとと内底面中央の凹みが特徴的である。（１）の形態と製作技法は（第10図15）の白磁皿に共通したものがあり、李朝の製品である可能性が考えられる。

美濃・瀬戸系の製品（４～８）には天目茶碗（４・５）・小平皿（６）・小皿（７）・折縁皿（８）・菊皿等がある。（４）は大窯Ⅳ期（16世紀後半）のものであるが、濠中での出土層位は新しく、口縁の欠損を補修して使用しており、長期間伝世されたものと考えられる。

備前焼（９～11）は、この時期の擂鉢は見られないが、茶器と考えられる壷（９）や小壷・徳利・盤等がある。

伊賀・信楽系の擂鉢（12・13）は口縁端部が同時期の瓦質土器擂鉢と共通して、僅かに外反するタイプのものである。焼成・色調は15世紀～16世紀前半のものが軟質で黄白色なのに対し、堅緻で暗赤（茶）褐色を呈している。擂り目はいずれも５本１単位である。

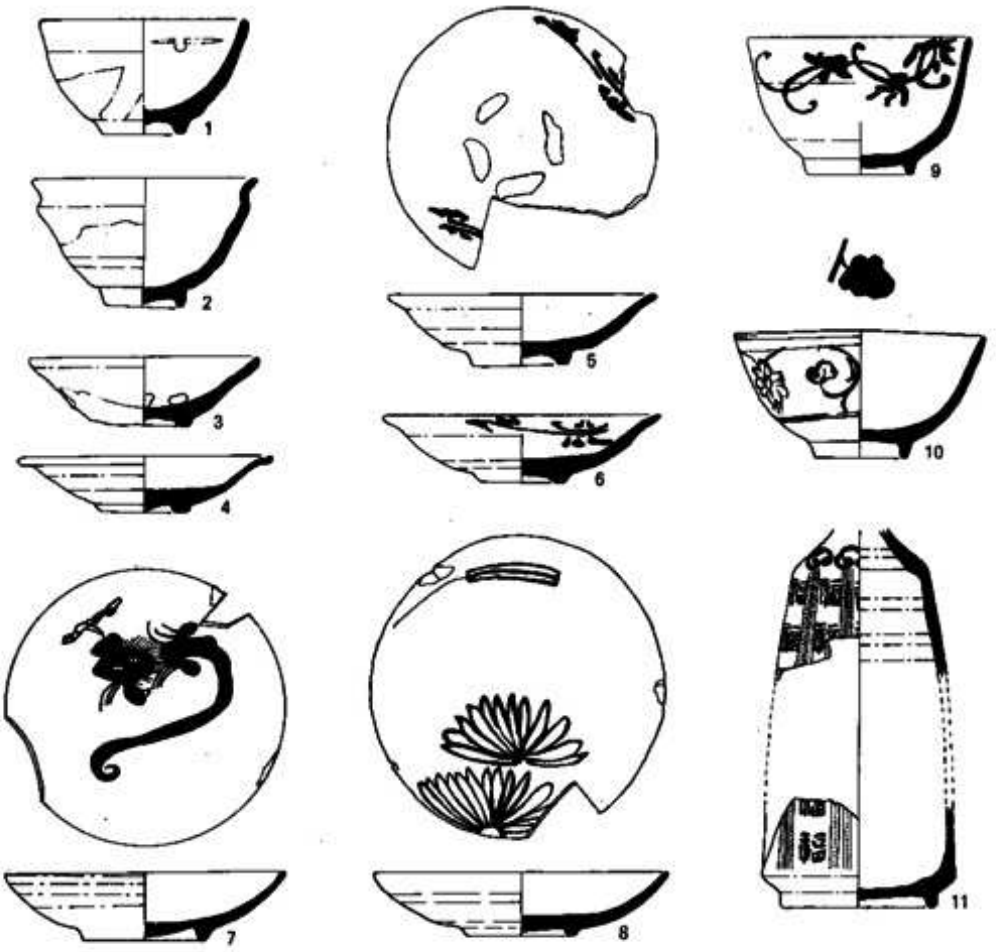


第11図　Ⅰ期の陶器・輸入陶胎磁器

Ⅱa　1600年代～1640年ごろ（慶長～寛永14年ごろ）

砂目積み唐津皿（第12図３・４）と伊万里磁器出現の時期であるが、胎土目積から砂目積への移行は漸移的なもので、1600年代に入っても胎土目積皿の生産・流通が行われていたと考えられる。したがって、濠中層で出土した唐津の様相は、奉行所創始期のそれを反映している可能性がある。唐津碗（１・２）では天目タイプのもの（２）がある。一般的な灰釉碗（１）は器壁の薄いもの（砂目積である）に移行していく。1637（寛永14）年、鍋島藩による窯場の整理・統合という事件で、砂目溝縁皿（４）に代表されていた唐津陶器の生産は大きく後退する。

伊万里磁器創始期の皿（５・６）には砂目積が用いられており、碗（９・10）と同様に高台畳付部分の釉をぬぐっていない。（８）の皿も高台全釉である。このため、（８・９）は畳付部分に砂が多く熔着している。福字瓶（11）は全体の形状が茶筅形をなし、なで肩で深い竪筋を彫る17世紀前半の特徴を有している。

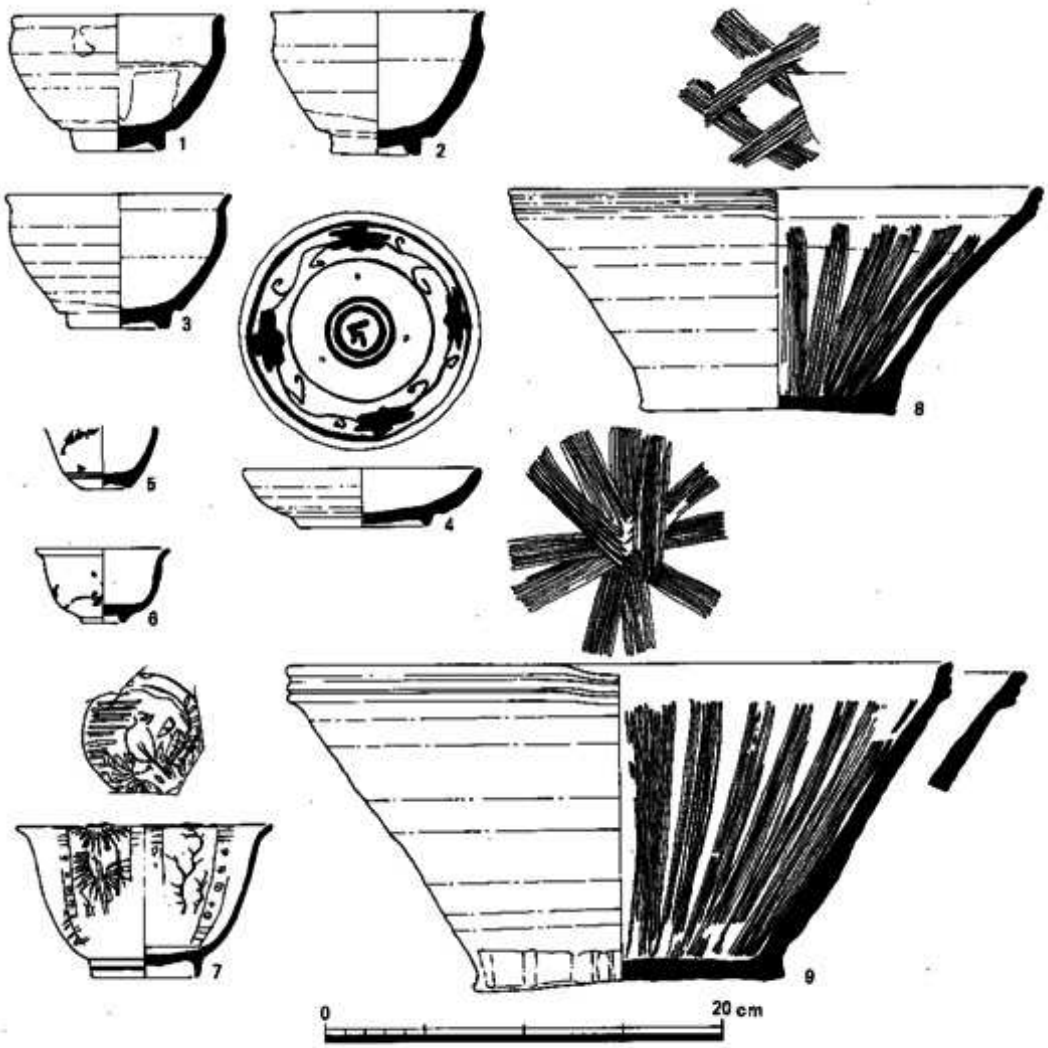


第12図　肥前陶磁Ⅱa期の陶器・磁器

美濃製品には天目茶碗（第13図１～３）と絵志野丸皿（４）がある。天目茶碗は段天目（第９図７）と同時期（元和～寛永）のもの、やや新しい時期（1650年代以降）に属するものを含んでいる。白天目（第９図７）・流し掛け技法の製品（第13図１）はこの時期の特徴を示しており段天目に後続する大型の天目茶碗（第９図８）も見られる。

明代染付磁器（５～７）には天馬文小杯（５）、蔓草文小杯（６）、薄手で口縁部が波状をなす鉢（７）がある。外面には玉が連らなって垂下した文様で区画された中に竹が描かれ、内面は同様の区画内にとげのある枝、内底面には樹枝にとまる鳥を描いている。この鉢は1613年に沈没した Witte Leeuw 号に同タイプのものが発見されており、同船の沈没時に近い流通年代が考えられている。

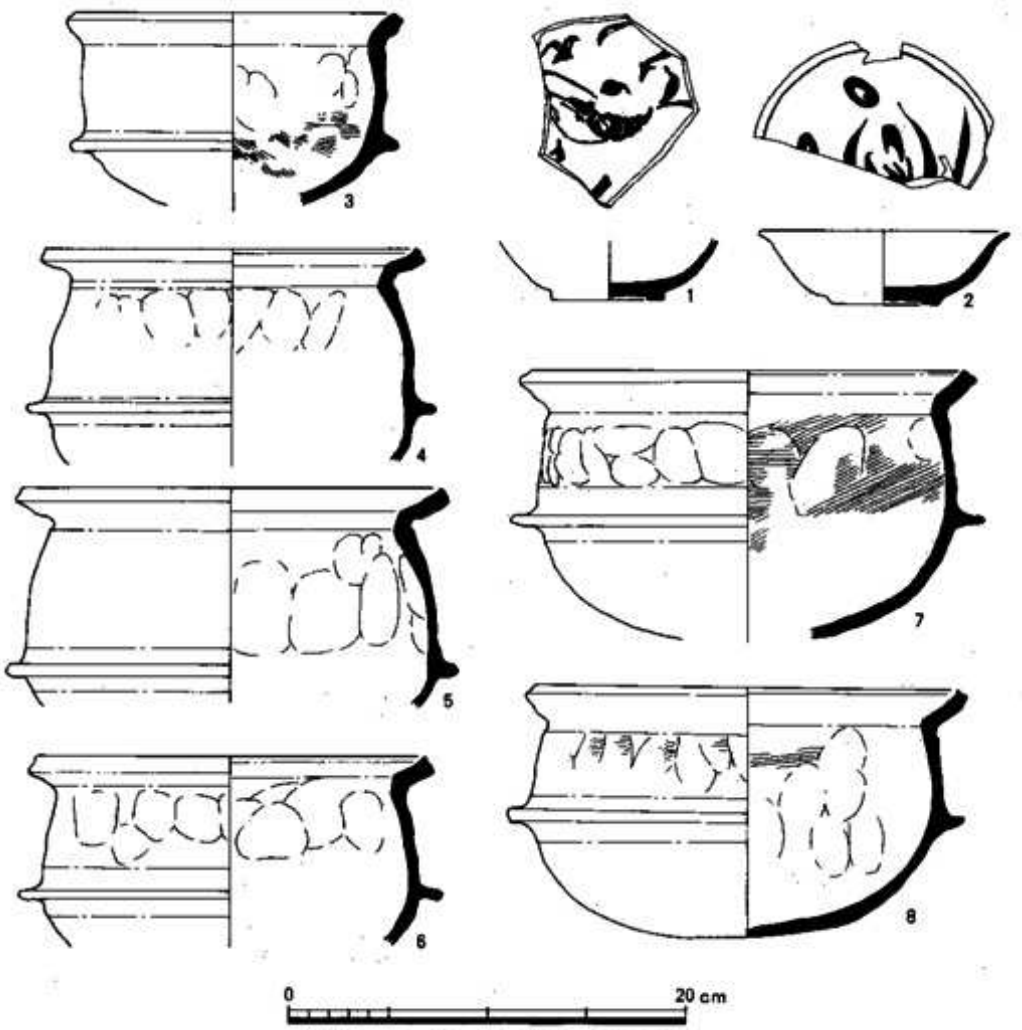
伊賀・信楽系擂鉢（８・９）は口縁部が備前擂鉢を意識して外側に面をもち沈線を施すようになるが、面積は未だ広くない。いずれも７本１単位の擂り目を施す。



第13図　Ⅱａ期の陶器・輸入磁器

明代染付磁器は碗（第14図１）と深皿（２）がある。いずれも内面に海老を描き、高台は蛇目状を呈している。

土師器土釜（３～８）はこの時期に大量生産された大和特有のものである。全般的に前の時期のものに比べて器壁が厚い。形態上は、全体に球形を呈し鍔部と口縁部の間隔が広いもの（３～５）、器壁がやや厚く、鍔部と口縁部の間隔が狭くて鍔部以下の器高に占める割合が高いもの（６～８）に分けられる。法量の上からは、前者が口径15.8cmのもの（３）、18.5cmのもの（４）、21.0cmのもの（５）、後者が口径19.5cmのもの（６）、21.5cm前後のもの（７・８）に分けられる。内外面とも細かい刷毛やナデで調整されており、当て具痕状の凹みやタタキ目と考えられる痕跡も認められるが、いずれも不明瞭である。（４）のように外面にススが付着していない例が若干見られる。このタイプの土師器土釜は少なくとも17世紀後半までには消滅したと考えられる。

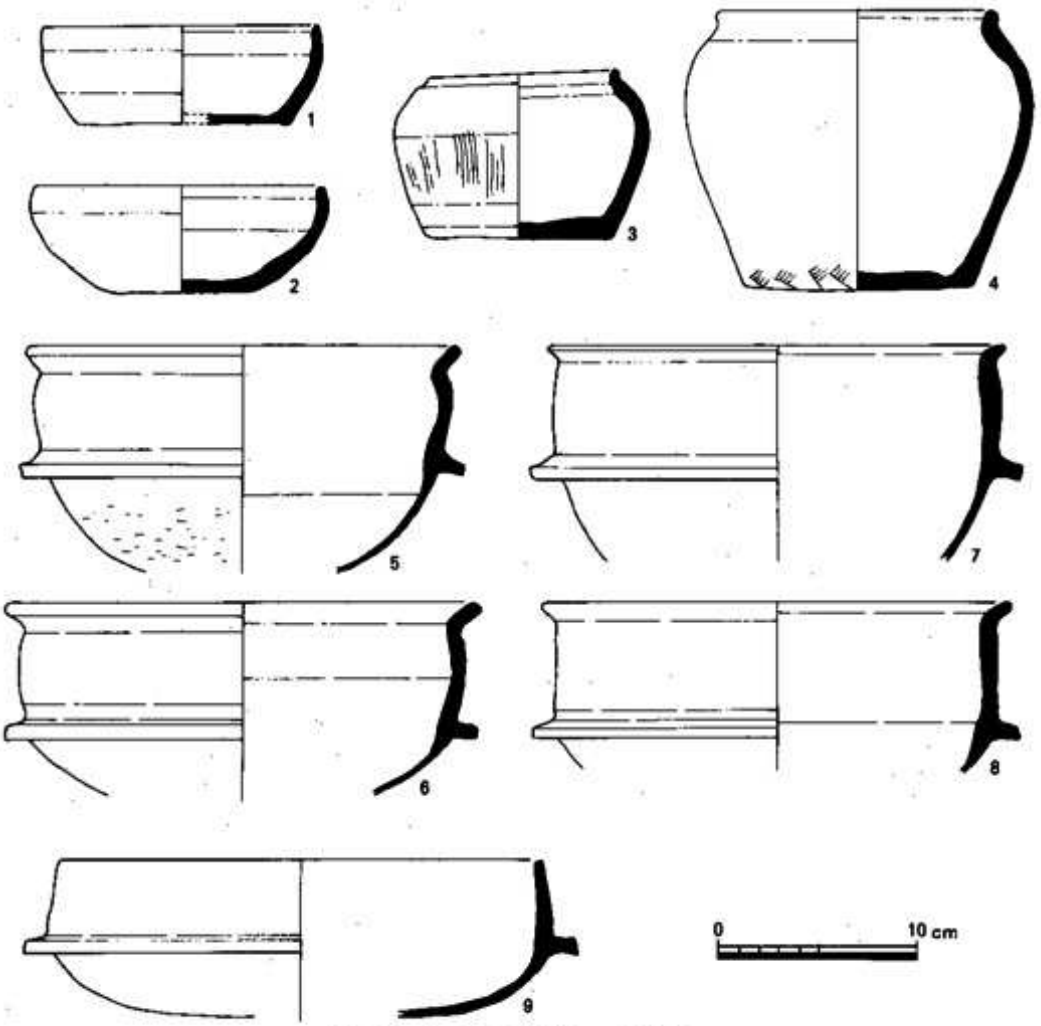


第14図　Ⅱａ期の輸入磁器・土師器土釜

土釜以外の土師器には小型鉢（第15図１・２）・焙烙（５～９）・焼塩壷（第９図４～６）台付壷・炬燵・皿等がある。

小型鉢（第15図１・２）は総点数５～６点と数は少ない。（１）がこの時期のものであり、（２）はやや新しくなると考えられる。体部下半に型造りの痕跡が認められるものがある。外面にはほぼ全面にススが付着し、内底面周辺には焦げ状の炭化物が見られるので、煮沸用器として使用されたことが推定できる。焙烙（５～９）はこの時期のものは口縁部がくの字状に外反し鍔をもつもの（５～８）、鍔をもち口縁部が直立するもの（９）の２つのタイプがある。前者は中世以来の土釜の系譜上にあると考えられるが、後者はその出自が明らかでない。鍔部以下の外面に型造りの痕跡を残し、境界部分をヘラ削りで調整している。

瓦質土器は短頸壷（３・４）・火舎・風炉・炬燵・香炉・甕など多種にわたっている。短頸壷は用途が明らかでないが、内面に有機質の付着・沈澱が認められるものがある。



第15図　Ⅱａ期の土師器・瓦質土器

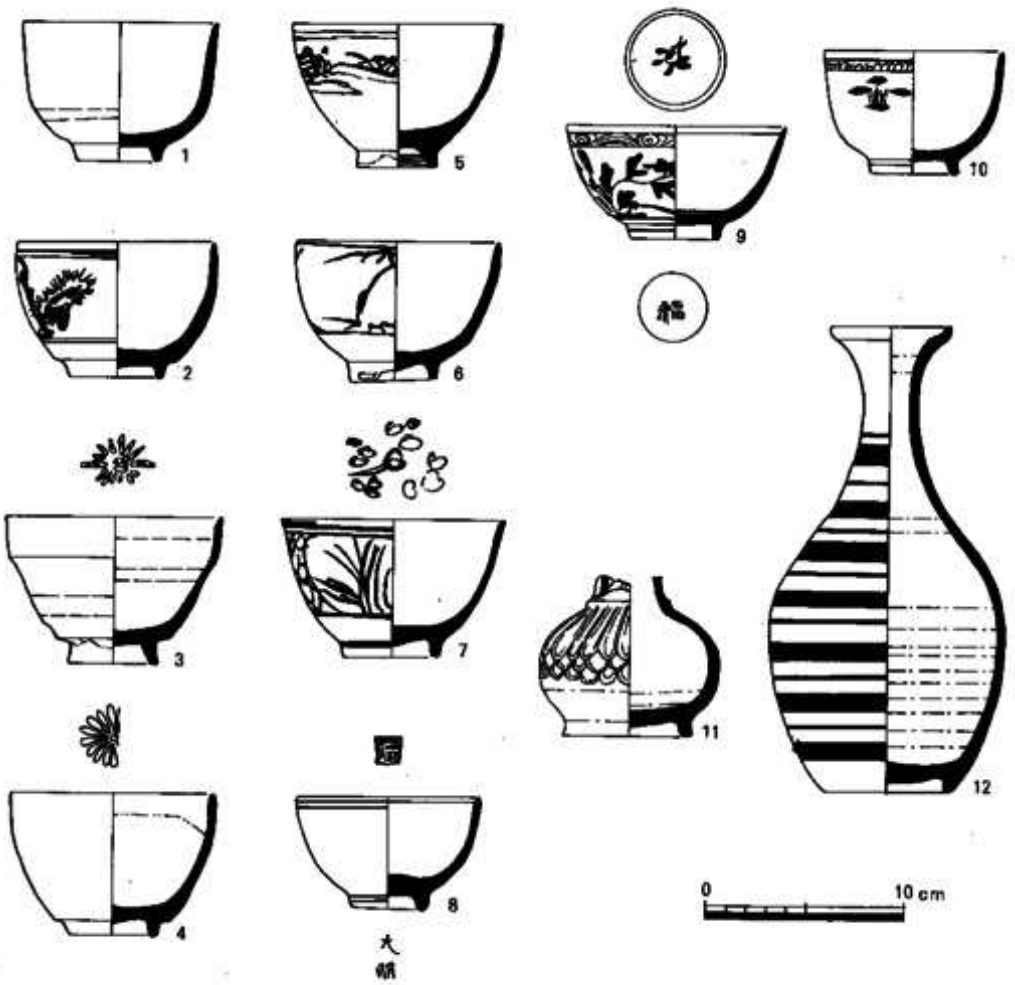
Ⅱb　1640年ごろ～1650年代前半（寛永14年ごろ～承応）

中国からの磁器輸入が激減し、国内での伊万里磁器の需要が高まり、生産量が増大した時期である。これは生産地の窯の規模の拡大と製品、特に碗に大量生産を意図した高台無釉のものが多く見られることに表われている。

磁器碗（第16図１～10）のうち（１）は青磁である。天日タイプのもの（２～４）は（３）が青磁染付、（４）が鉄釉染付で、いずれも高台無釉である。

（５～10）の碗はこの時期でもやや新しいものである。（５・６）は高台無釉で、（８・９）は底部内面や高台内に「大明」「福」といった中国磁器を模倣した銘字が染付されている。瓶（11）は首の長いいわゆる鶴首瓶と呼ばれているものである。

独楽文様の徳利（12）は底部を碁笥底風に抉り込んでおり、17世紀前半の特徴をよく表わしている。



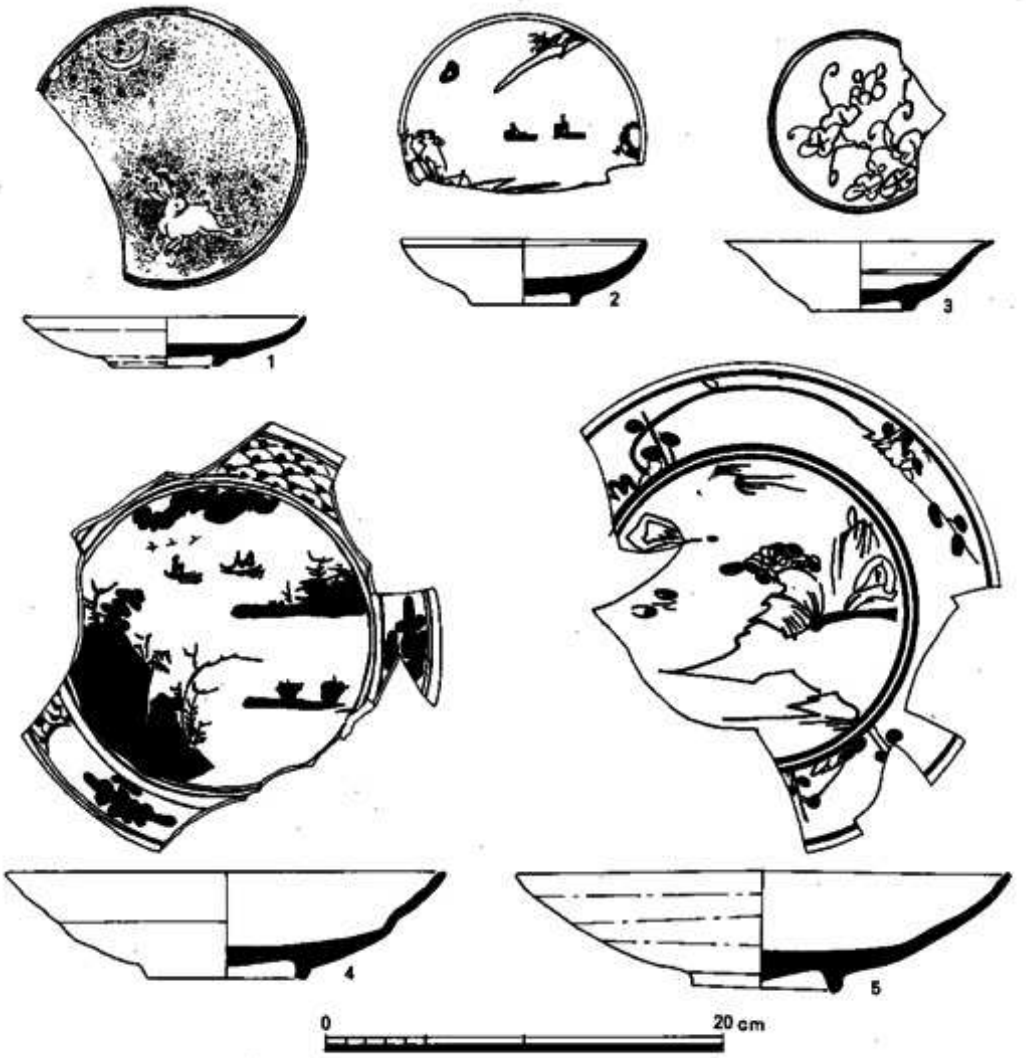
第16図　肥前陶磁Ⅱb期の磁器

月兎文の皿（第17図１）の絵付は吹墨技法によっている。呉須（コバルト青料）を筆に含ませて、吹きつけて文様にする技法である。

蔓草文の皿（３）は（１）や（２）の山水文の皿とは異なり、口縁部が外反している。また、高台畳付部分の面積がやや広く、蛇目状を呈している。この蛇目状高台は17世紀前半の中国青花磁器（例えば第14図１・２）を手本としたためと考えられている。

（第17図４）の大皿は山水文の周囲を花文と青海波文（魚鱗文）で埋めた意匠で、やはり明の万暦初期（16世紀末）に多く見られた絵付の模倣であるが、その形態は明のものに比べると高台径が小さい。この時期以降になると、中国製品を手本として高台径を広く作るようになるが、日本のものは底部の垂下を防ぐハリ支えを用いるようになる。

（５）の山水文大皿も同様に、高台径は未だ小さく、ハリ支えは見られない。



第17図　Ⅱｂ期の磁器（皿）

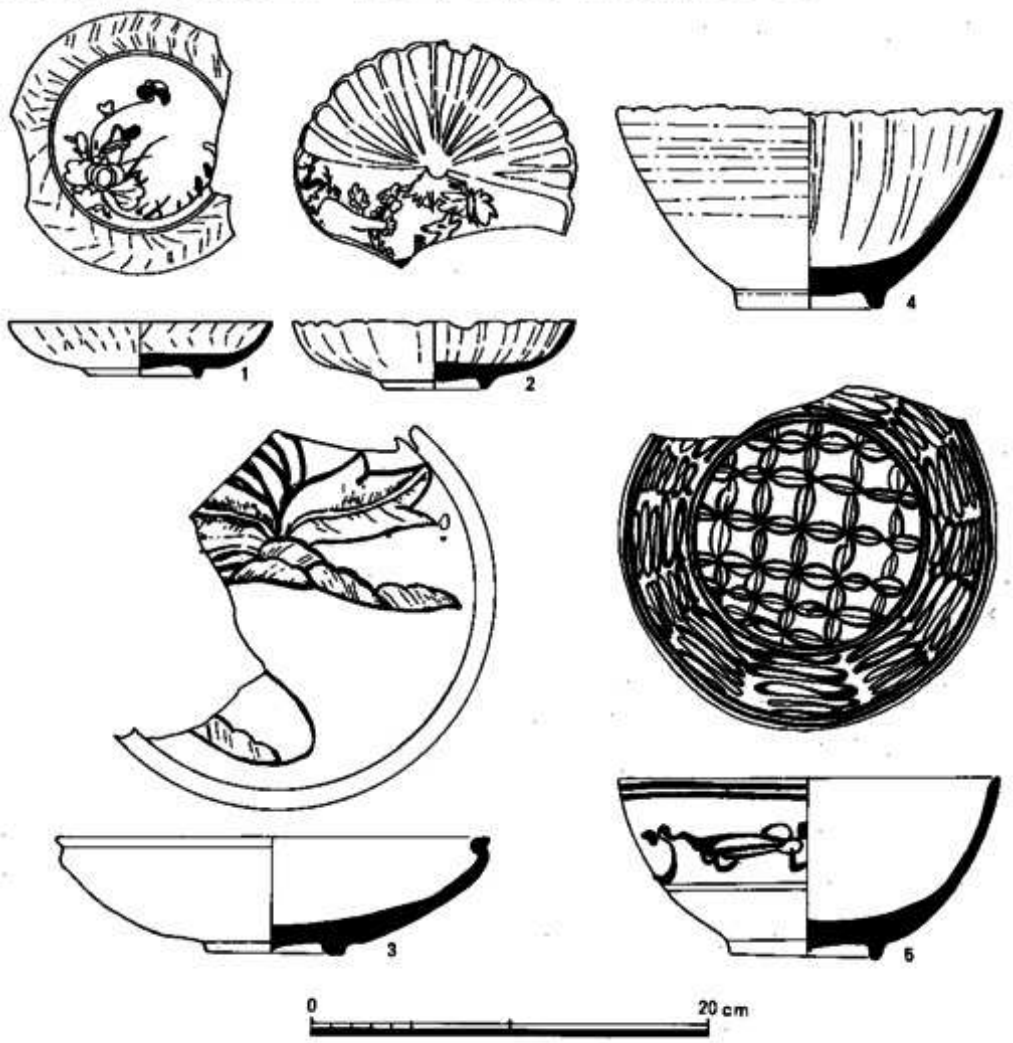
型打成形による皿（第18図１・２）は、17世紀後半以降の変形皿と違って、高台はロクロ作りの円形である。

蕉葉文の青磁三足付皿（３）は獣脚状の足部分は欠失してしまっている。欠失部分を漆継ぎによって補修した痕跡が残っている。この皿の出土層位が生産された年代よりもやや新しいところから、補修を加えながらもしばらくの間伝世されたことがうかがえる。

磁器の補修方法については、17・18世紀は伝世に価するような大型磁器を漆または膠で接合していたが、19世紀以降になると、鉛ガラスの普及に伴って、ガラスによる接合・補修とその職業化、いわゆる焼継ぎ・焼継ぎ師が出現してくる。

白磁鉢（４）は内面を型打成形している。同じ形態のものがもう一点出土しているが、口径18.0cm、高さ9.9cm、底径6.8cmとやや小さい。

染付鉢（５）は高台畳付部分の釉をぬぐい、内面には砂が熔着している。



第18図　Ⅱｂ期の磁器

Ⅱc　17世紀後半（承応～元禄）

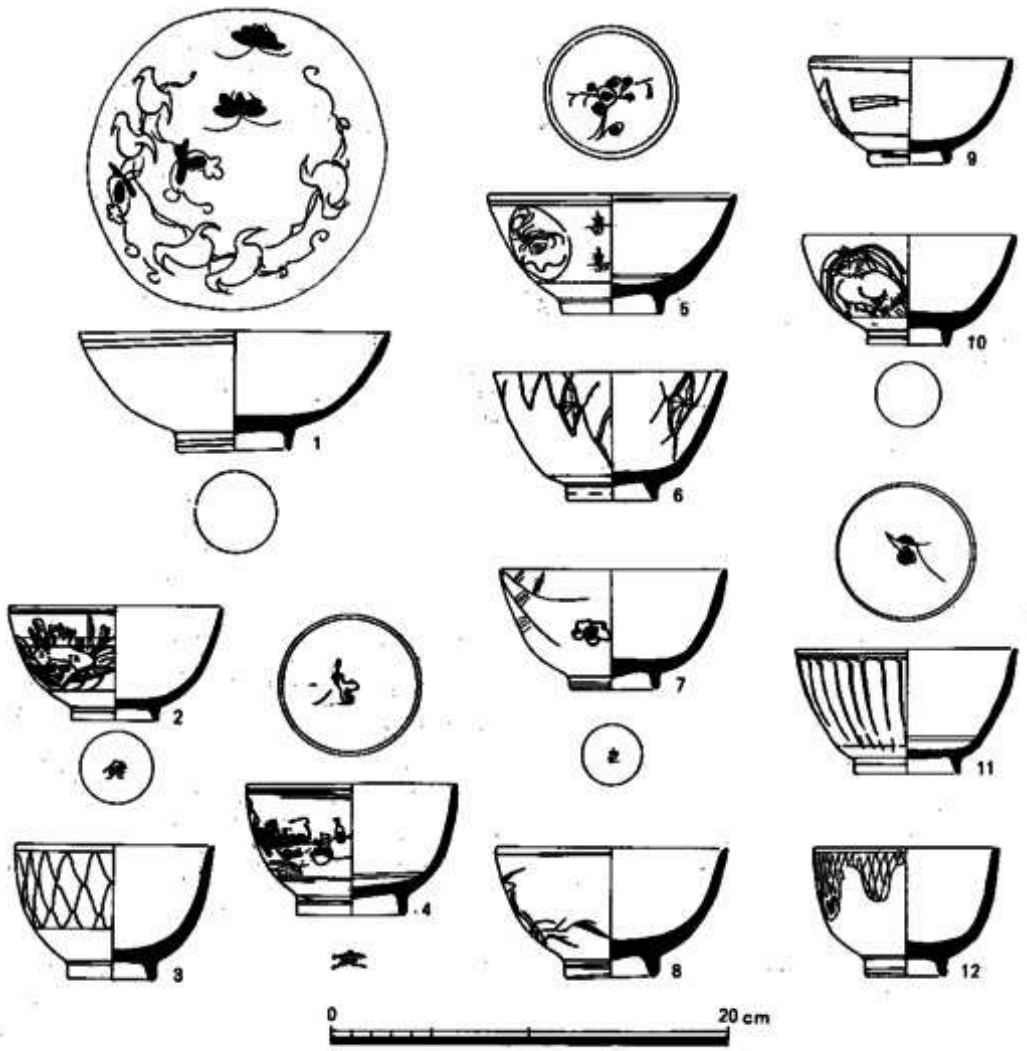
中国の磁器輸出が途絶えたため、オランダが伊万里に大量注文を行ってきた時期である。このため、技術向上・大量生産が要求され、製品や窯構造に技術革新が認められる。

碗（第19図１～12）は窯詰め道具が改良され種類が増えたことによって全面施釉の良品が多くなってくる。

（１）のやや大型の碗は漆継ぎが行われている。Ⅲ期以前のものではあるが、17世紀のどのあたりに位置付け得るかは不明。

高台内の染付銘はこの時期に豊富になるが、ここでは（２）（４）（７）のように「合」字が記されているものがある。

網目文碗（３）は、南方への輸出用の荒磯文碗・鉢とともにこの時期に盛んに作られた。



第19図　肥前陶磁Ⅱc期の磁器（碗）

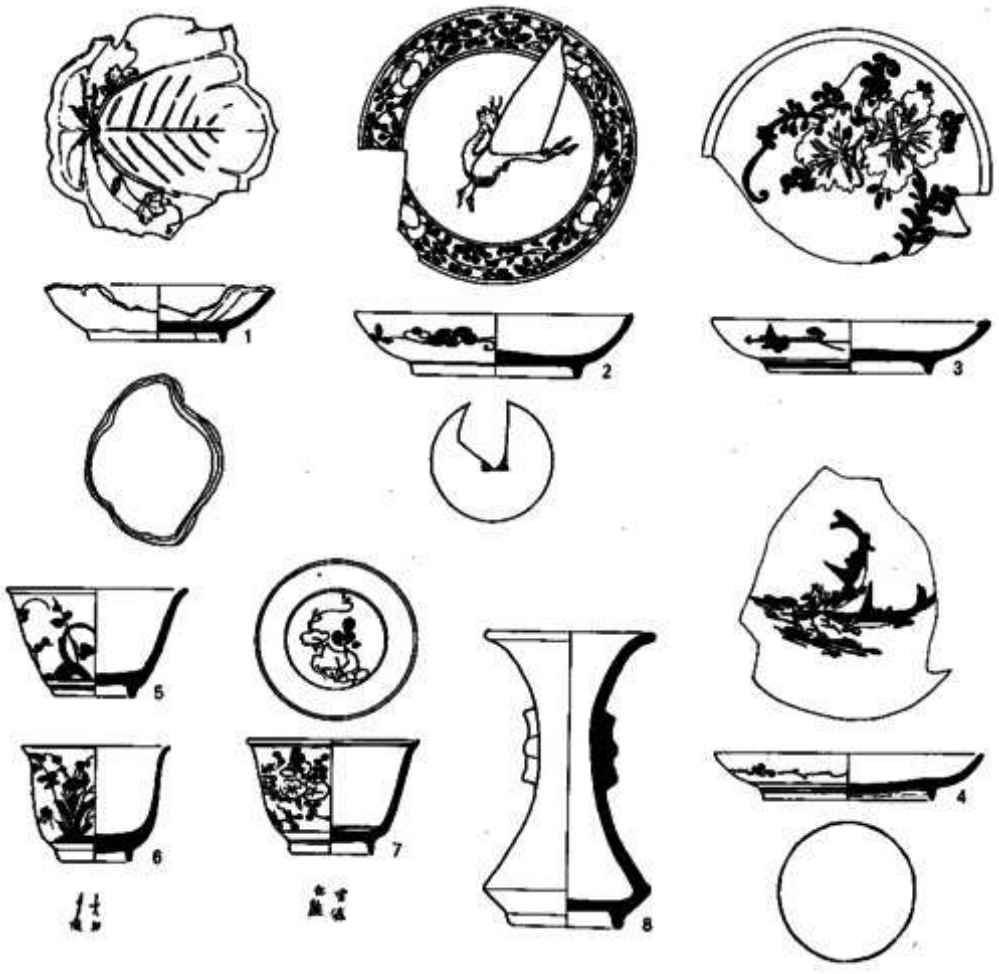
変形小皿（第20図１）は型打成形によるものである。また、高台は平面形に合せて変形に貼付けたものである。このような貼付高台はこの時期にはじめて出現する。

（２）の皿の高台内面には、四角く囲った中にくずしていない「福」の字を書いたいわゆる角福字銘が見られる。

（３）の皿の絵付けには、あらかじめ墨で白線文の部分を描き、その上を呉須で塗りつぶして焼いて墨を飛ばし、白い線を浮き立たせる墨弾きという手法が見られる。また、高台内面には焼成時に底部が垂下するのを防ぐために小円錘状の支えを１個以上（ここでは１個）置いた痕跡が認められる（ハリ支え）。

（４）の皿は一般集落では見られない高級品である。（８）は青磁瓶である。

小型碗（５）・小杯（６・７）は（６）が高台内面に「大明年製」くずれ銘、（７）が「宣



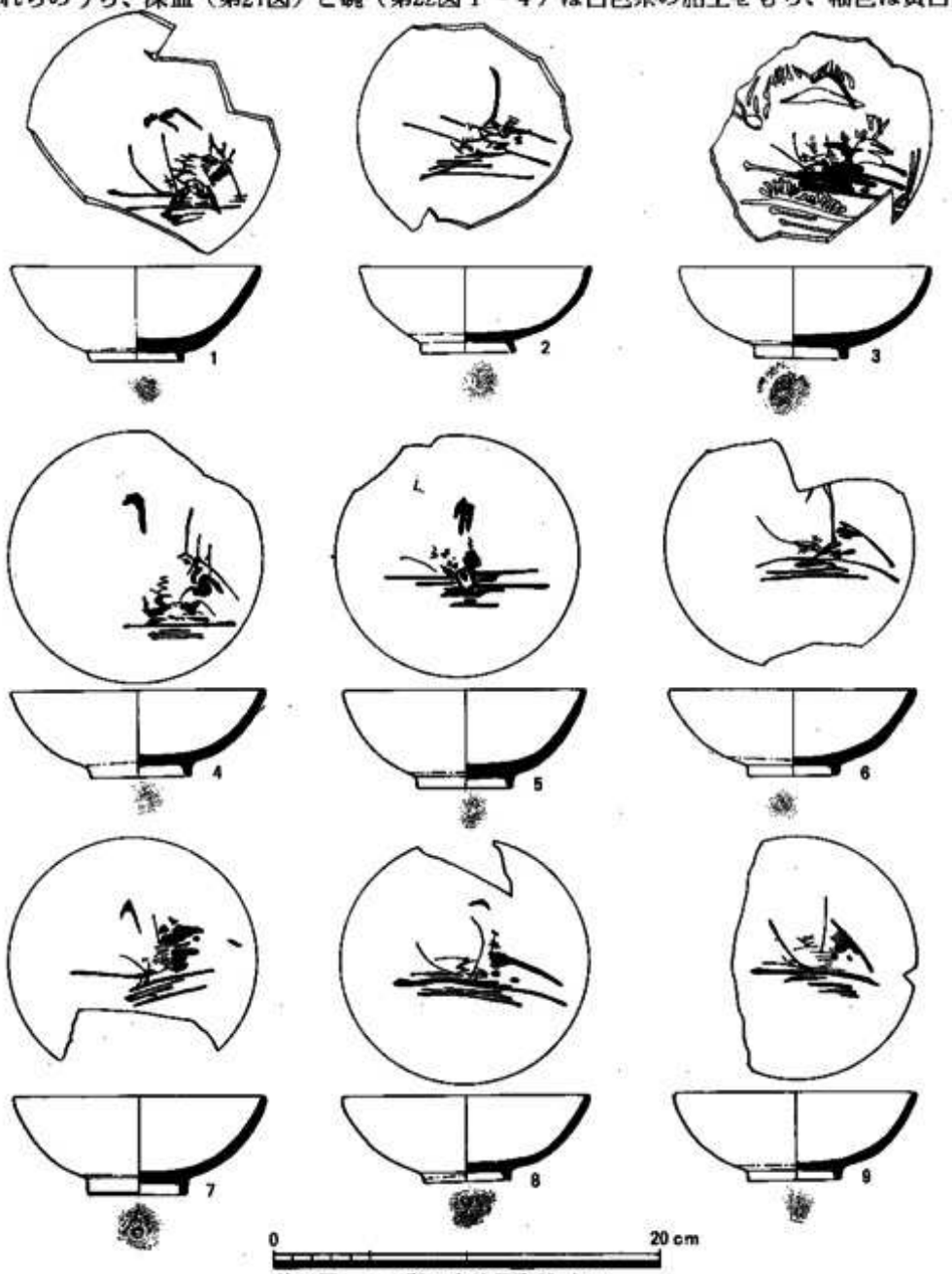
第20図　Ⅱｃ期の磁器

徳年製」の銘が見られ、銘字が多用されたこの時期の代表的な製品である。

いわゆる京焼風陶器（第21・22図）はこの時期の比較的新しい段階に属する。これらの陶器を焼いていた可能性が大きい肥前陶磁器各窯での共伴磁器の年代もこれと大きく矛盾しない。

いずれも皿は見込みに、碗は外面に銹絵の山水楼閣を描くが、稀に（第21図３）のように色絵を描き加えるものがある。

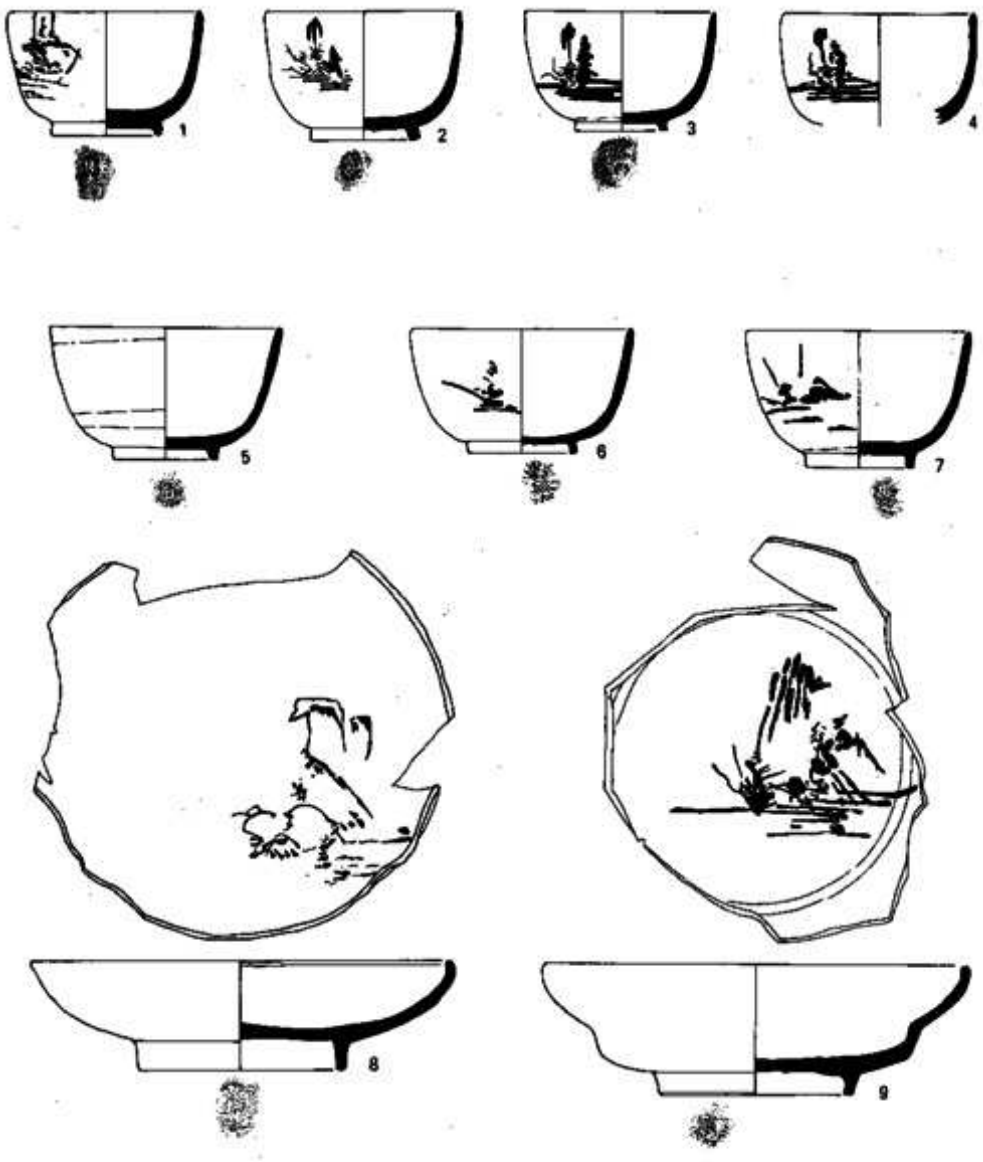
これらのうち、深皿（第21図）と碗（第22図１～４）は白色系の胎土をもち、釉色は黄白褐



第21図　Ⅱｃ期の京焼風陶器（１）

色または黄灰褐色である。しかし、やや大型の碗（第22図5～7）や大皿（第22図8・9）は灰黄色または淡緑褐色の胎土をもち、釉は暗黄緑色で透明感がある。両者は現在のところ共通した形態・法量のものは見られない。また、絵付も後者の方が粗雑なものが多い。

高台内の印刻の銘字は「清水」（第21図5・9、第22図1・6・7）・「新」（第21図6・8）・「斎」（第21図4・7）・「小松吉」（第22図3）・「雲」（第22図2）・「冨永」（第21図3）や篆書体のもの（第21図2、第22図5・9）がある。



第22図　Ⅱc期の京焼風陶器（2）

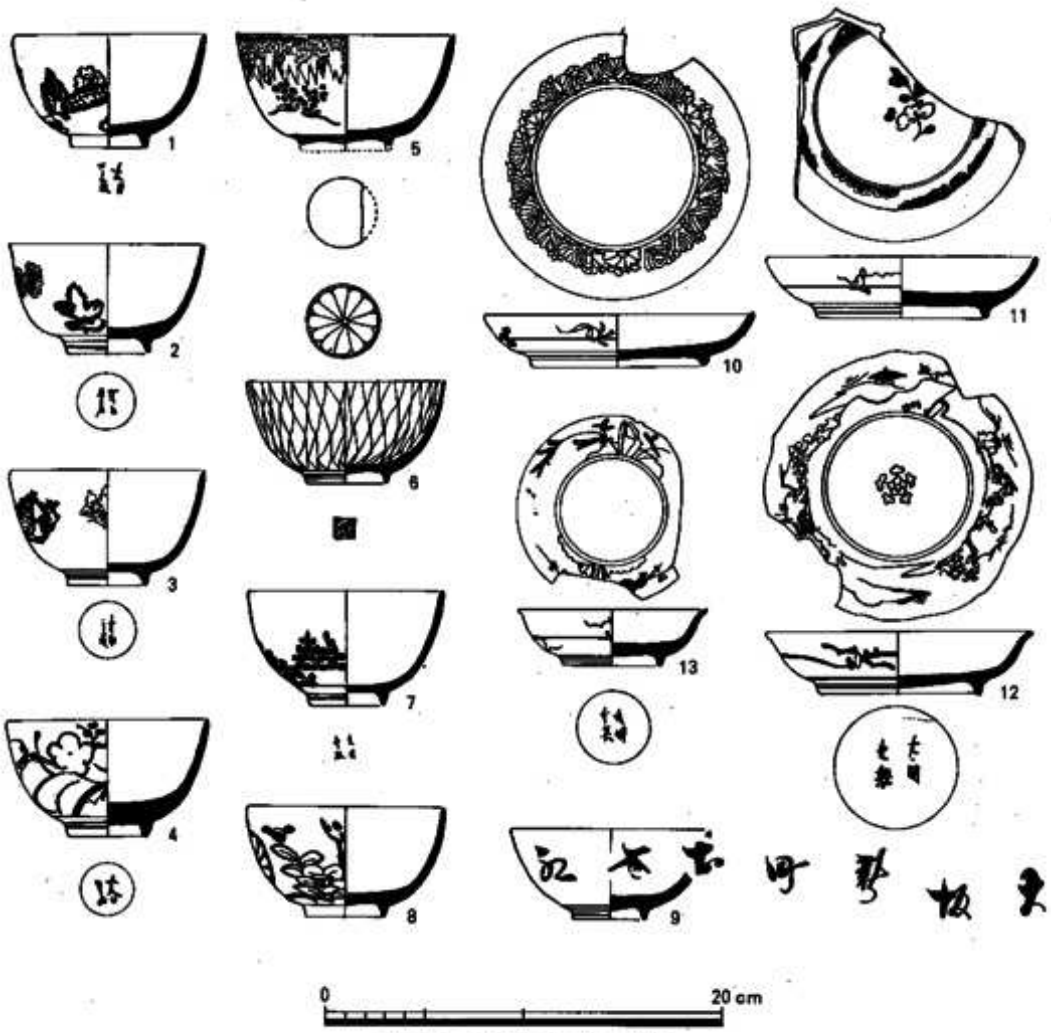
Ⅲ　1690年代～1780年代（元禄～天明）

清朝の磁器輸出復活によって海外需要が減少し、国内市場中心に、いわゆる「くらわんか手」と呼ばれる日常雑器が大量生産された時期である。

この時期を代表する絵付技法はコンニャク判である。印刷装飾の一つというだけで具体的な施文方法は不明であるが、手描きとの併用や皿（第23図12）や筒碗の見込みの五弁花に多用され、18世紀後半まで続いて見られる。

碗（1～9）のうち（1～3）はコンニャク判と高台内面に「大明年製」崩れ銘が併用され、（5）はやはりこの時期の絵付手法である型紙摺が用いられている。文様を切り抜いた型紙を器面にあて、呉須を塗って小紋のような細かい連続文様を施している。（9）の外面には「大坂新町於笹紅」と書かれており、屋号を書き入れる注文生産の存在を知ることができる。

皿（10～13）では（10・12）にハリ支えが、（11）の絵付に墨弾きが見られる。



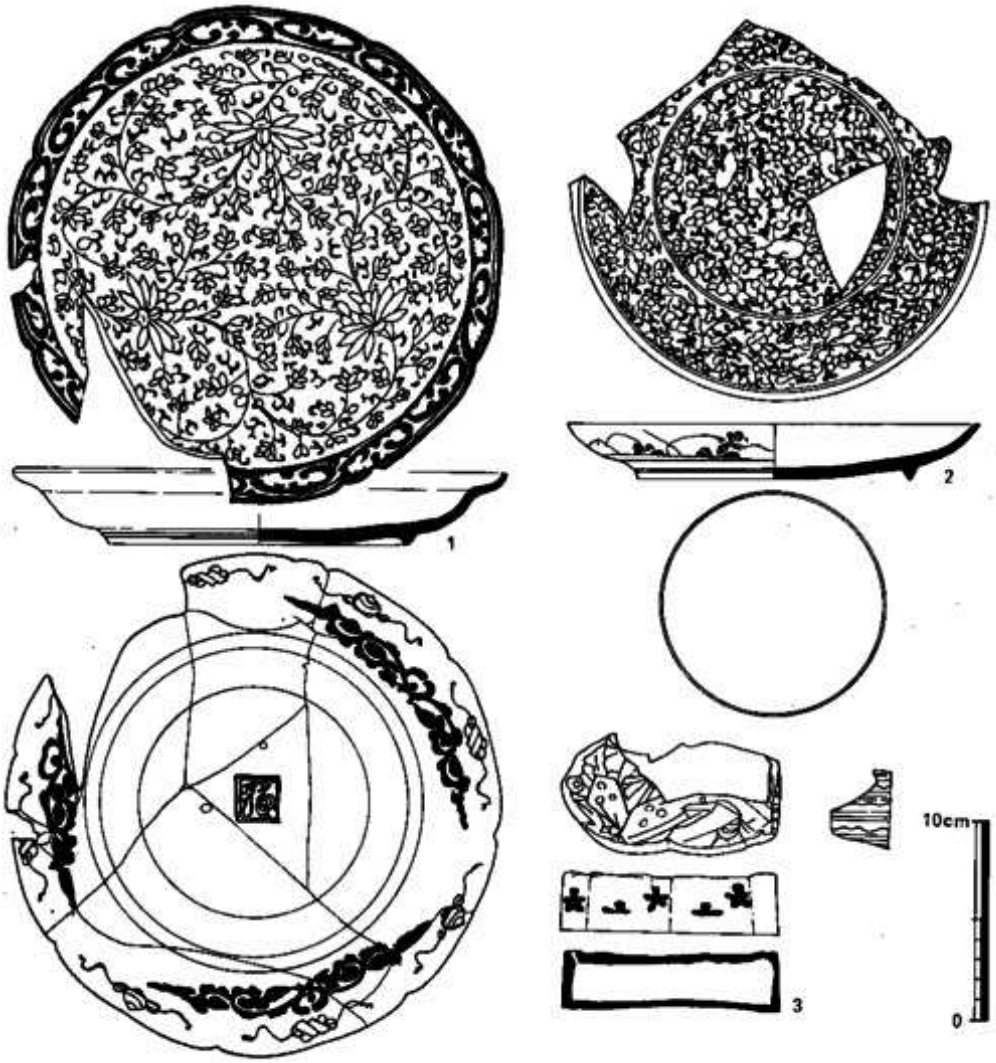
第23図　肥前陶磁Ⅲ期の磁器

大皿（第24図１）の口縁部には鉄錆が塗られ、高台内面には渦福字銘と４箇所のハリ支えが見られる。口縁部に鉄錆を塗る手法は「口錆」と呼ばれ、伊万里磁器では1640年代ごろから現れる。この皿はしばらくの間伝世されたらしく、破損を最初は膠によって、次には鉛ガラスによるいわゆる「焼継」によって補修されている。

（２）の大皿も高台内面に３箇所のハリ支えが見られる。

このようなハリ支えを多用する大型皿を焼成する窯は、この時期では佐賀県西松浦郡有田町西部の樋口窯が知られている（物原下層・18世紀前半）。

（３）は色絵の水滴である。上面に型押しと赤・緑の彩色によって十二単衣を着た女官が表現されているが、欠失した部分が多い。長側面には花文様が、短側面には鋸線・波線が赤で描かれている。底部の内面には布の圧痕が見られる。



第24図　Ⅲ期の磁器

大型鉢（第25図１）は内面の波濤様の文様の絵付に墨弾きが使われている。高台内面には１箇所のハリ支えが見られる。見込みの五弁花は手描きである。

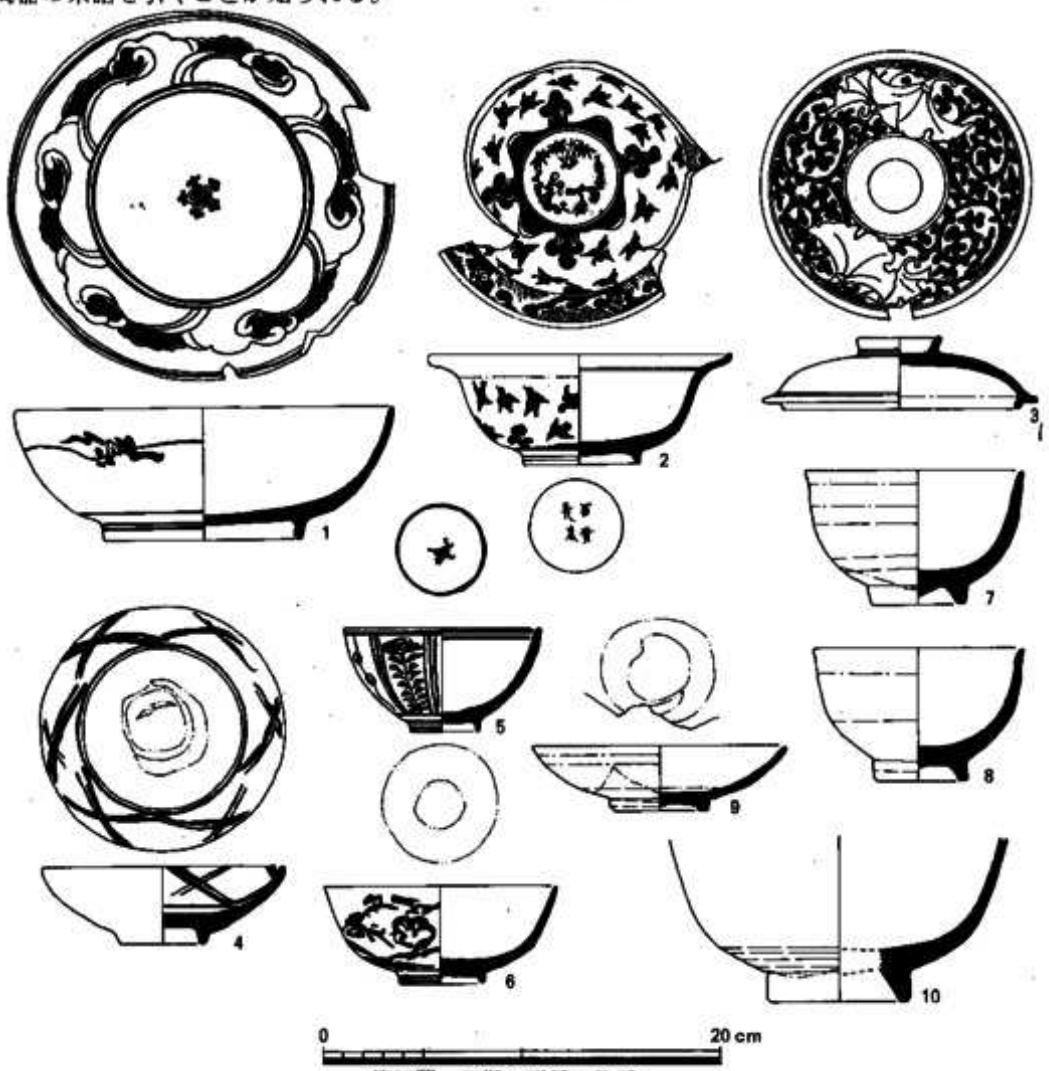
口縁部が外反する鉢（２）は高台内面に「富貴長春」銘が書かれている。

蛸唐草と銀杏文様の蓋（３）はこの時期に通有の形態と法量である。この蓋と対をなす身の断片も存在する。筒状の体部に幅広い高台がつく。

（４）の皿と（６）の碗は18世紀中葉～末にかけて大量生産されたものである。いずれも見込み部分を蛇ノ目状に釉ハギしている。

（５）の碗はこの時期では最も新しいもので、製作年代はⅣ期にまたがっている。

銅緑釉を基調とした陶器碗（７・８）・皿（９）・鉢（10）は佐賀県嬉野町内野山西窯のものであり、皿は見込みを蛇目状に釉ハギしている。砂目積技法を用いているものもあり、唐津陶器の系譜を引くことが知られる。



第25図　Ⅲ期の磁器・陶器

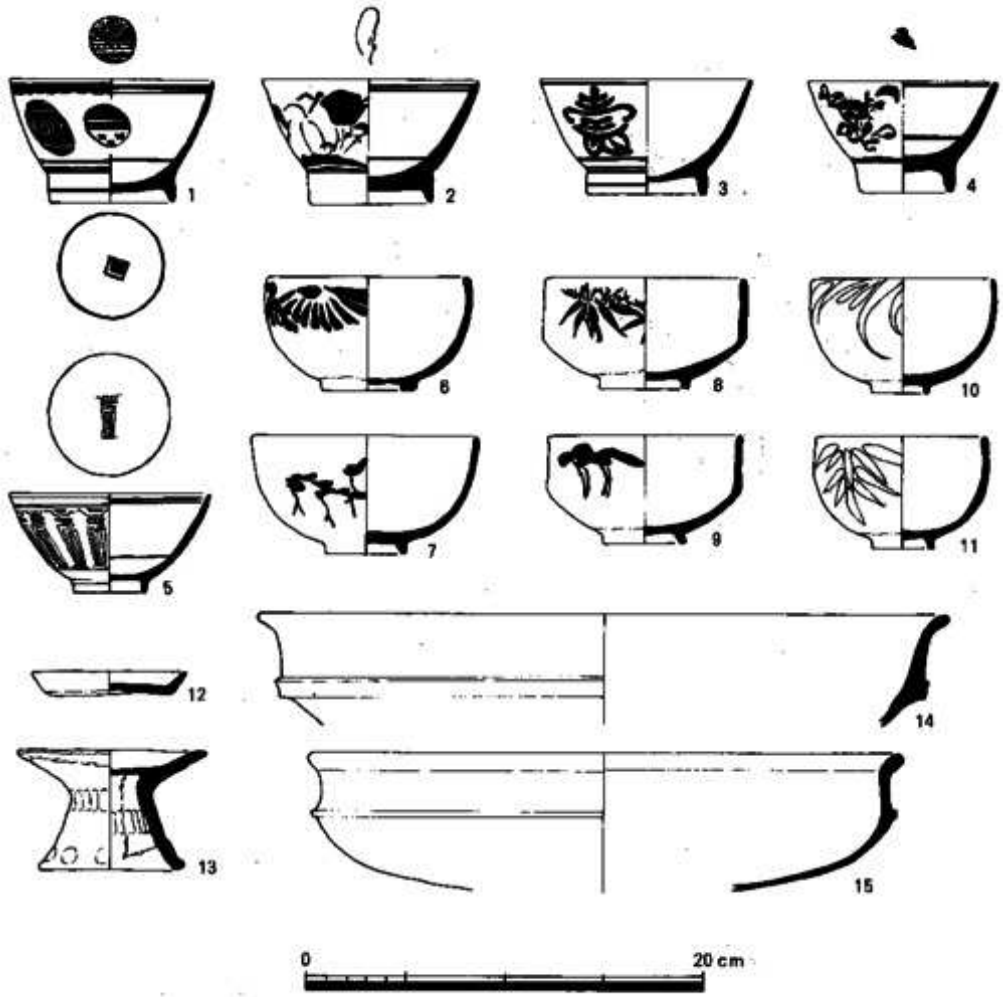
Ⅳ．1780年代～1860年代（天明～慶応）

器形等に清朝磁器の影響が顕著である。なかでも高い高台をもついわゆる広東碗（第26図1～4）はこの時期を代表する。（1・3）はやや古い時期のものである。（1）は焼継による補修が施されている。

京焼系陶器碗（6～11）は茶器として製作されたものであろう。（10・11）は比較的新しい時期に属するが、灰白褐色できめ細かい胎土をもち、絵付は黄白褐色の地に金・赤・緑で草や竹の葉を描いている。焼成は（6・7）よりもやや軟弱である。

土師器皿（12）と器台（13）は仏（神）供用に製作されたものである。いずれも胎土に赤色クサリ礫・金雲母・白色砂粒を含む。皿の口縁部にはススが付着している。

土師器焙烙（14・15）は型造りとロクロ成形による薄い器壁のものが主体である。胎土にはあまり砂粒を含まなくて、色調は淡褐色ないしは淡黄白色を呈する。



第26図　肥前陶磁Ⅳ期の磁器・陶器・土師器

2．木製品・金属製品・その他

木製品は奉行所西濠から出土したものがほとんどであり、下駄・漆器椀・用途不明板材などがある。

金属製品はＳＤ4016出土の円柱状鉄器以外は奉行所西濠からのものである。煙管（全長13.3cm）や用途・年代ともに不明の筒状銅容器が３点以上出土している。

その他の遺物ではＳＤ4016で鏑羽口が出土している。両端を欠失しているが、最大径6.0cm、孔径2 4cmである。鉄鋌も伴出しているが年代を明らかにし得ない。

3．瓦

奉行所濠から近世の瓦が多く出土しているが、ここではそれ以前の軒瓦に説明を加える（第27図、ＰＬ４）。

均整唐草文軒平瓦（１）　ＳＥ4018出土。外区および内区の右半分は失われているが、中心飾りの左半分と左側に展開する唐草文が一単位分残存している。瓦当文様は平城宮6671型式の範疇にあり、上外区は菱形の珠文、下外区は線鋸歯文である。

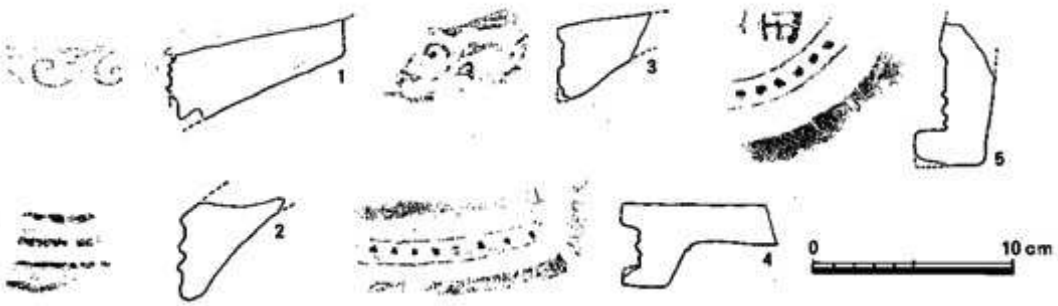
重郭文軒平瓦（２）　郭文様の長辺部分しか残存していない。全体的に文様の彫りは浅く稜をなさない。平城宮6572型式に属する。

宝相華均整唐草文軒平瓦（３）　ＳＥ4018出土。４弁の花文（宝相華文）を中心飾りにして、忍冬文状の唐草が左右に展開する文様構成の右半分だけ残存している。

連珠文軒平瓦（４）　ＳＥ4017出土。内区と脇区との境界に界線をもたない。周縁は高く平坦で顎部は短かい。

興福寺銘軒丸瓦（５）　ＳＤ4016出土。福の字の旁部分下部だけ残存する。周縁は高く、平坦な面をもつ。

（坪之内　徹）



第27図　軒　瓦

奉行所濠（N区・S区）・東西溝の花粉分析

金原正明

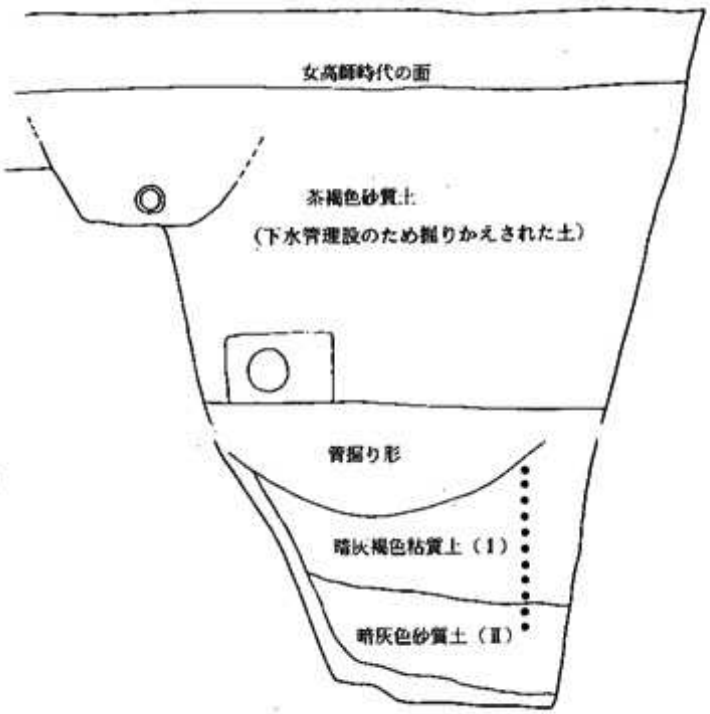
（天理大学附属天理参考館）

1．方法

試料は、奉行所濠のN区とS区のボーク南壁断面、東西溝東壁断面より、10cm間隔で連続して、それぞれ11層準、8層準、5層準の計24サンプルを採取した。試料採取に際して、攪乱層および花粉検出の困難とみられる粗粒の砂や砂礫は、除外した。堆積物の記載は各項で行なうが、堆積層の区分は調査担当者による考古学的層区分の名称に従った。

花粉遺体の分離濃縮は、1cm³およびその整数倍の試料を、5％KOH処理、傾斜法による砂粒・鉱物粒の除去、25％フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の化学・物理処理を施し行なった。適時グリセリンゼリーによるプレパラートを作製し直ちに検鏡した。

花粉遺体の同定は、標本との対比によって行なった。イネ属（Oryza type Gramineae）の同定は、標本のイネ属との対比によったが、光学顕微鏡下ではやや不十分であるため、イネ属型花粉とした。東西溝では腐植が著しく、分類群を特定できない種類もあった。計数は、プレパラート内およびプレパラート間の偏りによる誤差を少なくするため、複数のプレパラートの複数箇所で行なった。花粉総数300個以上計数を行なった試料は、花粉総数を基数とする百分率で各分類群を求め、その結果を花粉ダイアグラムとして表わした。塊状で頻繁に産する分類群は、ダイアグラムに○印を付した。花粉と胞子の1cm³の産出量は、体積比による方法で求めた。Ulticaceae と Moraceae には樹木と草本が含まれるが、ここでは草本花粉に含めた。



第28図　濠N区南壁断面（1／50）

2．奉行所濠（N区・S区）

1）試料と層序（第28・29図）

濠の上部の堆積は攪乱であり、下部に濠本来の堆積が認められ、2層（上位より1層、Ⅱ層）に区分される。Ⅰ層（試料N－1～9、S－1～

4）は、暗褐色から暗茶褐色粘質土で、腐植・砂・礫の混じる泥である。N区の中位（試料N－6～9）では腐植が多く、最上位（試料N－1・2）では、チャート礫を多く含む。S区の中位では灰色バンド（試料S－4）が挟まれる。Ⅰ層は、近世後半の遺物が含まれる。Ⅱ層（試料N－10・11、S－5～8）は、暗灰色砂質土で、礫・粘土混じりの砂で、下位に向かい粗粒となる。木製品を多く出土した層である。肉眼観察では、Ⅰ・Ⅱ層とも、葉理やレンズ状堆積は認められず、淘汰もやや悪く、水流の強い影響を直接的に受けた堆積物とは考えがたい。Ⅰ・Ⅱ層とも、水流のあまりない水中か湿地的な環境で堆積したと推定される。調査担当者からは、Ⅰ層は一時期に埋められた可能性もあり、溝さらえが行なわれたことも考えられるという所見を頂いた。

第29図　濠S区南壁断面（1／50）

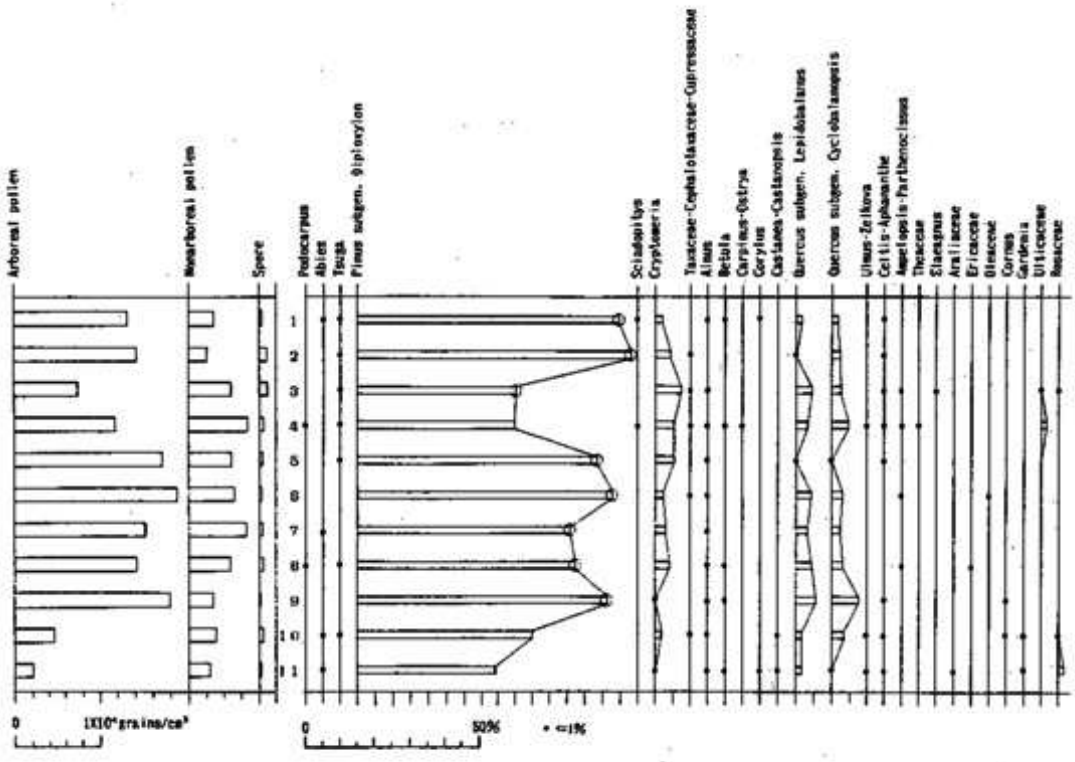
2）結果と推定環境

第30・31図に明らかのように、マツ属複維管束亜属が約40～70%と高率を占め優占する。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が低率ながら安定して産するほかは、出現も不連続である。草本花粉ではアガサ科―ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ科、ゴキヅル、キク科が産する。マツ属複維管束亜属とイネ科は花粉粒が複数個、塊で産するという特徴がある。

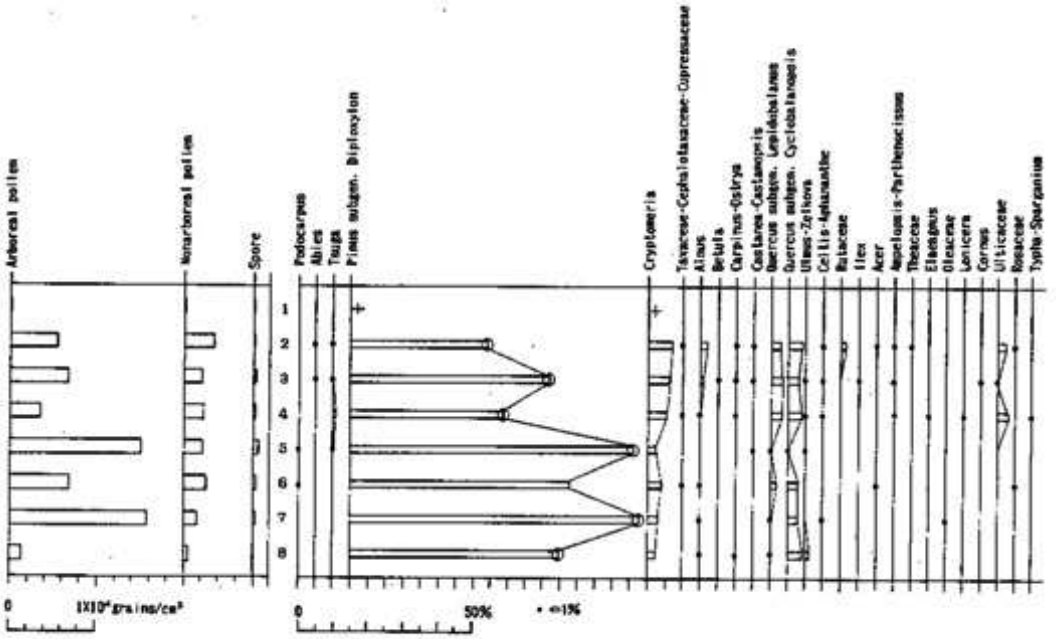
マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）は、高い出現率を示し塊状の産出がみられるため、堆積域である濠に近接して生育していたとみられ、濠の内側の土手の上に松並木があったこと（菅原　1984）とよく一致する。安定して産するスギ・コナラ属コナラ亜属（ナラ類）・コナラ属アカガシ亜属（カシ類）と虫媒花のツバキ科・ツツジ科・ミズキ属・クチナシは、風媒花で不連続に出現する他の樹木より、調査地に近い地点に生育または栽培されていたとみなすことができる。

草本は、ガマ属―ミクリ属・タデ属サナエタデ節・セリ科・ゴキヅルの水湿地を好む草本と、タデ属・アカザ科―ヒユ科・ナデシコ科・アブラナ科・キク科のやや乾燥した環境を好む草本に分けられる。イネ科・カヤツリグサ科には双方の種類を含む。前者は濠内に生育し、後者は周囲の土手等に生育していたとみられる。イネ科は、風媒花であるものの、出現率も高く塊状の産出がみられるため、濠とその周囲を覆う主要な草本であろう。沈水・浮葉植物が産しないのは、濠内が湿地的な環境か比較的浅い水域であったからだと推定される。文献からは滞水してよどんでいるのではなく一定量の水を排水している様子が明らかにされており（菅原1984）、流水の可能性も示されているが、堆積断面の観察と花粉分析結果からは底部の堆積物を直接的に強く洗うような水流は考えがたい。

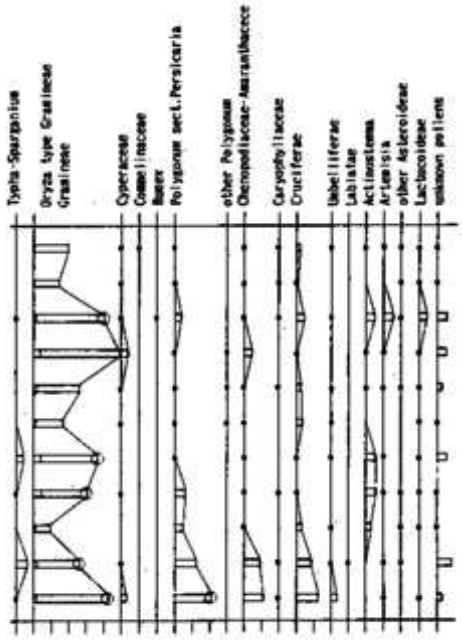
層位的には、マツ属複維管束亜属とイネ科が逆相関で出現率の増減を繰り返すのが大きな特徴である。試料1cmあたりの花粉の産出量においても、樹木花粉はマツ属複維管束亜属と同様の増減を示し、草本花粉は樹木花粉ほど顕著ではないが、同じ傾向を示す。これは、前述した



第30図　津N区花粉ダイアグラム



第31図　津S区花粉ダイアグラム



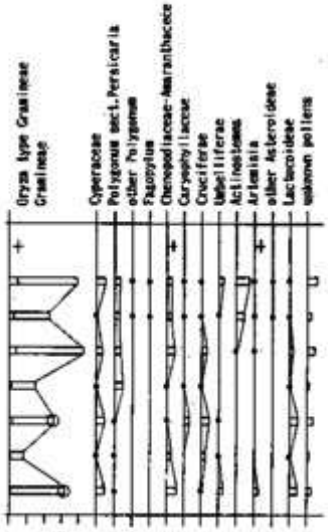
ようにマツ属複維管束亜属とイネ科が最も主要な樹木と草本で堆積域に近接または直接生育していたとみなされることと、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が春咲きで、イネ科には夏から秋咲きの種類が多いことを考慮すると、植物環境の変化ではなく、季節性を反映している可能性が高いと考えられる。季節性とみなした場合、Ⅰ・Ⅱ層あわせて３～４ケ年の比較的速い堆積となるが、前述の堆積物の性質と濠の底部に近い堆積物であることからも充分に可能性があろう。

本遺跡の濠内の堆積物は、閉鎖性の強い小水域か湿地で堆積した堆積物とみなせる。遺跡におけるこの種の堆積物の検討はほとんど行なわれていないため、その特性も明らかにされていなく、今後の充分な検討が必要であろう。

３．東西溝

１）試料と層序（第32図）

東西溝内の堆積物は、暗茶灰褐色粘質土（上層）と暗茶灰褐色砂質土（下層）に分かれる。上層（試料１～３）は、砂・シルト混じりの粘土、下層（試料４～５）は、シルト・粘土混じりの砂である。下層では15世紀の土器が含まれている。溝が埋没する堆積であるが、砂粒の多少による層相変化が見られ、水流の影響のある堆積物とみなせる。



２）結果（第33図）と推定環境

樹木花粉の占める割合が草本花粉より少ない。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が優占し、コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・スギ・ニレ属―ケヤキ属・エノキ属―ムクノキ属が続く。イネ科は樹木草本を通じ最も優占し、25～50％の高率を示す。他の草本ではアカザ科―ヒユ科・カヤツリグサ科・ナデシコ科・ヨモギ属・アブラナ科・セリ科・他のキク科が安定して出現する。樹木と草本を含むクワ科―イラクサ科は10％前後の出現率を示す。カキ・ツバキ科・ソバ属・キュウリ属・スズメウリ属―ニガウリ属―ヘチマ属の産出は注目される。

イネ科を主とする草本の多い環境であり、ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属）をはじめナラ類・カシ類・スギ・ニレ属―ケヤキ属

エノキ属ームクノキ属の樹木が周辺地域に主に生育していたとみられる。アカザ科ーヒユ科・ヨモギ属は人里畑地に多い植物であり、カキ・ツバキ科・ソバ属・キュウリ属・スズメウリ属ーニガウリ属ーヘチマ属は栽培植物であり、畑作が示唆されよう。遺跡の周辺は人為的な環境が広がっていたのであろう。

第32図　東西溝東壁断面図（1／50）

参考文献

辻誠一郎（1979）花粉群集に関する基礎的問題．第四紀研究．17（4）．

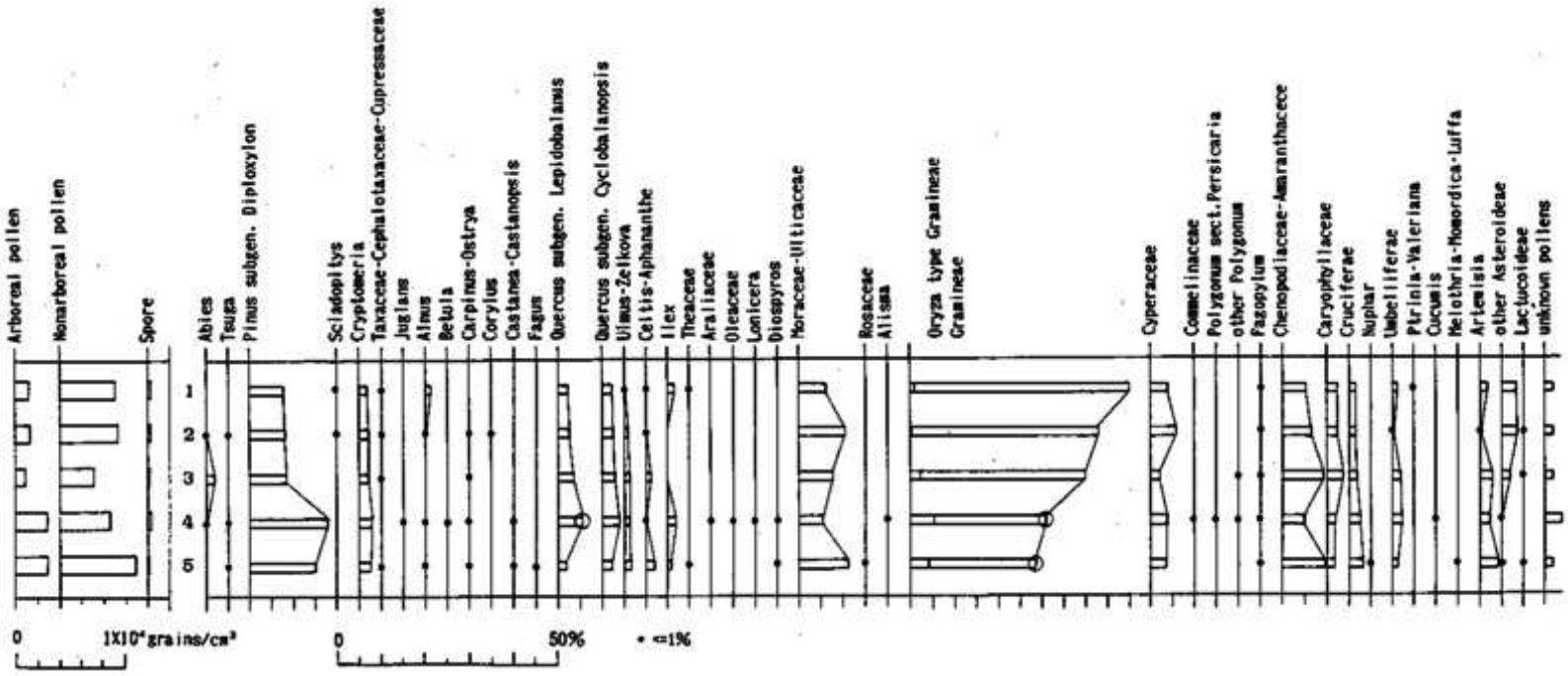
金原正明（1987）遺跡における花粉分析の諸問題ーおもに奈良盆地の遺跡を例としてー．昭和62年度日本文化財科学会大会研究発表要旨．

黄原正明（1984）奈良奉行所の景観．奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ．

辻誠一郎（1984）井戸内堆積物の季節性・古文化財に関する保存化学と自然科学ー総括報告書．

金原正明（1985）花粉分析よりみた奈良盆地の各遺跡における古環境の復原と栽培について．天理大学学報　第145輯．

金原正明（1988）遺跡における花粉群集の基礎的問題について．天理大学学報　第157輯．



第33図　東面溝花粉ダイアグラム

奉行所濠および東西溝の珪藻遺骸

清水　晃
（奈良女子大学・理学部）

珪藻類は各種の水圏に適応した種を多く含み、大繁殖する単細胞の微生物である。細胞壁が珪酸質であるため遺骸（または、"化石"）が残り易い。過去に水圏であった場所に残された遺骸は、水圏がどのようなものであったかをおおよそ判断する指標となる（渡辺1977、清水1986）。

奉行所濠（SD4020、N区・S区）および東西溝（SD4016）跡から、そこを埋めた堆積土を採取し、含まれる珪藻遺骸を分析したので結果の一部を報告する。

試料採取と珪藻遺骸の分析法

試料は、奉行所濠（SD4020）のN区とS区のボーク南壁断面および東西溝（SD4016）東壁断面から、それぞれ10cm間隔に連続した試料として堆積土を採取し、N区から11層準（N－1～11）と濠の底床部（N－12）、S区から8層準（S－1～8）と底床部（S－9）を、また、東西溝から5層準（EW－1～5）を得た（計、26試料）。N－11、S－8およびEW－5はそれぞれ最も古い堆積層である。採取した試料にホルマリンを浸透させた後70℃で乾燥させ、細く砕いて無菌的に保存した。乾重量約10grをとり、0.5%ホルマリン液に懸濁して、粗大粒子（小石、砂粒、腐植質など）と珪藻遺骸を含む分画を分離した。堆積物中の珪藻遺骸は、水懸濁物を静置沈澱させた際、堆積物の最上層部にシルトとともに存在する。これを一定量とって、過酸化水素処理と硫酸処理の後、水洗をくり返してシルトもできるだけ除去し、観察用プレパラートを作った。観察にはノマルスキー光学系を用い、遺骸のうち、個体の形状をほぼ完全にとどめているものをカウントした。珪藻の種の同定は、主として、HUSTEDT, F.（1930）または PATRICK, R. & C.W. REIMER（1966、1975）に従った。

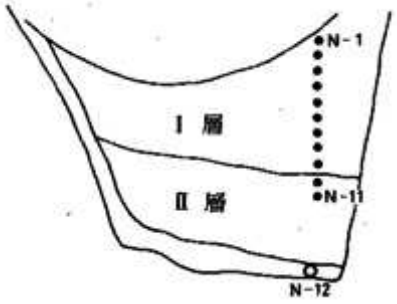
結果および考察

1．奉行所濠（SD4020）

（1）N区およびS区からの試料の特性

第34・35図に示されているように、堆積物の量および試料採取部位から、濠のN区とS区の深さはもともと異なっていたことがわかる。N、S両区とも濠内に攪乱の跡が認められ、これを避けて試料を採取した。N－1およびN－2は小石まじりの砂質土が主体で、泥質・粘土質が主体のN－3～N－11と区別できる。濠本来の堆積土はN－3～11であろう。N－3～9は暗褐色から暗茶褐色の粘質土で、腐植物・砂粒・シルトのまじる泥と考えられ（Ⅰ層）、これは、N－10やN－11の暗灰色砂質土・小石・粘土まじりの部分（Ⅱ層）と区別できる。N－12は濠床部で、白色石灰質状の砂である。

S区からの試料は堆積層の上から下へ採取したもので（第35図）、S－1～8が堆積物、S－9が濠床である。N区と同様にⅠ層（S－1～4）とⅡ層（S－5～8）に区別できる。水懸濁物としたものの比較では、S－1～3はN－3、4に、S－4～7はN－5に、S－8はN－6～11に似ている（地表からの深さでは、S－8がN－5に対応する）。S－9はN－12と全く異っていて、両濠床は全く異なる地層につくられたものと考えられる。

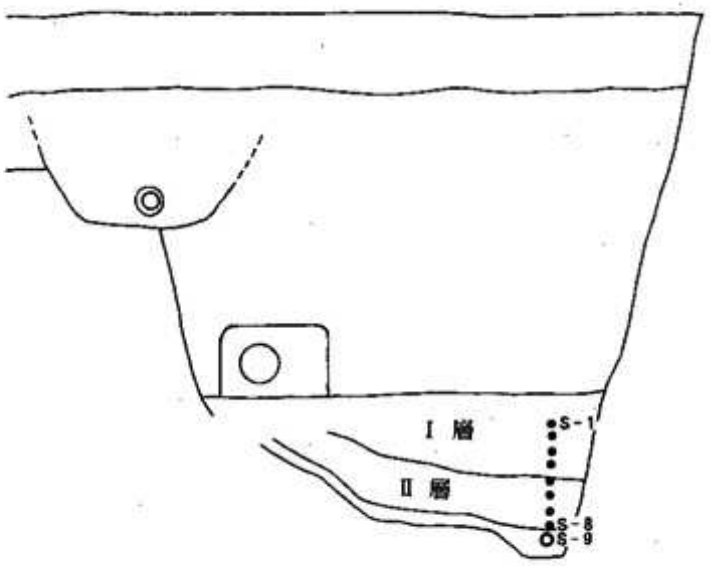


第34図　濠N区南壁断面図（1／50）

外観的には、両区の堆積土は、強い水流や極度の撹乱が加えられたものではなく（Ⅰ層は、自然または人為的撹乱のあった可能性が多少あろう）、ほぼ止水的な条件下で、比較的短期間に堆積したものと考えられる。

（2）堆積土中の珪藻遺骸の分布

試料中の珪藻遺骸について種同定を行ない、どの程度の量が生息していたかを示す結果を表1にまとめた（N－12およびS－9は堆積物に対する対照試料であり、珪藻遺骸をほとんど含まないが、例外的に破片を持つことがあり、それについて種同定が行なえたものは＋印で表示した）。表の数値は、各試料について約1,000個体をカウントして求めた出現頻度（%）である。表にあげた珪藻種（taxa）の外に、出現頻度が更に低い、未同定の種が約10種含まれる。試料は連続的に採取したものであり、両区の試料ともそれぞれ層準のちがいによって珪藻群集の構成に差異があるが、規則性は認められなかった。また、同じ水質の水中に生息したと考えられる群集構成をもつ試料がないことから、おそらく濠のN区とS区は長期にわたって別の堀として存在したものと考えられる。N－11とS－8を比較すると、多く生息していたものはN区では *Pinnularia* 属と *Navicula* 属の種にかぎられ、S区では、それらに加えて *Neidium* 属や *Stauroneis* 属の種も優占例であったことは、



第35図　濠S区南壁断面（1／50）

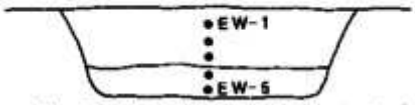
表1　各水系の堆積土中に見られた各種珪藻遺骸の出現頻度

DIATOM TAXA	N-2	N-5	N-11	N-12	S-2	S-5	S-8	S-9	EW-2	EW-4
Melosra granulata	0.4	0.9	-	-	-	-	-	-	-	- (%)
M. italica	1.2	-	1.9	-	0.8	0.6	-	-	1.7	-
M. varians	2.8	0.5	0.6	+	2.3	1.7	-	-	-	-
Cyclotella atomus	0.4	2.4	1.3	-	0.8	5.0	-	-	0.8	6.7
C. meneghiniana	0.4	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
C. pseudostelliberа	0.4	7.0	1.3	+	0.8	1.1	-	-	0.8	2.5
C. stelligera	-	0.9	1.3	-	-	-	0.4	-	0.8	0.8
Stephanodiscus hantzschii	-	0.5	-	-	-	-	0.4	-	-	-
Synedra ulna	7.2	2.8	0.6	+	0.8	5.6	2.7	+	4.2	1.7
Eunotia arcus	-	-	1.9	-	-	0.6	3.1	-	1.7	0.8
E. pectinalis v. exigua	-	-	0.6	-	-	-	2.8	-	-	0.8
Achnanthes exigua	1.6	-	1.3	+	0.8	0.6	0.4	-	0.8	0.8
A. minutissima v. minutissima	1.2	1.4	1.3	+	0.8	0.6	0.4	-	0.8	0.8
Cyrosigma acuminatum	2.0	2.4	3.2	-	0.8	1.1	0.4	-	6.8	0.8
G. scalproides	0.4	0.5	-	-	0.8	6.7	2.7	-	-	-
Diploneis interrupta	-	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-
D. pseudovalis	0.4	5.2	0.6	-	-	6.1	-	-	-	-
D. subovalis	-	-	-	-	0.8	10.1	0.8	-	-	-
Caloneis bacillum	-	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-
C. silicula	0.4	0.5	0.6	-	-	0.6	0.8	-	-	0.8
Neidium affine	0.8	0.5	-	-	0.8	2.2	3.5	-	-	0.8
N. bisulcatum	0.4	0.9	-	-	2.3	2.8	9.7	-	0.8	0.8
N. iridis f. vernalis	-	-	-	-	0.8	1.1	1.2	-	4.2	4.2
Stauroneis acuta	0.4	3.3	1.3	-	-	1.7	0.4	-	-	-
S. anceps	-	1.4	1.3	-	-	-	-	-	1.7	-
S. kriegeri v. kriegeri	0.4	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-
S. phoenicenteron v. brunii	2.4	4.7	3.2	+	5.3	2.8	4.7	-	5.1	2.5
S. phoenicenteron f. gracile	0.4	2.4	3.2	-	2.3	1.1	2.7	-	5.1	2.5
S. smithii	-	-	0.6	-	-	0.6	-	-	-	-
Anomoeoneis sphaerophora	1.2	3.8	0.6	-	3.0	-	0.4	-	-	6.7
Amphora ovalis	1.2	1.4	-	-	-	-	-	-	-	0.8
Cymbella affinis	-	3.8	1.9	-	0.8	3.4	0.4	+	0.8	2.5
C. aspera	0.4	0.9	-	-	0.8	0.6	0.4	-	13.6	4.2
C. tumida v. tumida	1.6	2.8	0.6	-	0.8	-	1.6	-	2.5	0.8

Gomphonema acuminatum	-	1.4	0.6	+	-	2.2	0.8	-	-	-
G. gracile	2.4	2.4	2.6	+	1.5	2.8	4.3	-	3.4	6.7
G. parvulum	-	0.9	-	-	0.8	0.6	0.8	-	0.8	5.0
G. truncatum v. capitatum	-	-	-	-	-	-	-	-	0.8	1.7
G. turris v. turris	-	2.8	1.1	-	-	1.7	0.4	-	7.6	2.5
Pinnularia acrosphaeria	-	-	-	-	-	-	0.4	-	5.1	5.8
P. acrosphaeria v. turgidula	-	-	-	-	-	-	-	-	4.2	4.2
P. brebissonii v. brebissonii	1.2	7.1	9.7	-	0.8	2.8	10.9	-	0.8	0.8
P. maior	0.4	5.7	5.8	+	0.8	2.8	4.7	+	4.2	3.3
P. mesolepta	0.4	0.5	-	-	1.5	-	0.4	-	-	0.8
P. socialis	1.6	7.1	1.9	-	0.8	1.7	1.2	-	1.7	0.8
P. stomatophora v. stomatophora	0.8	2.4	11.7	-	0.8	5.3	9.7	-	7.6	5.0
P. subcapitata v. paucistriata	-	-	1.9	-	0.8	-	0.4	+	-	-
P. viridis	1.2	9.4	9.7	+	-	0.6	2.7	-	9.3	5.0
Naviçula cuspidata	2.8	0.5	1.3	-	2.3	1.3	10.5	-	-	2.5
N. elginensis	-	0.9	1.3	-	3.0	2.2	-	-	-	-
N. exigua v. capitata	1.6	0.5	6.5	+	1.5	1.7	-	-	-	5.0
N. exigua v. exigua	4.8	0.5	1.3	-	1.5	2.8	-	-	-	-
N. laterostrata v. laterostrata	1.2	-	1.9	-	-	2.2	-	-	-	-
N. cryptocephala v. cryptocephala	15.6	-	2.6	-	15.0	5.8	1.6	-	-	0.8
Nitzschia acuta	-	2.8	-	-	-	0.6	-	-	-	-
N. circumsuta	11.2	1.4	0.6	-	2.3	0.6	0.4	-	-	-
N. hungarica	0.4	0.9	-	-	2.3	-	-	-	-	0.8
N. linearis	0.4	0.9	0.6	-	5.3	2.2	-	-	-	-
N. obtusa	-	-	-	-	0.8	0.6	3.1	-	-	-
N. palea	2.0	-	0.6	-	2.3	1.1	0.4	-	-	-
N. romana	0.8	-	-	-	1.5	1.1	0.4	-	-	-
N. tryblionella	8.8	3.3	2.6	-	9.8	-	0.4	-	-	-
N. tryblionella v. debilis	0.8	5.2	0.6	-	1.5	3.9	0.8	-	-	0.8
Hantzschia amphioxys	2.0	1.4	1.9	+	8.2	1.7	1.9	-	0.8	3.3
Cymatopleura solea	2.0	0.9	-	-	1.5	-	-	-	1.7	2.5
Surirella angustata	1.6	-	1.3	-	2.3	0.6	0.4	-	-	-
S. linearis v. helvetica	1.2	1.4	-	-	1.5	-	0.8	-	-	-
S. moelleriana	2.4	1.9	-	-	3.8	-	0.4	-	-	0.8
S. ovata v. pinnata	0.4	0.5	0.6	-	0.8	-	0.4	-	-	-

両区での珪藻群集に大きなちがいを生じさせており、そのことは濠の最古底泥の堆積が、年代的にも、季節的にもさらに水質的にも同一条件でおこったものでないことを推測させる。両区試料とも、止水域に好んで生息する *Melosira, Cyclotella, Stephanodiscus* 属（浮遊性）や *Pinnularia maior*（付着性）が生息していること、一方生活域として流水に適応している（真流水性）とされる *Navicula eleginensis* や *Surirella angustata* が混っているので、それらに住み場所を提供した流れが奉行所濠へ流入していたことも考えられる。しかし、それにもかかわらず濠に溜った水は他へ流れて行かず、全体としては止水的であったものと考えられる。嫌塩性の種である *Eunotia arcus* の出現堆積層がかぎられており、一方、好塩性種（*Diploneis interrupta* や *Nitzschia tryblionella v. debilis*）が広く生息していたこと、真アルカリ性種（*Amphora ovaris* など）や好アルカリ性種（*M. italica,* など）が好酸性種（*Pinnularia maior* や *P. stomatophora*）よりも多いこと、渡辺等（1982）が好有機汚濁種としてあげている *Achnanthes exigua, Navicula cuspidata, Nitzschia palea* などが少なからず生息していたことなどから、濠には生活雑廃水も少なからず混入して、濠の水は無機的にも有機的にも相当に汚濁し、比較的短期間に多量の堆積土をつくるような、濠の底は泥の多い状態ではなかったかと考えられる。

2．東西溝（ＳＤ4016）



第36図　東西溝東壁断面（1／50）

東西溝（ＢＤ列）は奉行所濠とは全く独立した水環境にあったことは、堆積土のちがいや珪藻群集のちがいからも言えよう（表１のＥＷ－２およびＥＷ－４）。奉行所濠と共通種が多いが出現は少く、個有種は *Pinnularia acrosphaeria v. turgidula* と *Gomphonema trancatum v. capitatum* である。清冽な水とはいえないが、奉行所濠よりは澄んだ水が流れていたものであろう。

以上、奉行所濠および東西溝の堆積土中の珪藻遺骸分析の結果を概述し、珪藻類の生活環境としての「水質」その他を推測して、濠や溝の状態を推論してみた。

文　献

Hustedt,F., 1930. Bacillariophyta, Pasher's "Die Susswasser-Flora Mitteleuropas", Auflage, Jena

Patric,R. and C.W.Reimer, 1966. "The Diatoms of the United States (Exclusive of Alaska and Hawaii)" vol. I, Philadelphia

Patric,R. and C.W.Reimer, 1975, ibid.,vol. II Part I, Philadelphia

清水晃，1986，珪藻遺骸からみた遺跡「水系」の水質、奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅲ，26～29，図版14

小山悟郎、大西一博；1986．等々力渓谷（谷沢川）の武蔵野台地露頭中に含まれる化石珪藻の研究Ⅱ，（財）とうきゅう環境浄化財団（一般）研究助成　№44（報告集）

渡辺仁治，1977，大阪市神崎川の水質汚濁と底泥中の珪藻，奈良陸水，6：27～65

渡辺仁治，他，1982，"有機汚濁河川の付着珪藻群集を用いた新しい水質判定法"，渡辺編，"環境科学研究報告集（B121－R12－10），実験水路による底生生物の環境指標性の研究"，44－47

渡辺仁治，他，1982，"有機汚濁に耐性をもつ付着性珪藻と広い適応性をもつ付着性珪藻"，idid．48－73

表2　珪藻類の生態特性

TAXA	塩分	生活型	生息域の水流	pH
Melosra italica & others	C	B	C	D
Cyclotella atoms & others		A	A	
Stephanodiscus hantzschii		A	A	
Synedra ulna	C	C	C	D
Eunotia arcus	D	C	C	C
Gyrosigma acuminatum	C	C	D	D
Diploneis interrupta	B			
Caloneis bacillum	C	C	D	D
Stauroneis anceps		C		
S. smithii	C	C	D	D
Amphora ovalis	C	C	C	E
Cymbella aspera	C	C	C	D
Gomphonema acuminatum	C	C	B	D
G. gracile	C	C	B	E
G. parvulum	C	C	D	D
Pinnularia maior	C	C	A	B
P. stomatophora	C	C	B	B
P. viridis	C	C	C	C
Navicula eleginensis	C	C	E	D
Nitzschia palea	C	C	C	D
N. romana	C	C	C	D
N. tryblionella v. debilis	B	C	C	C
Hantzschia amphioxys	C	C	C	D
Surirella angustata	C	C	E	C

小出等（一九八六）を参考とした。
塩分に対して……真塩性（A）、好塩性（B）、不定（C）、嫌塩性（D）
生活型……浮遊性（A）、不定（B）、付着性（C）
生息域の水流……真止水性（A）、好止水性（B）、不定好流水性（D）、真流水性（E）、
pHに対して……真酸性（A）、好酸性（B）、不定（C）、好アルカリ性（D）、真アルカリ性（E）

奉行所遺跡の確認について

村田修三
（奈良女子大学文学部）

前々回（1982）の講堂建設地の発掘調査に引続いて、今回の図書館増設予定地に於ても、奈良奉行所の堀の一部が確認された。発掘区[(1)]の西端から約3～3.5mを測る地点で西へ落込む肩があり、堀底の堆積層が続いていた。本調査に附随して行われた土管埋設箇所の発掘地で、この堀の西肩と推定される落込みが検出された。先の東側の肩との間隔は約9mであった。これを奉行所の西側の堀の幅とすることができる。発掘調査によって堀幅が確認できたのは、今回が初めてである。また今回検出された堀底の層は発掘区の西南端では東方へ曲がる状態を認めることができなかったので、堀の西南角は発掘範囲を南へそれること、つまり、南を画する東西行の堀は、大学構内南塀の北11mの線より南に位置することがわかった。

南を画する東西行の堀（以下南堀と略称）の位置については、前に紹介したように、1978年の構内東南隅の池の改修工事で、大学構内南塀の北6.1mの線より南に堀底の堆積層[(2)]が観察されていたので、今回南塀の北11mの位置で確認されなかったことと符合する。南堀の幅は、「南都御役所絵」（以下絵図と略称）の記載によると9間、1間＝6尺とすると16.4m、6尺5寸とすると17.7mの規模であった。堀底の堆積層の幅はこれより狭くなるはずだが、もし堀跡が大学構内南塀の位置を基準にしてこれより北側に存在したとすると、今回の発掘によって検出されたはずである。それが確認されなかったということによって、堀跡の南辺が塀より南へはみ出しているということが確実になったわけである。合わせて1978年の改修工事の際の観察による塀の北6.1mという数値の信憑性も高くなったといえる。

このことを傍証するデータが、最近遇然の機会に得られた。1988年9月、奈良女子大学の南に隣接する土地でマンション建設の基礎工事が行なわれ、その掘削現場を観察したところ、堀底の堆積土と思われるヘドロ層が大学敷地南限の塀の南約8mの地点まで認められた。土層の撹乱を識別する条件もなく概要だけ観察したので、正式なデータとしては使えないが、他の知見と矛盾しない限りにおいて、仮に塀南8mという数値を便宜的に用いることにする。そこで仮説として、南堀は現在の大学の南塀をはさんで、北へ約6m、南へ約8mの、都合14mの範囲でその幅が認められたものとする。この範囲は堀底に堆積したヘドロ層の上部にあたるはずなので、深部の堀底はこれより狭く、上部の土塁上面の位置で測るとこれより広くなる。絵図による南堀の幅9間（1間＝6尺で16.4m、6.5尺で17.7m）は両岸を登りきった築地や塀の間を測っているので、ヘドロ層の観察による14mより2～3m広くなることは自然である。

講堂建設地の発掘で確認された北堀の東部の場合、江戸時代後期以後、北岸の北魚屋西町の方から埋められていき、奉行所廃絶後堀底北半分、幅3.5m（北岸土塀推定線から測ると約6m）の線で護岸されて民有地に取込まれてしまった。これと同じ事態が南堀についても生じ、

南半分（マンション工事観察では幅８ｍ）が南の宿院町側に取込まれてしまったことがわかった。

東・北の堀については、前回以後新しい知見は得られなかった。よって以上のデータを更めてまとめてみると、以下のようになる。北堀は上幅９ｍ、その位置は、南岸の肩が大学構内南塀から北172ｍを測る。西堀は上幅９ｍ、その位置は、東岸の肩が大学構内東塀から約183ｍを測る。南堀は、不正確な一部の土層観察しかできていないが、上幅約14ｍ、その位置は、北岸の肩が大学構内南塀から北約６ｍを測る。東堀は、上幅は観察されていないが、南寄りの西岸の肩が大学構内東塀から西約10ｍを測る。これらのデータを絵図の堀の形を参照して一部推定を加えて復元すると、第37図のようになる。

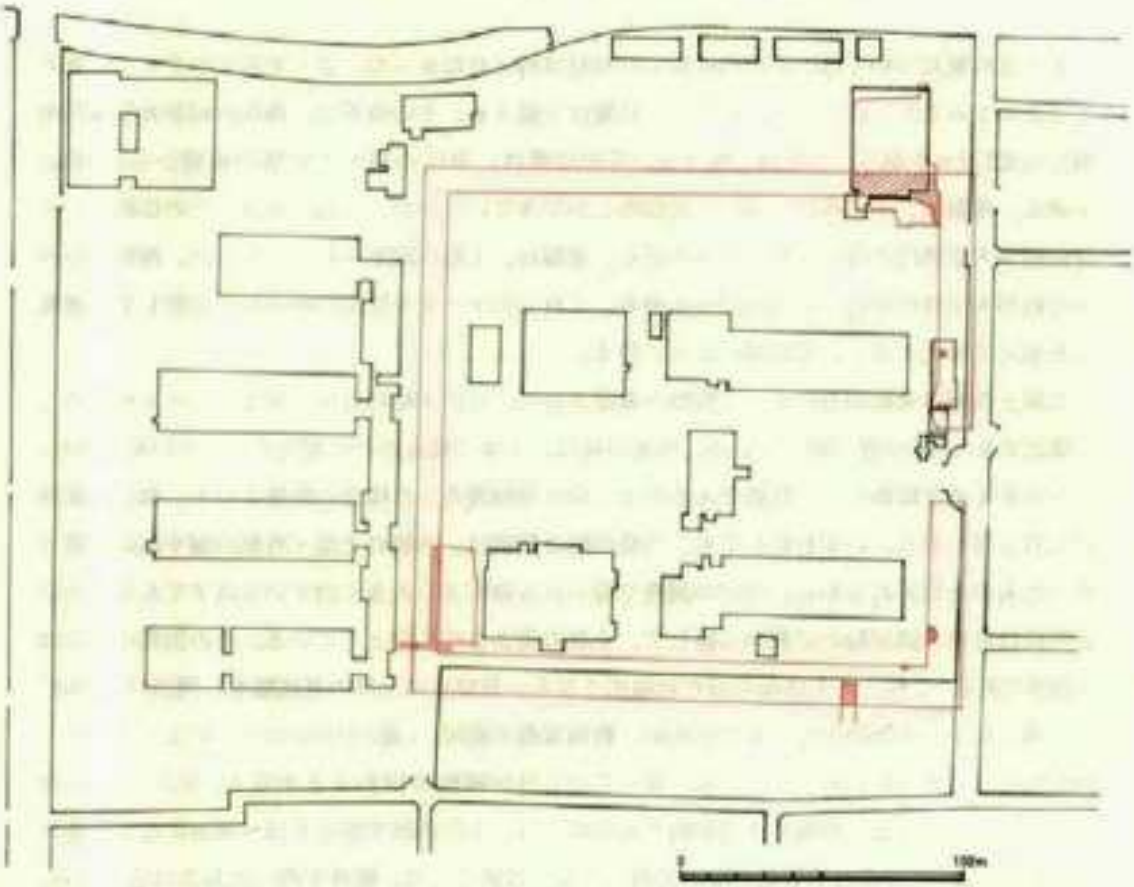
北堀と西堀は発掘調査によって堀幅が確認された。その上幅は近世の層までレベルを下ろして確認できた肩の位置で測っている。南堀の幅は、工事で撹乱された堀底のヘドロの混入層を、レベルを定めず観察しての数値であるので、仮に発掘調査した場合の数値よりも、幅広い範囲になると思われる。いずれにしても、当時の堀の数値は、内側の土塁・外側の塀や垣の位置で測ったものと思われるから、今日の調査で得られる数値より大きく出ているはずである。菅原正明氏は近世の諸記録の記載から推して、土塁の高さを約２間としている。その頂部中央の塀の位置で測ると、少くとも法面の分だけ幅広くなる。菅原氏は土塁の基底幅を、明治41（1908）の「第弐女子高等師範学校（奈良女高師）敷地実測平面図」（縮尺600分の１）によって、南・西面が15ｍ、東面が13ｍとしている。仮にこの半分が堀幅に加わるとすると、6.5～7.5ｍ加算されることになる。発掘による堀幅９ｍ[3]の場合は、土塁頂部で測ると15～16ｍになる可能性がある。その分だけ奉行所敷地の堀内で測った長さは狭くなり、堀外で測った長さは広くなる。仮に法面の片側幅を６ｍとして加減すると、次の数値を得ることができる。（＋αは東側道路へはみ出す未確認部分）

外側：東西192（＋α）ｍ、南北189ｍ、内側：東西161ｍ、南北154ｍ

堀幅：東堀16（＋α）ｍ、西堀15ｍ、南堀20ｍ、北堀15ｍ

「第弐女子高等師範学校敷地実測平面図」によると、堀幅が半ば埋められた状態で、外側東西188～192ｍ、南北176～178ｍ、土塁の頂部で測る内側東西159～162ｍ、南北153～156ｍの値が得られる。南堀・北堀の埋土部分を復元して考えると、前記の計測値にほぼ等しい。両方相俟って信憑性の高い数値と現地比定が可能となった。前回推定したものより西・南両面が若干広がる規模であることが確認されたわけである。念のため前回もあげた絵図の数値をあげておくと、堀の外側で、東西93間、南北93間半、内側で東西80間、南北76間半、堀幅は東側７間、西側６間、南側９間、北側８間である。間数の換算について、前回は１間＝６尺５寸を予想していたが、今回これより大きく、およそ１間＝６尺７寸を宛てなければ合わないことがわかってきた。

このように奉行所の規模は若干大きくなったが、全体プランが正方形を基準とするものであっ



第37図　奉行所堀の現地比定図

たことには変りがない。堀の内側の規模はほぼ方1町半になり、堀外で測ると方2町よりやや狭い規模となる。この規模は名古屋城本丸・二条城本丸と、堀幅のやや狭い点を除くとほぼ等しい。前回述べたように、近世初頭の方形郭は、馬出しを用いれば正方形（名古屋）、馬出しが直接取付かなければ、折(4)を用いて正方形の崩れた形（駿府・篠山・福井）となる。馬出しが付かないのに正方形という点で、奈良奉行所は二条城本丸と同類型・同規模となるが、徳川家康の旅宿用の各地の御殿も、やや小ぶりながら当時の基準プランの流れを示していることも前述した。

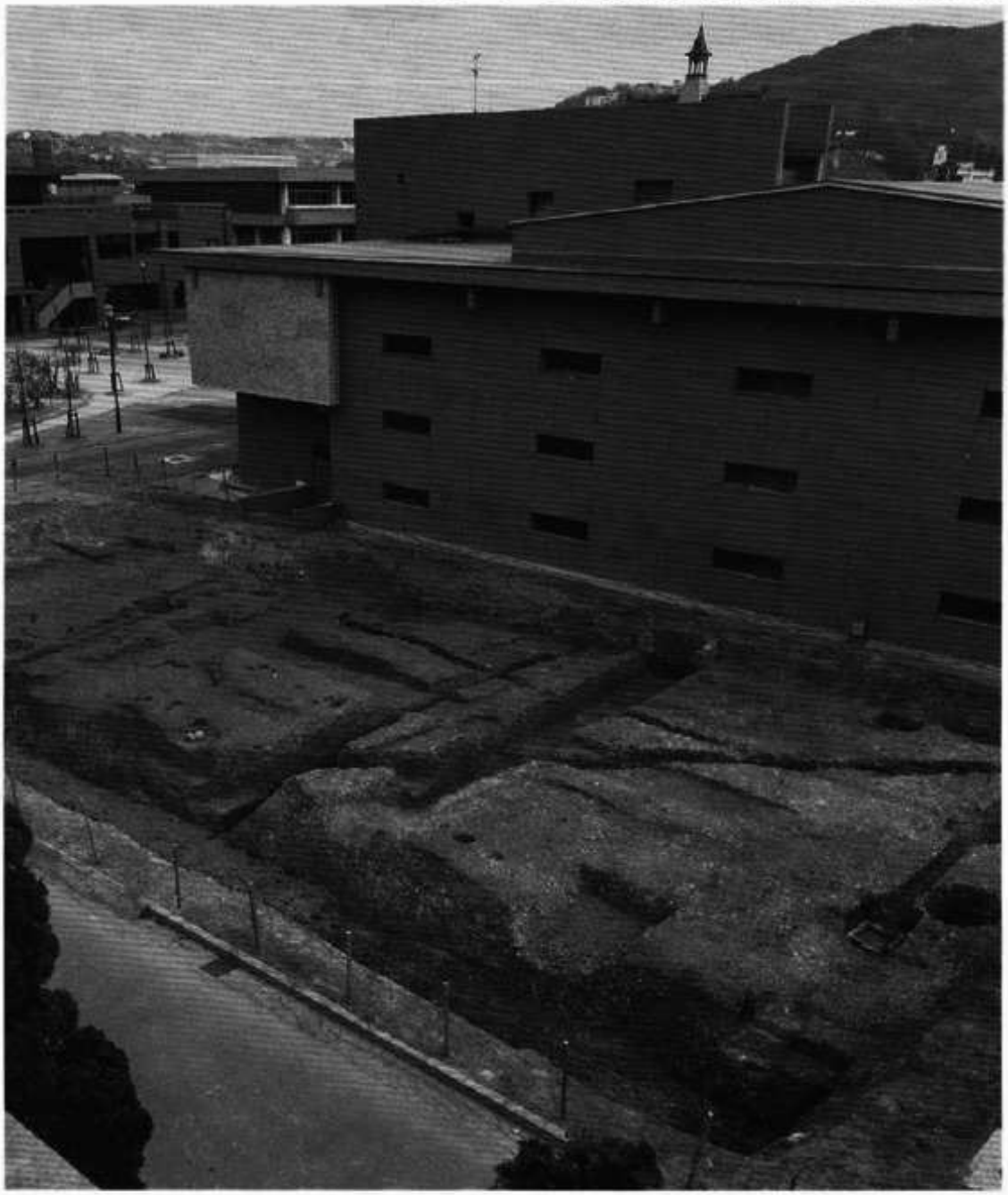
単郭方形の城館は、最近の古墳時代の豪族館の発掘調査例の続出によって、一挙にその対象を広げた。弥生時代の集落ぐるみの囲郭形式から、古墳時代に個別の住居・館の囲郭形式へ、という転化を遂げて以来、方形館の歴史は連綿と続くわけであるが、最近橋口定志氏は、防御性の高い堀と土塁に囲まれたいわゆる方形館のイメージが定まるのは中世後期だという提言を行なって注目を浴びた(5)。古墳時代の豪族館には群馬県の三ッ寺遺跡の、86m四方の居館の周囲

に幅30～40ｍの水堀をめぐらすような大規模な周濠形式も報告されており、律令時代の城柵・官衙・宮の築地には[6]土塁に匹敵する大規模な盛土を伴うものもあり、まだ検討の余地はあるが、中世の方形館の変遷については妥当な見解だと思われる。大規模な堀と土塁の存在が確認できる比較的早い事例として、島根県益田市の益田氏居館、三宅御土居がある。現地で復元すると東西２町・南北１町の区画の、内側に土塁が、外側に水堀があり、土塁の一部は往時の高さを維持して現存する。丁度方一町の方形館を二つ横に並べたプランである。広田八穂氏の調査によると、土塁の高さ５ｍ、基底幅14ｍ、堀幅は東と西が20ｍ、南と北が40ｍである。堀幅は益田川の[7]氾濫原という立地条件に規制されて特に大規模になったようだが、土塁は当時のトップクラスの城館の規模を代表しているとみてよい。戦国末期から織豊期になると、高さ４・５ｍの土塁は珍らしくなくなる。比較的狭い城館にも巨大な土塁が普及するため、郭内が擂り鉢状を呈することもある。元来土塁を伴うことのなかった山城も土塁囲みの曲輪が多くなる。こういう経過をうけて、表面的には軍事的な城郭とはみなされなかった徳川家康の一連の旅宿用の御殿にも高い土塁で囲む方形プランが採用された。その流れの中で奈良奉行所を考えてみると、壮大な土塁に囲まれた構えも特に異とするものではなかったかもしれない。この敷地は宿院町の二条通から３ｍも低い場所に立地するが、その不利な立地を意識させないほどの高い土塁によって威容を保っていたようである。

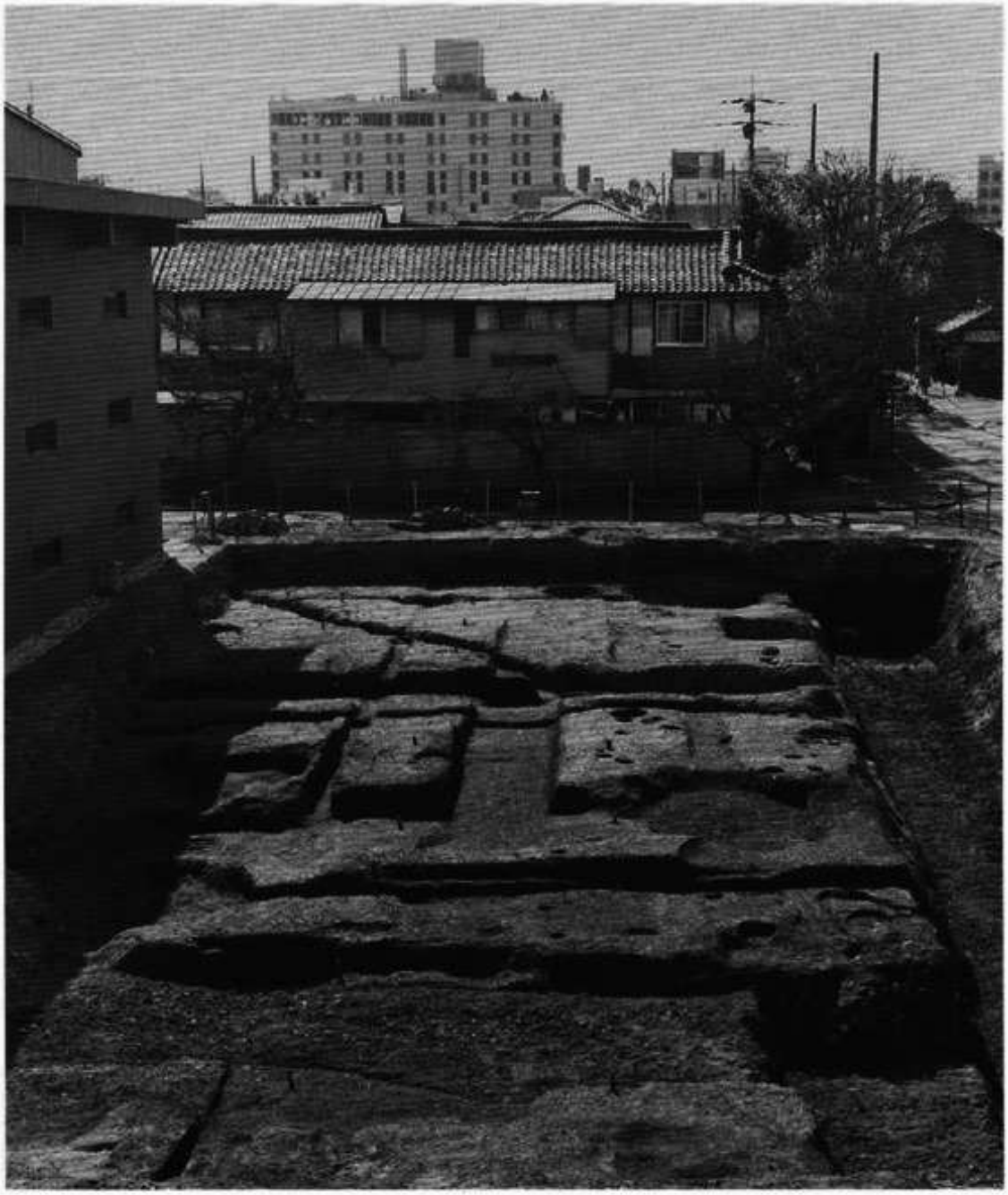
註

（１）『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ』（1984年３月）。
（２）同上所収拙稿「奉行所遺跡の現地比定」。
（３）同上所収、菅原正明氏「奈良奉行所の景観」。
（４）拙稿「近世初期城郭の方形プランについて」（『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅲ』、1985年３月）。
（５）橋口定志氏「中世居館の再検討」（『東京考古』５、1987年４月）。
（６）三ツ寺遺跡の水堀の規模がすべて人工によるものかどうか疑問が残る。
（７）広田八穂氏『西石見の豪族と山城』（1980年）。

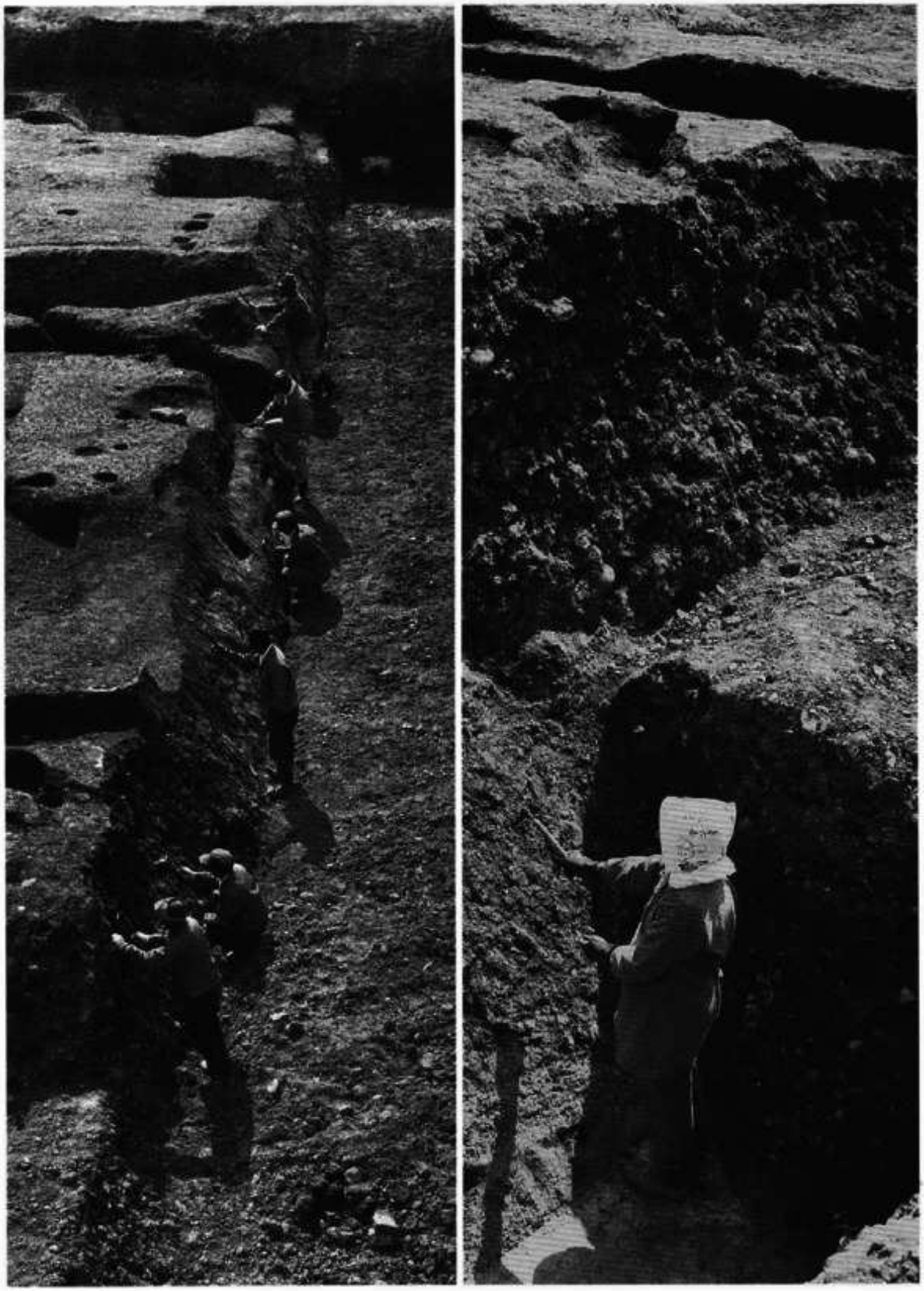
PL．1　図書館棟予定地遺構全景（西南から）



PL．2　図書館棟予定地遺構全景（北から）



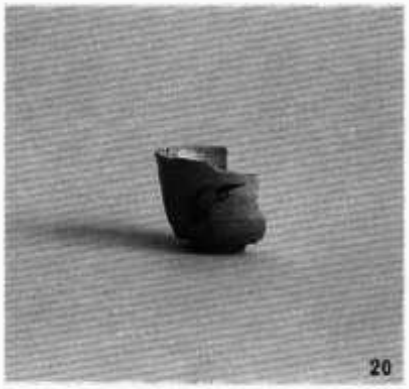
PL．3　奉行所西面の濠（北から）



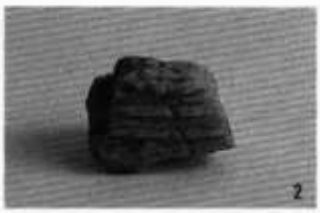
SE4018

SE4017

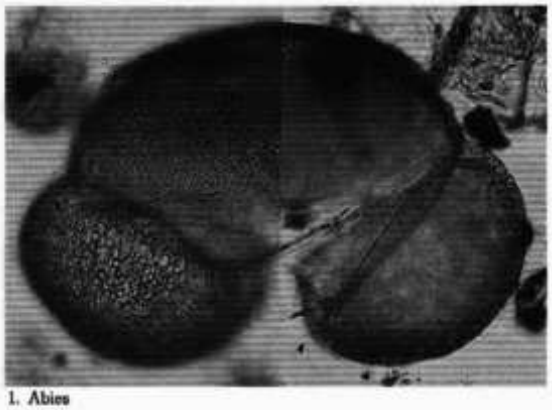
SD4020

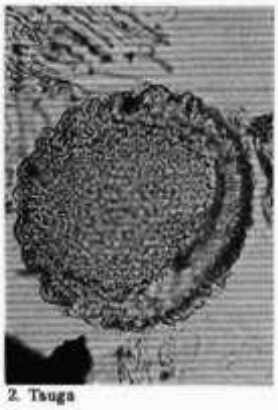


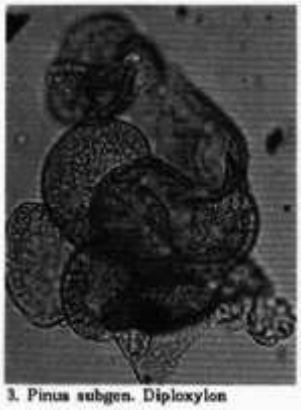
軒瓦



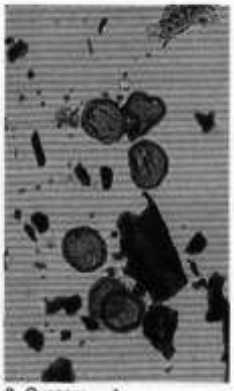
1/3

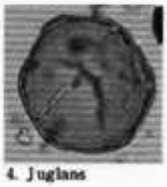

1. Abies

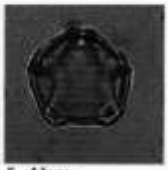

2. Tsuga


3. Pinus subgen. Diploxylon

7. Pinus subgen. Diploxylon


8. Quercus subgen. Lepidobalanus


4. Juglans

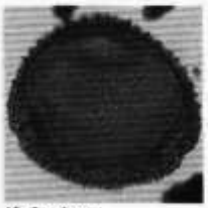

5. Alnus

6. Carpinus-Ostrya

9. Corylus

10. Quercus subgen. Cyclobalanopsis

11. Quercus subgen. Lepidobalanus


12. Lonicera

13. Diospyros

14. Polygonum sect. Persicaria

15. Celtis-Aphananthe

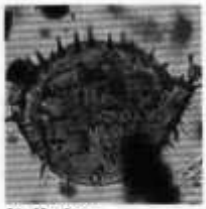
16. Gardenia

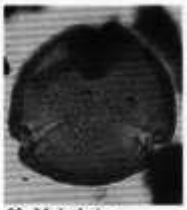
17. Cornus

18. Ampelopsis-Parthenocissus

19. cf. Viburnum

20. Commelinaceae

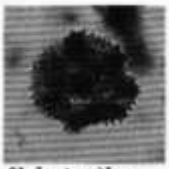

21. Nuphar

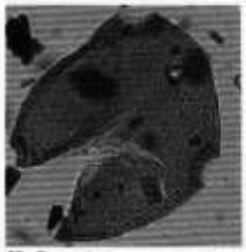

22. Melothria-Momoidica-Lufta

23. Fagopyrum

24. Chenopodiaceae-Amaranthaceae

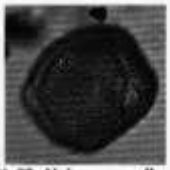
25. Caryophyllaceae


26. Lactucoideae


27. Cucumis

28. Gramineae

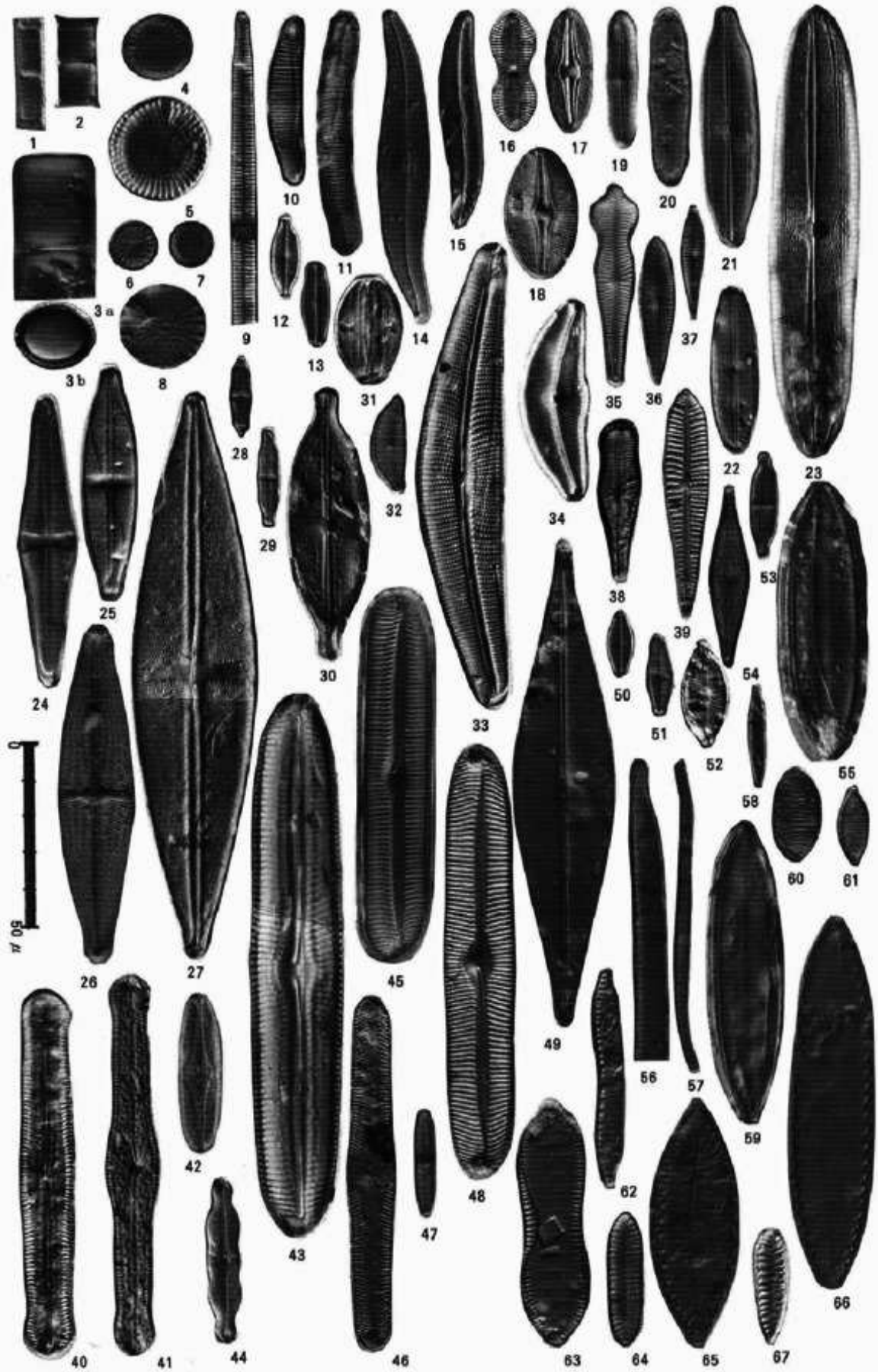
29. Castanea?



30. 31. 32. Unknown pollen

(7：×125、8：×250、他は×500)

PL. 6　出現した珪藻類



（種名は図版裏面）

珪藻の種名

1 *Melosira granulata*
2 *M. italica*
3 *M. varians* 3-a GV, -b VV
4 *Cyclotella atomus*
5 *C. meneghiniana*
6 *C. pseudostelligera*
7 *C. stelligera*
8 *Stephanodiscus hantzschii*
9 *Synedra ulna*
10 *Eunotia arcus*
11 *E. pectinalis v. exigua*
12 *Achnanthes exigua*
13 *A. minutissima v. minutissima*
14 *Gyrosigma acuminatum*
15 *G. scalproides*
16 *Diploneis interrupta*
17 *D. pseudovalis*
18 *D. subovalis*
19 *Caloneis bacillum*
20 *C. silicula*
21 *Neidium affine*
22 *N. bisulcatum*
23 *N. iridis f. vermalis*
24 *Stauroneis acuta*
25 *S. anceps*
26 *S. phoenicenteron v. brunii*
27 *S. phoenicenteron f. gracile*
28 *S. smithii*
29 *S. kriegeri v. kriegeri*
30 *Anomoeoneis sphaerophora*
31 *Amphora ovalis*
32 *Cymbella affinis*
33 *C. aspera*
34 *C. tumida v. tumida*
35 *Gomphonema acuminatum*
36 *G. gracile*
37 *G. parvulum*
38 *G. truncatum v. capitatum*
39 *G. turris v. turris*
40 *Pinnularia acrosphaeria*
41 *P. acrosphaeria v. turgidula*
42 *P. brebissonii v. brebissonii*
43 *P. maior*
44 *P. mesolepta*
45 *P. socialis*
46 *P. stomatophora v. stomatophora*
47 *P. subcapitata v. paucistriata*
48 *P. viridis*
49 *Navicula cuspidata*
50 *N. elginensis*
51 *N. exigua v. capitata*
52 *N. exigua v. exigua*
53 *N. laterostrata v. laterostrata*
54 *N. cryptocephala v. cryptocephala*
55 *Nitzschia circumsuta*
56 *N. linearis*
57 *N. obtusa*
58 *N. palea*
59 *N. tryblionella*
60 *N. tryblionella v. debilis*
61 *N. romana*
62 *Hantzschia amphioxys*
63 *Cymatopleura solea*
64 *Surirella angustata*
65 *S. linearis v. helvetica*
66 *S. moelleriana*
67 *S. ovata v. pinnata*

3-a:girdle view, 3-b:valve view

すべて同一倍率で拡大。図版の中央左端に50μのスケールを付した。

情報処理センター棟
予定地の調査

例　　言

1　本書は昭和61年２月下旬から３月上旬にかけて行われた奈良市北魚屋西町奈良女子大学情報処理センター予定地の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長　岡田英男）の指導を得て奈良女子大学（学長　後藤和夫〔当時〕）が行い、臨時文化財調査室調査員坪之内徹がこれにあたり、奈良国立文化財研究所文部技官金子裕之の指導を受けた。また、島田敏男・山崎信二、和田素子の協力を得た。

3　本書の作成には奈良女子大学教授村田修三と坪之内が編集を担当し、執筆者名は文末に記した。

4　遺物の実測にあたっては、奈良女子大学学生桐山美佳・岩松美穂・片聾里美の、整図にあたっては赤木美苗・矢村貞重の協力を得た。また、遺構写真は八幡扶桑・細幹雄が担当し、藤田千賀枝の協力を得た。遺物写真は隅山佳洋氏によるものである。

5　出土遺物については、富山大学宇野隆夫、高槻市埋蔵文化財センター橋本久和、京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒・堀内明博、大手前女子大学前川要の各氏に御教示を頂いた。

凡　　例

1　層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また、高さは絶対高をあらわす。

2　遺構の略号は奈良国立文化財研究所の方式に従った。また、遺構番号は平城京左京内検出遺構の通し番号を用いている。

3　土器の器種分類・軒瓦の型式は奈良国立文化財研究所で設定したものに準拠し、編年・時期区分は同研究所での成果を用いている。詳しくは『概報』Ⅰを参照されたい。

目　　次

Ⅰ　調査の概要と経過……50

Ⅱ　遺　構……51

1　層　位

2　検出遺構と時期区分

3　まとめ

Ⅲ　遺　物……53

1　土　器

2　木製品・石製品・金属製品

3　瓦

挿　図　第1図　遺構配置図・東壁断面図

第2図　ＳＫ4028出土土器

第3図　ＳＫ4028その他の遺構出土土器

第4図　ＳＥ4030出土土器

第5図　ＳＥ4029出土土器

第6図　砥石・銭貨・軒瓦

図　版　ＰＬ1　発掘区全景

ＰＬ2　発掘区全景・井戸

ＰＬ3　土器・石製品・瓦

Ⅰ　調査の概要と経過

平城京左京二条六坊は、そのうちの11・12・13・14の各坪を現在の奈良女子大学が占めている。いわゆる「周知の遺跡」の範囲内に大学が立地しているのである。このため、開発行為に伴う埋蔵文化財事前調査の必要性が社会から大学に求められて以後は、奈良国立文化財研究所の指導を得て、随時発掘調査が行われてきた。

1982年には講堂建設事前調査の奈良奉行所濠発掘とともに大学院棟（Ｆ棟）建設に伴い発掘調査が行われ、多量の土馬や三彩小壺を含む整地土上に、奈良時代の溝や門遺構が検出された。

1985年、この大学院棟の北側に小面積（約90㎡）ではあるが、情報処理センター棟の建設が計画され、1986年２月、図書館書庫増築予定地とともに事前調査を行った。

調査の結果は、中世の井戸二基と若干の柱穴以外は性格を明らかにできる遺構を検出し得なかったが、10世紀前半の土壙から多量の国産緑釉陶器・灰釉陶器それに中国製越州窯青磁が出土し、この地域が平安遷都後も繁栄を保っていたことをうかがわせた。

調査は３月５日に終了し、保安のために埋め戻しを行った。

調査日誌（1986年２月21日～３月８日）

２・21　機械掘り開始。同日終了。表土下1.6ｍまで下げる。

24　測点の移動と地区杭打ちを行なう。遺構検出開始。

25　中世の浅い土壙・ピット等検出。柱穴であろう。

26　面を少し下げて検出を行なう。土壙や井戸状の遺構あり。円形鍍金金属片や平安後期の軒平瓦出土。

28　西北隅の大きな土壙から灰釉陶器皿・瓶子など出土。10世紀の土器の良好な資料である。

３・１　調査中央やや東よりの二基の中世の井戸を掘る。

３　写真撮影。遺構実測の準備。

４　入試のため作業中止。

５　遺構実測終了。

調　査　風　景

Ⅱ 遺 構

1 層 位

調査地は東南から派生してきた支丘が北側に向かって急激に下る位置にあり、地山面は現地表下２㍍に埋没している。最上層に約1.4ｍもの近現代の積土層があり、以下暗茶土、暗茶褐土、暗灰砂を経て基盤となる灰色砂、灰色砂礫層となる。このうち暗茶土層は中世に、暗茶褐土は平安時代に対応する。基盤となる灰色砂は一様ではなく、平安時代の撹乱のためか、かなり凹凸がある。基盤の面で検出した土壙も、こうした地山の凹凸によるものも多い。

2 検出遺構と時期区分

検出した主な遺構には、掘立柱塀１条、井戸２基、溝２条、土壙４基、柱根１などがある。ここでは古代と中世の遺構が主体である。

古代の遺構

ＳＫ4028　発掘区の西北で検出した不整形土壙。全体の規模は不詳だが、東西3.5ｍ、南北３ｍ分を検出。深さは0.2ｍ程度であるが、北側の発掘区の壁際で深くなり、0.8ｍを測る。土壙の埋土は暗灰色、黒茶褐色を呈する粘土質であり、この中から土師器、施釉陶器など９世紀末から10世紀初頭の良好な資料が出土。

ＳＤ4031　弧状にめぐる溝。ＳＫ4028の南にある。あるいはＳＫ4028と一連の遺構か。溝幅は最も広い場所で0.6～0.7ｍ、南端では0.3～0.4ｍ程に狭くなる。溝の深さは0.3～0.4ｍである。

ＳＡ4037　発掘区の東壁に接して検出した掘立柱の南北塀。柱間は1.1ｍ。

ＳＫ4033　最大幅約２ｍの不整形土壙。南北２ｍ分を検出。深さは約0.15ｍ。

中世の遺構

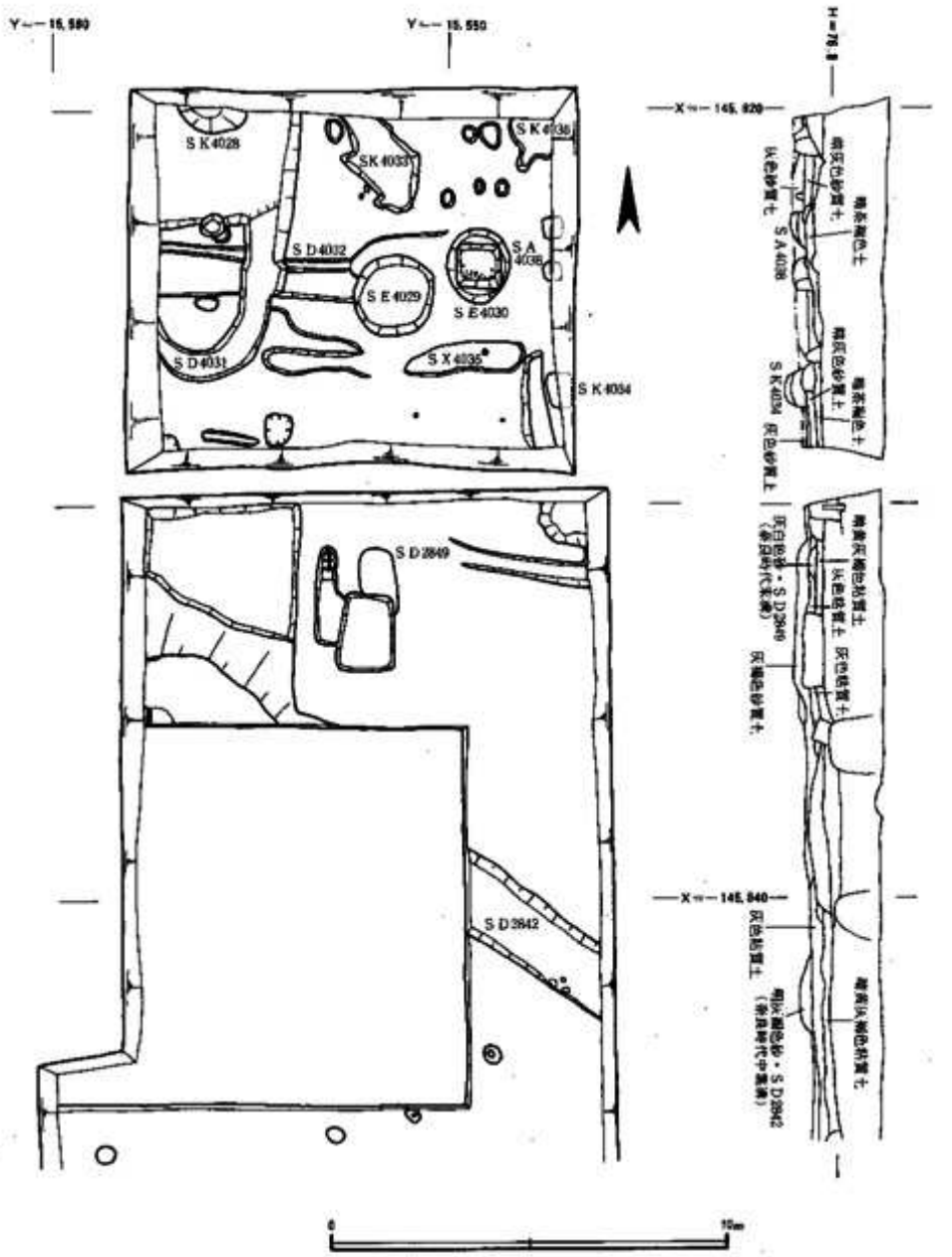
ＳＥ4029　掘形の直径が２ｍの井戸。検出面から１ｍ掘り下げたが危険なため、掘削を中止した。井戸枠は不明だが、井戸内に人頭大の石が多量にあり、石積み井戸の可能性もある。室町時代の土器が出土。

ＳＥ4030　ＳＥ4029と接して並ぶ井戸。掘形は上面が円形、底面は方形を呈する。上面の径約２ｍ、底面は一辺が1.1ｍ、深さ1.2ｍである。井戸枠は抜き取られているが、埋土から横桟の一部が出土し、もとは縦板を横桟で固定する型であろう。井戸底には玉石を敷く。埋土下層からは槌の子や箸状木製品が、最上層からは瓦器椀が多量に出土した。

ＳＸ4035　ＳＥ4030の南2.2ｍで検出した直径0.1ｍの柱根。柱掘形は底面が僅かに残る。

3　まとめ

今調査区は、調査面積が狭く、遺構配置の全体を知ることは難しいが、遺構検出面にかなりの凹凸があるところからみて、建物位置ではなく、敷地の隅の空閑地などにあたる場所ではなかろうか。なお、今調査区の南、大学院・一般教養棟（Ｆ棟）の調査では、調査区の北端付近で東西溝ＳＤ2849を検出しているが、その末端は検出できなかった。　　（金子裕之）



第１図　遺構配置図・東壁断面図（１：200）

Ⅲ 遺 物

出土した遺物には土器・木製品・石製品・金属製品・瓦がある。時期は古代から近世に及んでいるが、そのほとんどがＳＫ4028とその周辺遺構出土の平安時代土器、ＳＥ4029・4030の二基の井戸からの中世遺物である。

1 土 器

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・国産陶器（緑釉・灰釉）・中国製輸入磁器・近世国産陶器が出土している。ここでは古代の一土壙、中世の二基の井戸遺構出土のものについて説明を加える。

A 古代の土器

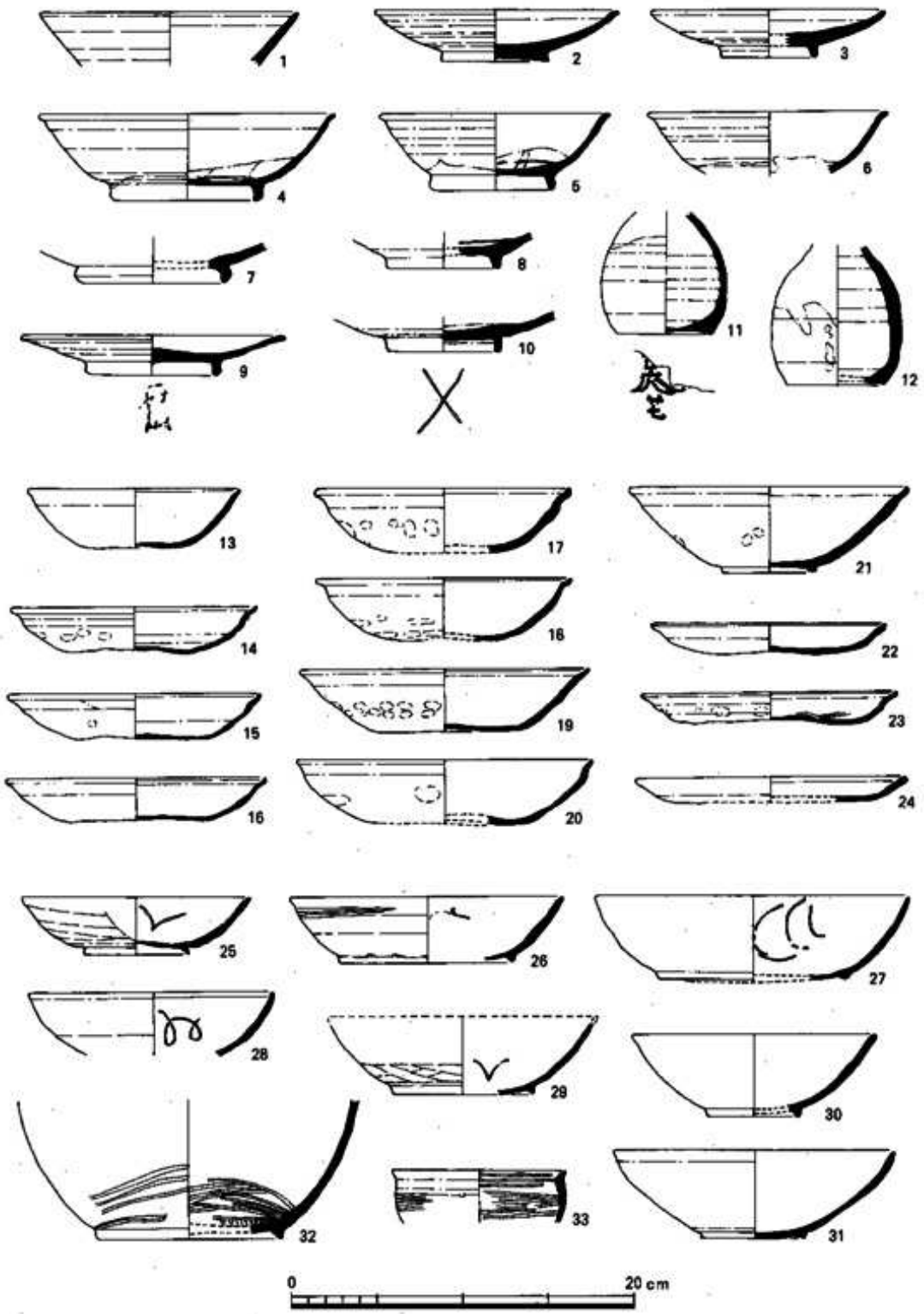
ＳＫ4028とその周辺の遺構・包含層からは平安時代前半の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・中国製輸入磁器が多量に出土した。これらを便宜上遺構（包含層）ごとに紹介していくが、これらの遺物は一括性が強く、ＳＫ4028に投棄されたものが、ベースである砂層の凹凸に混入した可能性が大きい。したがって、後項ではこれらの土器群を同一時期のものとして扱い、年代・編年上の位置付けを試みることにした。

ＳＫ4028出土土器（第２図・第３図１・２、ＰＬ３） 越州窯青磁椀（第２図１）は斜上方に立ちあがった口縁の端部が丸く収まるタイプで、蛇目状の高台をもつものであろう。

緑釉陶器皿（２・３）はいずれも硬陶系である。（２）は円板状の高台を削り出し、外底面にまで釉が施されている。口径14.3m、高さ3.0m。（３）は輪高台を貼り付け、高台内面にも釉が施されている。緑釉陶器はこのほかにも軟陶系の底部断片がある。やや時期の上るものであろう。

灰釉陶器（４～12）には椀・皿・小型瓶がある。椀は大型のもの（４）と小型のもの（５・６）があり、いずれも釉は刷毛塗りで施されている。内底面にも刷毛塗りによる施釉が認められるが、外面高台周辺は施釉されていない。皿（７～10）もやはり刷毛塗りにより施釉されていて、外面高台周辺は施されていない。（８）は椀の可能性もあり、やや古い時期のものであろう。内底面は施釉されていなくて、外面は高台の外側にまで施釉されている。（９）の口縁部外面には青灰色白濁釉が見られる。また、底部外面には墨書が認められるが判読は出来ない。（10）は内底面には施釉されておらず、転用硯として使用されている。底部外面には「×」の記号様のヘラ書きが見られる。小型瓶（11・12）は頸部・口縁部を欠いている。いずれも施釉はやはり刷毛塗りによるものであり、底部外面には糸切り痕跡が見られる。（11）の底部外面には「□廿七」の墨書が認められる。

土師器（13～24）には杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａがある。杯Ａ（13～20）には口径12.5cm（高さ3.5cm）のもの（13）、口径14～15cm（高さ2.5～3.0cm）のもの（14～16）、口径15cm前後（高



第２図　ＳＫ4028出土土器

さ3.5cm）のもの（17・18）、口径17cm前後（高さ3.5cm）のもの（19・20）がある。全般的に胎土には赤色クサリ礫・白色細砂粒・金雲母片を含み、色調は淡赤褐色あるいは淡灰褐色を呈する。内面はいずれもナデまたは粗い刷毛により仕上げられているが、外面は口縁端部を強くナデる以外は調整がなされていない、いわゆるｅ手法によるものである。杯Ｂ（21）は復原口径16.2cm、復原高5.0cm。ややゆがんだ器形で、内面にはナデが施され、外面は口縁端部以外は調整がなされていない。胎土には赤色クサリ礫・白色砂粒・金雲母片を含み、色調は淡灰褐色を呈する。皿Ａ（22～24）は（22）が口径13.5cm、高さ1.6cm。（23）は口径14.8cm、高さ1.6cm。いずれも胎土には赤色クサリ礫・白色砂粒・金雲母片を比較的多く含み、色調は赤褐色ないしは淡灰褐色を呈する。内面はナデまたは粗い刷毛で仕上げられているが、外面は口縁端部以外は調整がなされていない。（24）は復原口径15.6cm。口縁端部がやや肥厚し、内面に一条の沈線が見られるやや特異な形態である。胎土・色調とも他の杯・皿と共通する。

黒色土器（25～31・第３図１・２）はすべてＡ類である。杯（25～31）は杯Ａと認定できるものはなく、全て杯Ｂと考えられる。このうち外面にヘラ削りが施されているものは（25・29）の２点だけであり、（29）は体部下半だけの不完全なものである。いずれも胎土に若干の白色細砂粒と金雲母片を含み、色調は灰褐色ないしは淡赤褐色を呈する。壷（32・33）は大型のものと小型のものがある。（32）の外面はヘラ削りの上からやや丁寧な横方向のヘラ磨きが施されている。胎土・色調は杯に共通している。甕（第３図１・２）はいずれも外面ヘラ削り、内面は横方向の細かい刷毛目の上にヘラ磨きが施されている。（１）は外面にススが付着しているが、（２）はススが見られない。

その他の遺構・包含層出土土器（第３図３～21）　（３～５・13・14）はＳＤ4031の上面東西方向の溝状遺構から出土している。また（６～12）はＳＤ4031出土。（15）は付近の包含層出土であるが、ＳＫ4028と一連の遺構に伴っていたものであろう。

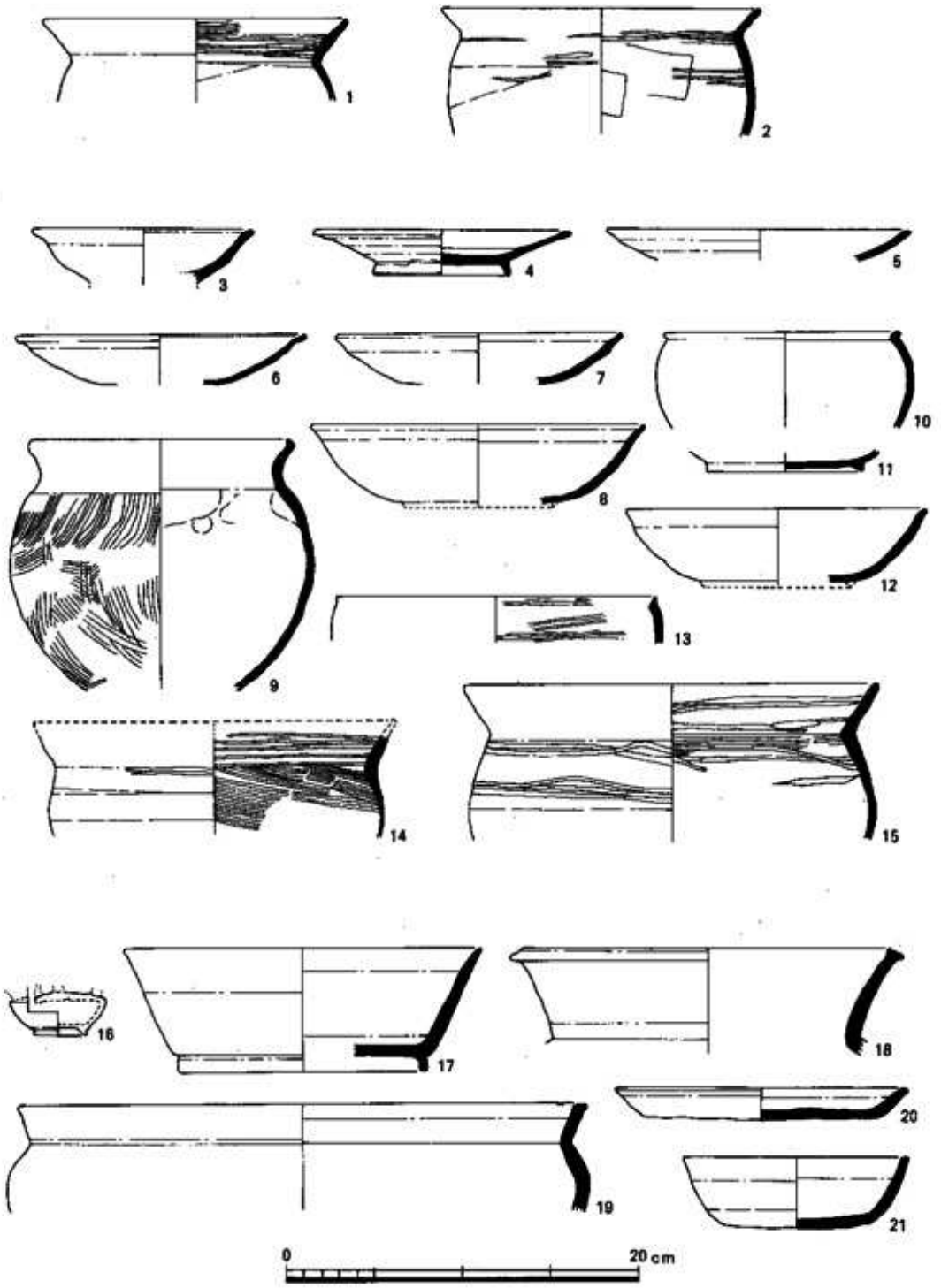
緑釉陶器椀（３）は口縁の一部しか残存していない。釉は暗緑色を呈している。

灰釉陶器皿（４・５）は（４）が刷毛塗りにより内底面まで施釉されている。

土師器杯Ａ（６・７）の外面は調整が行われていないが、杯Ｂ（８）は外面下半を若干ヘラ削りしている。甕（９）は外面に粗い刷毛目、内面に凹凸のない当て具痕跡が見られる。いずれも胎土・色調はＳＫ4028出土のものと共通している。

黒色土器（10～15）もすべてＡ類で、壷（10・11・13）、杯Ｂ（12）、甕（14・15）がある。胎土・色調はおおむねＳＫ4028のものに共通している。

須恵器（16～21）は図化できるものはすべて包含層から出土している。小型平瓶（16）は最大径5.5cm、残存高2.5cm。上面には自然釉が薄くかかっている。そのほかに杯Ｂ（17）・甕（18）・鉢（19）・皿Ａ（20）・杯Ａ（21）があるが、（15～18・21）は硬質で灰青色または淡灰青色を呈し、黒紫色の斑点が見られる。しかし、（19・20）の焼成は軟らかく、灰白色を呈する。



第3図　SK4028その他の遺構出土土器

ＳＫ4028出土土器の編年的位置

緑釉陶器はいずれも京都洛西の大原野古窯跡群のものであり、皿（第２図２・３）は外底面に釉がけを行うという９世紀末～10世紀初頭の技法的特徴をもっている。

灰釉陶器は黒笹14号窯式のやや古いもの（第２図８）が混じはするが、その他は刷毛塗りによる施釉、内底面の釉かけ、青灰色白濁釉の皿（第２図９）などすべて篠岡４号窯式の特徴を備えている。また、漬け掛けによって施釉された製品が一点も見られないところから、尾北窯での刷毛塗り施釉から漬け掛け施釉への技法変化が10世紀初頭頃であることを併せ考えると、このころを灰釉陶器からする年代の下限とすることができよう。

土師器では皿が少ない。特に器壁の薄い口径の小さいものがほとんど見られないが、これは遺構の性格によるものであろう。最も多い杯Ａは法量から３つのタイプに分けることができた。これらは口径では平城宮馬寮ＳＫ1623出土土器に近く、高さからも、器高2.5㎝以上を杯として皿と区別することが依然として出来そうである。しかし、製作技法においては、杯・皿ともにｃ手法（外面全面ヘラ削り）がほとんどなく、ｅ手法が圧倒的優勢を占めているという事実は、ｃ手法がなおも優勢であったＳＫ1623よりも後出である要素としてあげることができる。

これはＳＫ1623ではいくらか見られた高杯が、ＳＫ4028では全く見られないという事実とも矛盾しない。

黒色土器はすべてＡ類である。杯では杯Ａが消滅し、杯Ｂのみとなる。ｅ手法はここでも優勢で、ｃ手法は２点のみ（第２図25・29）であり、そのうちの１点（29）は外面体部下半だけがヘラ削りされていた。甕は大・小２つの法量があるようであるが、前後する時期の資料が乏しいために断定は出来ない。いずれも暗文手法の退化を認めることができる。

以上のような検討により、ＳＫ4028出土土器は、土師器法量の共通性と製作技法から、馬寮土壙ＳＫ1623に後続するもので、大きくは平城京東三坊大路側溝ＳＤ650上層（Ｂ）の範疇に入ると考えられる。土師器の様相に次の段階であるいわゆる続ＳＤ650Ｂに近いものがないわけではないが、平城京左京六条三坊十三坪の土壙ＳＫ21出土土器（黒色土器Ｂ類椀・漬け掛け灰釉陶器椀）とはなおも時間的差が明らかであると言えよう。

実年代は、緑・灰釉陶器の特徴から、10世紀初頭をその１点とする短かい時間に比定することができよう。

		灰釉陶器	土師器	黒色土器
ＳＤ650Ｂ	（古）ＳＫ1623		ｃ手法優勢	
ＳＤ650Ｂ	（新）ＳＫ4028	刷毛塗り	ｅ手法優勢・高杯消滅	Ａ類のみ・杯Ａ消滅・ｃ手法残存
続ＳＤ650Ｂ	平城京左京六条三坊13坪ＳＫ21	漬け掛け		Ｂ類出現

B　中世の土器

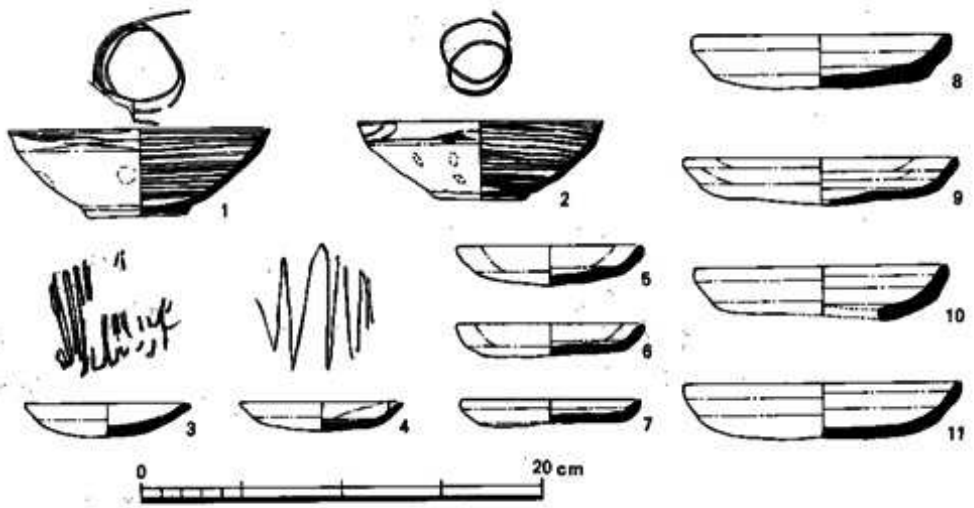
ＳＥ4030・4029の二基の井戸からは瓦器・瓦質土器・土師器・国産陶器が出土している。前者は瓦器椀が流通途上にある時期のものであり（中世前期）、後者は瓦器椀消滅以降（中世後期）の時期に属している。

ＳＥ4030出土土器（第４図、ＰＬ３）　瓦器椀（１・２）は（１）が口径13.0cm、高さ4.3cm、高台径5.0cm、内底面の同心円文はやや簡略化しているが、内面の暗文とはつながっていない。外面のヘラ磨きは口縁部だけに限定され、かなり粗くなっている。（２）は口径12.3cm、高さ3.9cm、高台径4.5cm。内底面の同心円文はさらに簡略になり、内面の略文、外面のヘラ磨きも粗い。高台はすわりを良くするために端面を部分的に削っている。

瓦器皿（３・４）は（３）が口径8.3cm、（４）が口径8.2cm、内底面のジグザグ状暗文は（３）の方が密に施されている。

土師器皿（５～11）は口径12.5～14.0cmのもの（８～11）、9.5cm前後のもの（５～７）に分けられる。前者はさらに口径12.5cm～13.0cmのもの（８・10）、3.5cm～14.0cmのもの（９・11）に分けられそうである。後者も法量によって２つのタイプに分かれる可能性はあるが、資料数が少ないため明らかにできない。

瓦器椀は複数の時期のものが混在すると考えるよりも、法量の規画性・統一性が失なわれているとみるべきであろう。土師器皿については、口径が縮小傾向にあるものが若干混じっているとすれば、構内遺跡ＳＥ2313やＳＥ3130出土土器と最も共通性が強く、13世紀後半～末に比定することができよう。

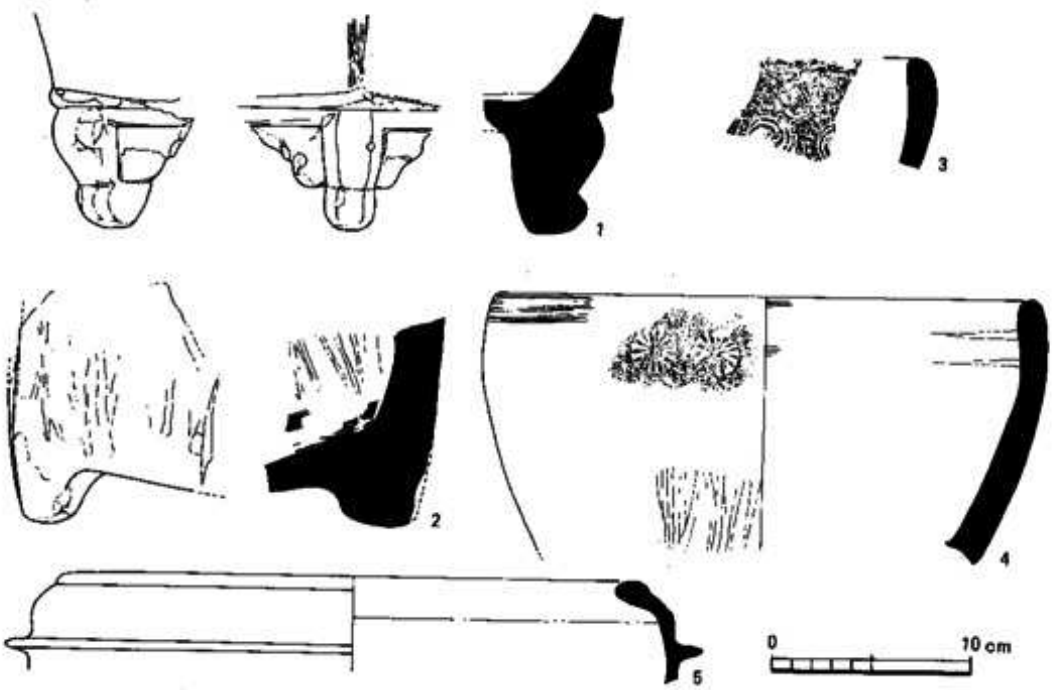


第４図　ＳＥ4030出土土器

ＳＥ4029出土土器（第５図）　瓦質土器火舎（１～４）は平面長方形のもの（１・２）と円形で外面肩部にスタンプを捺するもの（３・４）に分けられる。（１・２）は脚部分しか残存していないが、火舎部分は口縁部が斜上方にまっすぐひらく槽状の形態を呈していると考えられる。（１）の獣脚状の脚の両翼部分には花文状の刳り込みが見られる。（３）のスタンプ文様は尾の長い三ツ巴文の周囲に剣巴文が廻るものであり、（４）は16弁の菊花文様である。いづれも内外面に細かい刷毛目（またはナデ）の上からヘラ磨きによる暗文が施されているが、（４）の暗文が比較的密であるのに対し、（２）の場合は間隔が粗く、方向・範囲がかなり恣意的である。また、（１・２）の底部外面には離れ砂が使用されており、この時期の瓦質土器の底部（あるいは蓋天井部）の成形に際して離れ砂技法が広く用いられていたことを知ることができる。

土師器土釜（５）は口縁端部を外側に折り返して肥厚させるタイプである。胎土には灰色チャート片と長石粒、僅かであるが赤色クサリ礫を含み、焼成は堅緻で、色調は外面が淡黄褐色を断面が淡灰褐色を呈する。

土師器土釜は奈良市古市城跡出土の同タイプのもののうち、「応永四年」（1397年）の墨書銘のある資料よりも型式的に後出し、このタイプの下限が16世紀初頭であることを考えると、おおむね15世紀に位置づけることが出来よう。



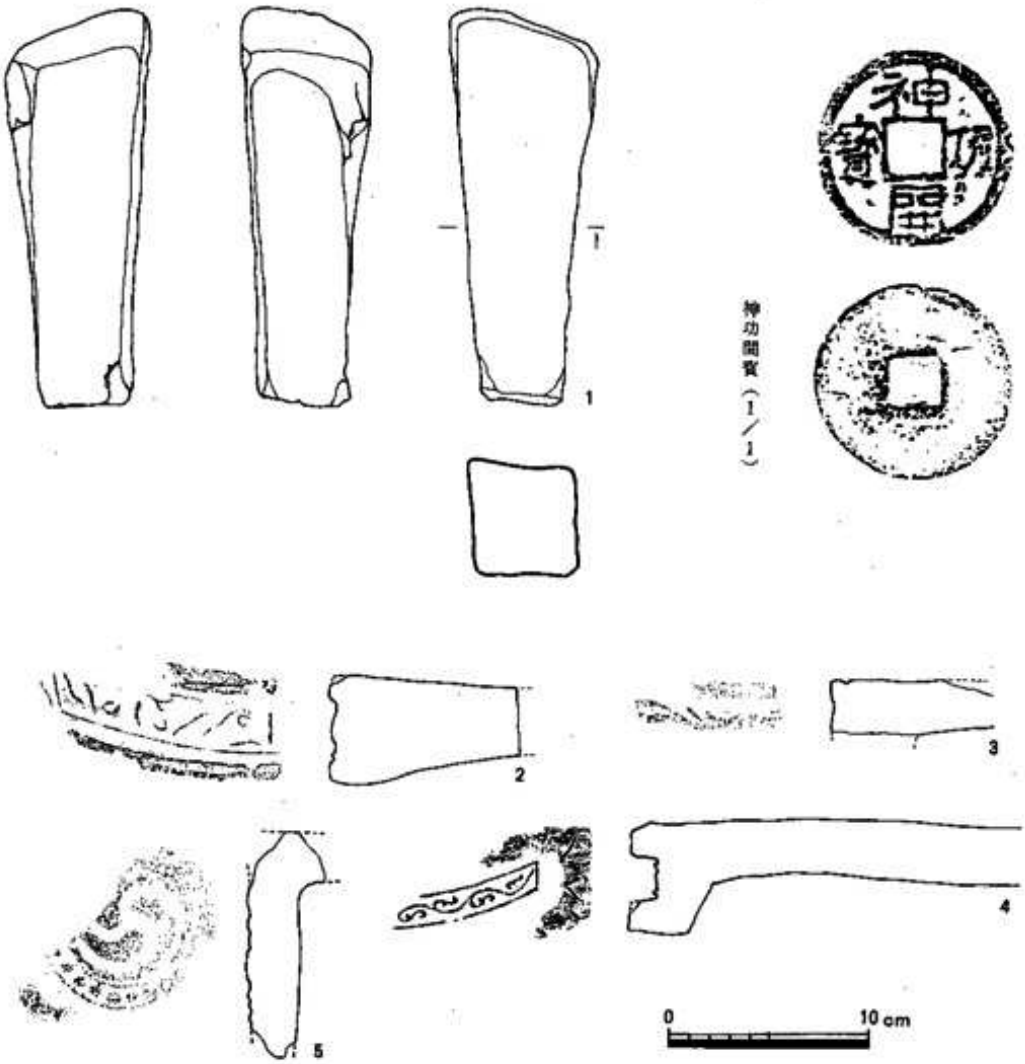
第５図　ＳＥ4029出土土器

2　木製品・石製品・金属製品

木製品はＳＥ4030から槌ノ子や大量の箸状木製品が出土している。柱根がいくらか出土しているが、時期の明らかなものはない。

石製品はＳＥ4029から砥石（第６図１、ＰＬ３）が出土している。ややきめの粗い砂岩質の石で、長側面４面とも使用されている。

金属製品では円形鍍金銅片と神功開宝（第６図）が出土している。後者は功の旁が細長い「刀」になっているいわゆる長刀神功と呼ばれるものである。また、宝の字の下部から功の字の下部にかけて笵キズが認められる。



第６図　砥石・銭貨・軒瓦

3　瓦

瓦は古代末～中世にかけてのものがあるが、特にＳＥ4029から多く出土している。ここでは軒瓦だけ説明を加える（第６図２～５、ＰＬ３）。

半截花文軒平瓦（２）　蕊が表現されたかなりデフォルメされた半截花文が中心とその左側１単位分表現されている。その間を二本の樹枝状の屈曲線で埋めている。凹面は糸切り痕の上にやや粗い布目が認められ、凸面は顎部が横方向の削り、顎部から平瓦部にかけてタテ方向の削りが施されている。

唐草文軒平瓦（３）　上からドに向って左右対称に鳥の羽根状にひらく唐草文であるが、全体の文様構成は明らかでない。凹面には粗い布目、凸面には縦方向のナデが見られる。

（偏行）唐草文軒平瓦（４）　ＳＥ4029出土。内区は右から左に流れる唐草文で彫りが浅く、周縁は高くて平坦である。凹面は布目の上から横方向にナデ仕上げをしており、瓦当部上面を横方向に削っている。凸面は顎部が横方向のナデ、平瓦部をタテ方向のナデで仕上げている。

巴文軒丸瓦（５）　ＳＥ4029出土。文様面の磨滅がはなはだしい。内区は三巴文で外区の珠文は密に配されている。瓦当裏面には不定方向のナデが見られる。

（坪之内　徹）

PL．1　発掘区全景（西から）

（東から）

▲ 全景（東から）　▼ SE4030

PL. 3　土器・石製品・瓦

SK 4028

4

2

3

9

5

11

12

SE 4030

1

2

3

4

6

8

10

SE 4029

軒瓦

5

3

2

4

1/3

あとがき

本学図書館増築および情報処理センター予定地の発掘調査が行われてから約三年が経過しました。この度、その調査結果に関する概報を発刊することができました。

従来からも、本学の校舎・施設の建設に伴う発掘調査には、奈良国立文化財研究所をはじめ関係各位から多大の御援助、御協力を賜りましたが、この概報にかかる調査においても変わらぬ御力添をいただきました。改めてあつく御礼申し上げます。

蔵書の年々の増加による図書館の増築、大型コンピューター導入のための情報処理センターの建設は、本学の研究・教育の発展のために欠くことのできない事業でありましたが、関係各位の御尽力によって、その建設予定地の発掘調査が滞りなく行われ、両者とも無事建設されました。この調査に携わって下さいました皆様に、重ねて感謝申し上げます。

発掘の成果につきましては、本冊子に述べられている通りでありますが、古代から近世（江戸時代）にかけての重層遺跡の上に立地している本学のことであり、今回の調査でも、古代の土壙、9世紀末の緑釉陶器・灰釉陶器、中世の遺構、近世の奈良奉行所全体の規模を知る上に不可欠な堀跡など、重層遺跡ならではの数々の新たな発見がありました。既刊の概報Ⅰ～Ⅲで明らかにされました調査結果、およびすでに発掘を終えました国際交流会館建設地の調査結果などと併せて、本学敷地の地下遺構・埋蔵文化財の知見の集成が期待されるところであります。

膨大な出土遺物の整理・概報Ⅴの刊行など、まだ問題が山積しておりますが、本学各部局の御協力を得て、是非、それを解決しなければならないと考えております。

今後とも、関係各位の一層の御理解と御協力を賜りますよう御願い申し上げる次第です。

最後に、御多忙の中、本概報の原稿を御執筆下さいました皆様にあつく御礼を申し上げます。

1989年3月

発掘調査会委員長　中塚　明

奈良女子大学構内遺跡
発掘調査概報Ⅳ
平成元年3月30日　発行
編　集　奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会
発　行　奈良女子大学
印　刷　明新印刷株式会社